

しての給へと申ければ、あのへさきに村千鳥のまりの衣めしたるこそあやし  
く思ひ奉れと申ければ、辨慶あれは、かがの白山よりつれたりし御坊あり、あの  
御房ゆへ所々にて人々にあやしめらるゝこそ、せんおけれと云けれとも返事  
もせて、打うつふきて居給ひたり、辨慶腹立たるまがたにありて、はしりよりて、  
舟ばたをふまへて、御かいなをつかんでかたにひつかけて、はまにはしりあが  
り、砂の上にかはとあげ捨て、腰あるあふぎ抜出し、いたはしけもあくつゝけ打  
にさんくゝにぞ打たりける、みる人、目もあてられざりけり、略中平権のかみ是  
を見て、まへてはぐる山ぶし程、情なきものはあかりけり、判官にてはあしと仰  
せらるれば、さてこそ候はんぞるに、あれ程にいたはしく、あさけあくてうち給  
へる、こそ心うけれ、せんぞるところ是はそれがしが打參らせたる杖にてこそ  
候へ、かゝる御いたはしき事こそ候はね、是にめし候へとて、舟をさしよまる、梶  
取のせ奉りて申けるは、さらばはや舟ちんちんして、こし給へといへば、いつのあ  
らひにはぐる山臥の舟ちんちんしけるぞといひければ、日頃取たる事はあけれ  
とも、御坊のあまりにはういつにおはまれば、とりてこそわたさんぞれ、とく舟  
ちんちんし給へとて、舟をわたさき、辨慶わとのかやうに、我らにあたらは、出羽の

國へ、一年二年の内に、來らぬ事は、よもあらじ、さかたのみあとは、此少人のち、  
さかた次郎殿の領あり、たゝ今あたりかへさんまるものとぞおとしけれとも、  
權のかみあにともの給へ、舟ちんちんではえこそわたままじけれとて、わたさ  
き、辨慶いにしへとられたるれいあけれ共、此ひか事したるによつて、とらるゝ  
ありとて、さらばそれたひ候へとて、北のかたのき給へる、かたびらの尋常ある  
をぬがせ奉りて、わたしもりにとらせけり、權のかみ是取て申けるは、法にま  
かせて取ては候へ共、あの御ばうのいとおしければ、參らせんとて、判官殿にこ  
そ奉りけれむさし房、これを見て、かたをかが袖をひかへて、をこがましやたゝ  
あれもそれもおあじ事ぞとさゝやきける、かくて六だうじをこえて、このは  
やしをさして、あゆみ給ひける、略中かくまるほとに日もくれければ、あくゝ  
やとり給ひけり、やゝありて北のかた、さんづの川をわたるこそ着たるものを、  
はかるゝあれ、すこしもたがはぬ風情かあとしてい、はせの森に着給ふ、其日は、こ  
ゝに泊り給ひけり、あければ、ぐるべのやどにこそしやませ給ひて、ぐるへ四  
十八かせのわたりを越、いちふりしやうとうたのわかかんはらあかはしとい  
ふところをととりて、いはとのさきといふ所につきて、あまのとまやに宿をか

りて、夜とともに、御ものかたり有ける略中かくていはとのさきをも出たまひて、越後の國府直江の津はあぞの、観音堂と云所につき給ふ、

〔三州志〕

三 雜錄 考 翌日ハ俱黎伽羅俱黎伽羅ニ河内郡梅入谷ヲ望ムテ諸平ノ亡靈

ヲ吊ヒ彌陀經ヲ誦シ、松永ノ八幡社彌陀社也ニ宿ス明クレハ如意渡六助寺

同記ニ如意渡トアルハ、今ノ古國府ナルヘシ、ニ向ラニ津吏平權守云フ、此所ハ

守護ノ居近シ、此守護トハ鎌倉ヨリ如意城ニ山伏安ニ渡スマシキ令アリトテ、

之ヲ沮ム辨慶伴ヲ扇ヲ以テ殿ク義經ヲ沙邊ニ打倒シ、義經ニ非ザル體ヲ示シ

テ此渡ヲ過ク、本朝通記ニハ此時權守舟賃ヲ乞フユヘ是カ爲ニ義經ノ室帷子

ヲ脱テ與フ、土人相傳フ六波寺ノ波ニテ判官舟賃是ヨリ六助寺也ニ六助寺ハ

此頃六助寺ニヤ、寺ヲ過キ奈吳ノ林奈吳ハ萬葉集所々ニ見ユ、即今ノ放生津也

ヲ指テ歩ミ、岩瀬ノ森今ノ岩瀬也、延喜式ニ宿シ翌朝ハ黒部四十八箇瀬部也

新川郡ナリ、四十八箇ヲ涉リ、市振淨土ト宇田ノ脇蒲原ニ到ルト云云、

〔富樫家譜〕

文治三年、九郎判官義經勅勘を得て諸國を潜に經廻あるとて、加

賀國へも鎌倉よりの下知有て、安宅海道に關を居て、其輩咎しむ、然、其年の三

〔越中舊事記〕

判官雨はらし女岩男女

り、越中伏木の港へ上り夫より、越後路を経て終、奥州の秀衡が許、下りける、

義經奥州下行の時、大石の下洞にありたる所にて、急雨をはらし給ふとて、今に

雨はらしと云、

文治三年丁未 紀元千八百四十七年

二月 朔癸卯 一日、甲辰、源賴朝、院旨を奉して、越中國吉岡莊の地頭を改替す、

〔吾妻鏡〕

七 三月二日甲辰、越中國吉岡庄吉岡村ありに地頭成佐不法等相累之

問早可令改替之由、經房卿奉書到來、仍則被獻御請文、

去月十九日御教書、今月二日到來、謹令拜見候畢、越中國吉岡庄地頭成佐事任

御定早可令改定候、但彼庄未復本之間、御年貢不式數之山、成佐申之候、重相尋

候而、可令改他人候也、以此旨可令波達給候、賴朝恐々謹言

三月二日

文治四年戊申 紀元千八百四十八年

七月乙未

二十四日戊午院宣を東大寺に下し其の所領の越中等諸國に在る土地の役夫工米を免除す、

〔東大寺要録〕二

東大寺

注進 寺領役夫工免除證文事略○中

一卷三枚六箇寺領役夫工免除宣旨嘉應元八月十三日、

所謂三の國大井庄茜部兩庄 伊賀國黒田薦野湯船玉瀧

山城國玉井泉木津木屋所 攝津國猪名水成瀬兩庄、

丹波國俊河庄 越中國入善庄等也略○中

嘉應二年五月十九日略○中

右件役免除請文等開印藏隨可有進上如件、

文治四年七月十三日

寺主大法師嚴信

東大寺領諸國庄々役夫事被免除了、可令存其之之旨給者、依院宣執達如件、

文治四年七月廿四日

權右中辨在判

謹上 別當法印御房

建久元年庚戌紀元千八百五十年

正月丙辰

二十四日己卯藤原資家、越中守に任し、藤原忠經をして越中權守を兼ねしむ、

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中守藤原

藤原資家 建久元年正月任、

〔公卿補任〕 非參議從三位藤原忠經 左近衛中將建久元年正月廿四日兼越中

權守○建久元年建久四年十二月九日任參議中將如元○建久四年

○資家の補任、姑く忠經の任せられたる日に繫く、

四月甲申

十九日壬寅賴朝、院宣を奉して、越中等諸國の地頭に神宮の役夫工米の進濟を催す、

〔吾妻鏡〕十二月廿二日丁酉造伊勢太神宮役夫工米事、諸國地頭等有未濟之

旨、去年十二月帥中納言奉書到著之間、日者被經沙汰今日被奉御請文云々、盛時

染筆云々、

四月十九日壬寅造太神宮役夫工米地頭未濟事、頻有職事奉書神宮使又參訴之間、可致不日沙汰之旨下知給於有子細所々者、今日令注進京都給、因州并盛時俊兼等奉行之、其狀云、

內宮役夫大工作新未濟成敗所々事略○中

越中國 弘田御厨同加納略○中

文治六年四月十九日

是月、主殿寮、越中等諸國の油仕丁等の、辨濟を怠るものを注進す、

〔壬生文書〕主殿寮年預  
伴守方解狀

主殿寮

注進 諸國油大糶米仕丁等糶濟否、并便補保、及造勘文、未勘文、國々等散狀事、

略○中

一背往古切足寄事於武士不濟國

伊勢年別油七斗三升五合九夕除口油定

參河年別油五石四斗五升五夕除口油定仕丁一人前任併未濟也

遠江年別油四石五升九合除口油定仕丁五人同前

駿河年別油一石一斗除口油定仕丁四人初任以後未濟

甲斐年別油二石二斗七升九合二夕除口油定同前

越中年別油三石八斗二升一合四夕除口油定仕丁一人同前

越後年別油四斗五合升除口油定前任未濟

出雲年別油五石五升七合八夕寄造大佛難濟

已上七箇國已未濟略○中

右件國々年々濟否等、大概注進之、抑自去治承二年、迄于去元曆元年之比、永无辨濟國之間、兩度大嘗會、內侍所御燈、日貢、陣頭常燈、年中恒例神事佛事以下用途料油等、一事無懈怠、勵勤了、於彼此者、他司之勤各以令斷絕了、文治以後天下落居之處、彼國々之受領、永忘辨濟之心了、當寮之勤官皆所知也、有勤無勤之前司、尤可被抽賞之處、更無其沙汰之間、無其勇歎、爰廿六日可有立后云々狀、女御藤原任子中宮と右注進之國任奏狀、兼日爲被宣下、大概注進如件、

文治六年四月日

年預

建久二年辛亥

紀元千八百五十二年

後鳥羽天皇建久二年

後鳥羽天皇建久二年 四年

五月 戊申

十九日、丙西大寺、宣旨に依り其の所領越中等諸國の莊園を注進す、

〔西大寺文書〕〇大和

注進 西大寺所領諸庄園現存日記事〇中

越中國

射水郡榛山庄四百六十四步〇中

已上二十七處、依流記公驗明白注進之、

右依宣旨注進如件、

建久二年五月十九日

都維那法師進興

寺主大法師俊牒

上座大法師定慶

建久四年癸丑

五紀元千八百

正月 己巳

二十九日、丁侍從源有通をして、越中權介を兼ねしむ、

〔公卿補任〕 源有通 文治五年九月十六日任侍從建久二年正月五日叙從五

位上、簡一、改盛房爲有通、同四年正月廿九日兼越中權介、同六年十二月十日叙正

五位下、有房朝臣造會昌門賞、同九年十二月九日任右近少將、〇承元四年、

三月 戊辰

十六日、癸幕府、兵衛尉泰清に命して、平家の與黨越中盛繼等を討たしむ、

〔吾妻鏡〕 十三 十六日癸未平家與黨越中二郎兵衛尉盛繼已下、隱居近國之由、

有風聞早可追討之由、被仰兵衛尉泰清云々、

〔參考源平盛衰記〕 七四 盛次ハ都ニモ安堵シカタクテ、但馬國ニ落行テ、氣比

權守道廣カ許ニ隱居タリ、人是ヲ知ス、按盛次事蹟不可考、始ハ厩ニ仕ハレテ馬

ヲ飼ケル、馬ヲモ能飼ケリ、馬洗ニ出ツ、或ハ乘テ馳物射マテナトシケリ、後

ニハ道廣カ娘ノ有ケル方ヘ遣シテ、今參ノ能仕ハル、ソ、宿直ナトサセヨトテ

遣シケリ、次第ニアリツル程ニ、如何シタリケン彼娘ニ近ツキテ、夜夜忍テ通ケ

リ、雖獲ヲトラス風情ニテ、隠ナカリケリ、道廣モ盛次ニテ有ト知テケリ、盛次忍

ヒ度々京ヘ上テ、年比知タリケル女ノ許ヘン通ケル、或夜彼女サテモ何クニオ

ハスルソ、加様ニ昔ノヨシミヲ忘給ハテ、情ヲカケ給ヘハ、露疎ニ思奉ラスト懇

ニ申ケレハ、我ハ但馬國氣比權守道廣ト云者ノ許ニアリ、穴賢人ニ披露スナト

後鳥羽天皇建久四年

ノ語ケル、鎌倉殿ヨリ盛次ヲ弼テモ討テモ進ラセタラン者ハ、勸賞ヲ行ハルヘキ由披露アリ、何クニカ隠居タルラン、弼テ勸賞蒙ハヤト申ケル、盛次サハカリ披露スナト打解テ語タルニ、女ノウタテサハ、ワラハコソ次郎兵衛カ在所ハ知タレト申ケレハ、男悦テ女ニ能ク尋問テ、鎌倉殿ニ此由ヲ申テ、道廣ニ仰テ、弼テ進ラスヘキ由、建久五年ノ比仰ラレニケリ、道廣、境節大番ニテ在京シタリケリ、吾身ハ下ラス、妹、朝倉大夫高清、并家人等ニ盛次弼テ進ラセヨ、相搦テ逃スナト申ケル、輒討ヘクモナカリケレハ、温室ニテ弼ヘシトテ、温室ニオロシテシタ、カ者七八人用意シタリ、盛次温室ニオリケルニ、腰刀ニ帶テ、卷テ、温室ノ内ノナケシニ置ケル、是用心ノ爲也、盛次温室ニ下タリ、此七八人ノ者弼ントス、盛次サ知タルトソ、己等ニハ一度モ弼ラルマシキト云テ、温室ノ内ヲ走出タリ、逃モ隠モシツルモノナラハ、權守カ大事ニナルヘシ、又弼ラレスシテアラハ、覺束ナクモ怖敷モ、汝等思ハンスレハ、ニクマシ繩ニテハ、シハラルマシト云テ、帶ヲ以テシハラレケリ、氣比權守、盛次ヲ鎌倉殿ヘ進ラセタリケレハ、盛次ヲ召出テ、如何汝ハ平家ノ侍ナカラ、平家ノ一門ニテアンナルニ、西海ノ浪ノ上ニテ、平家ノ人々ト一所ニテ、討死ヲモナトセサリケルソト仰ラレケレハ、平家ノ公

達サセルシ出シタル事モナクテ亡給ヌ、ヨキ主ヲモ執候カトテコソ、殘留テ候ヘトソ申ケル、抑汝ハ九郎ニ仕候ハレケルナト仰ラレケレハ、サル事候キ、若ヤ伺奉候トテ、近附候シカトモ、判官殿意得タリケニテ、心ユルシモ候ハス、夜ハ御フシトモ人ニ知レスシテオハシマシ候シカハ、恐シクテ自ら走向ニハ、見參ニ入事モ候シカトモ、御目ヲハタト見合テオハシマシ候シカハ、少モスキマ候ハテ、組進ラセント思フ心モ候ハス、都ヲ落サセ給テ後ハ、御心置セ給テ、在所ヲモ知セ給テハ、サテコソ候シカ、其後ハ腰刀ノカ子ヨキモ、征矢ノ尻ノカ子ヨク候モ、鎌倉殿ノ御爲トソ惜持テ候ツレトモ、今ハ運盡テ角召捕レ候ヌル上ハ、力及ハストソ申ケル、鎌倉殿打ウナツキテ、是等生テ召仕ハハヤト思給ケレトモ、平家侍ノ中ニハ、是等一二ノ者也、虎ヲ養フ愛アリトテ、終ニ盛次斬レニケリ、大名小名惜マヌ人モナカリケリ、云々、以上、一本佐野本云、盛次ハ但馬國ニ落行テ、氣ヲ、海底ニ四五町許ニ風情ニテ、夜ニ成ハ、馬引出テ、怪ミケル程ニ、如何物射カレ、瀧間ヨリ、盛次當國、鎌倉殿、居間給テ、但馬國住人朝倉太郎高澄ニ、御教書ヲサレ、朝倉大夫ノ聲ナレハ、如何シテ弼ントスルニ、取附ハルニ、浴室ニ起シテ、弼倒サレ、互ニ身ハ、瀧間ヨリ、取ヨメ、サレ、打ナヤシ、力ニ強ケリ、頼テ、關東ヘ進セ、三十三人ハ、殿ト大庭

ニ引居テ、如何汝ハ同平家ノ侍ト云ナカラ、故親ニテ有シナルニ死サリケルソ、  
盛次申ケルハ、其平家ノ餘ノ侍ト云ナカラ、故親ニテ有シナルニ死サリケルソ、  
テ殘テ候、征矢ノ尻ノ鉄好ヲモ、太刀ノ身ノ好ヲモ、鎌倉殿ノ御爲トコソ、  
候ツレトモ、運盡果テ平家ノ方人ニ候ヘハ、角成候ヌトソ申ケル、鎌倉殿志ノ程  
神妙也、頼朝ヲ惡マハ、資テ仕ハシ、如何、盛次重テ申ケルハ、勇士ニ君ニ仕ヘス、盛  
次程ノ者ニ御心教給テ、必御後悔候ヘシ、只御恩ニ疾首ヲ召ルヘシト申ケレハ、  
由井濱ニ引出テ斬テ、必御後悔候ヘシ、只御恩ニ疾首ヲ召ルヘシト申ケレハ、  
云々、但佐野本通廣作、道弘、

〔参考〕

〔東鑑要目集成〕

下

盛繼ハ、越中前司盛俊カ二男也、盛繼但馬國ニテ病テ疾ヌ

ト、古本東鑑ニ在、彼國ノ士人、盛繼カ墓ハ、但馬國木崎郡湯島ノ河端ニ在ト云、

建久九年戊午

五紀元千八百五十八年

正月

己亥

三十日、辰藤原公長、越中守に任す、

〔三長記〕

正月廿八日丙寅晴、自今日被行除目、略中

卅日戊辰、今日主上

略中、子刻許始筈文、左中右中權

公卿民部卿別勸盃

等如去夜、執筆及半之間、頭中將招予示云、可退出、除日清書事等可申沙汰、是依昇

進歎、大間被見之後退出故實也、頗無謂、然而整承諾、略中

越中守藤公長○前後補了

〔公卿補任〕

國史大系本 非參議從三位藤公長卅六入道按察使、三字マ作前中納言實教三ニマ男、母入道太宰權帥光隆卿女、同公賴マ文治二十一千ニマ十七叙爵、大宮未給、建久二六四從五上、同五正卅丹波守、同九正卅越中守、實教卿給丹波替、正治元正五正五下、皇后宮御給、同十二月九日右兵衛佐、越中守、建仁二正廿一復任、同日叙從四下、承明門院當年御給、○承久元年

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司越中權

介藤原重房 建久七年十二月任、

土御門天皇

元久二年乙丑

六紀元千八百六十五年

正月

己未

二十九日、丁藤原賴繼、越中權守に任す、

〔明月記〕

補寫本 十六十七

正月廿九日、天晴、今日除目入眼云々、略中

土御門天皇元久二年

越中權守藤賴繼

九月甲申

十六日、記官符を下して、祇園社領越中國黑川郷堀江保の國役等を免除す、

〔八坂神社文書〕山城

太政官符、越中國司

應遣官使國使相共堺四至打勝示、永停止所々并大祓清祓使關入大小國役等、  
令大別當大法師晴圓門弟相傳領掌、感神院六月御靈會用途料、便補當國堀江  
保壹處事、

在管新河郡黑川郷内

四至東限横大路、南限小井手、江流、  
西至四限小井手、北限賀積、

右得晴圓去月日解狀備謹檢案内、件保者當六月十五日御靈會導師呪願百僧布施供米、樂人舞人饗祿料所也、先師立有去正治二年爲不輸也、勤行神事可令立有門弟相傳領掌之由申下院宣畢、其後社用無止、晴圓傳領誠是嚴重異他、相承無妨之神領也、然而末代國司當于遷替之姓、非無日御供四箇保之例准官省符地、停止官使檢非違使、大祓清祓使等關入、免除役夫工大嘗會造内裏、

〔貢蘇已下恒例臨時勅院事大小國役可令晴圓門弟相傳領掌之由、被下明時之風術欲備後代之龜鏡、兼又遣官使國使、相共堺四至打勝示、永欲斷後司之宰籠、望請天恩且任先宣旨、且因准傍例、被裁許者、彌知神事之嚴重、奏祈天長地久之御願者、正二位行權中納言藤原朝口臣定輔宣奉勅依請者、國宣承知、依宣行之符到奉行、

右少辨正五位下藤原朝臣兼定花押 修理東大寺大佛長官正五位下行主殿頭

兼左大史小槻宿禰花押

元久二年九月十六日○本文書太政官印四箇ヲ踏セリ

十一月癸未

二十九日、辛藤原賴季、越中守に任す、

〔明月記〕補寫本十六十七

十一月卅日、自夜甚雨、已時許除目、少々傳聞、無殊事、○中略

越中守藤賴季、

建永元年丙寅和元六年八月

十一月戊寅

藤原宗明、越中守に任す、

土御門天皇元久二年 建永元年



土御門天皇承元二年 順德天皇建曆元年

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中守 藤原宗明

承元二年七月任、  
承元二年七月任、

承元二年戊辰

紀元千八百六十八年

七月

戊辰

九日、丙午藤原仲經、越中守に任す、

〔公卿補任〕

參議正三位藤原仲經

修理大夫備中權守、承元二年七月九日辭大

夫、任越中守、○承元二年の條、

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中守 權掾大江佐尚

正治元年三月任、  
正治二年十一月任、

介射水輔道

順德天皇

建曆元年辛未

紀元千八百七十一年

四月

壬午

六日、亥幕府、越中人院林二郎をして、石黒莊院林大海兩郷、惣追捕使職を安

堵せしむ、

〔三寶院文書〕

山城

實朝奉書

奉行飯尾修理進出道宏照

本御下文

越中國石黒庄内院林、大海兩郷惣追捕使職沙汰之間、他所地頭等企違亂事、早令  
停止任先例致其沙汰、且注進子細可蒙御裁定之狀、依鎌倉殿仰執達如件、

建曆元年四月六日

散位中原季時花押奉

院林二郎殿

○院林大海兩郷に係かる紛争和興濫妨等の事は、延慶元年十一月二十三日、  
延元元年二月七日、三年閏七月十一日、興國元年九月八日、五年十一月二十八  
日、正平六年四月一日、十一年十二月四日の諸條に散見せり、

建保三年乙亥

紀元千八百七十五年

順德天皇建曆元年 建保三年

順德天皇建保三年 承久元年 二年

正月 朔 辛酉

十三日、癸酉民部少輔藤原長倫をして、越中權介を兼ねしむ、

〔公卿補任〕

藤長倫 建仁二月十三日越前權守承元三五從五上〔策〕十月

卅民部少輔建保三正五正五下〔策〕同十三日兼越中權介同四正十三式部少輔中

略貞應元正六從四上同廿四日兼越中元仁正十七正四下嘉祿二正廿三兼左

京權大夫○天福元年の條

承久元年己卯 紀元千八百七十九年

八月 朔 甲子

源資俊、越中守に任す、

〔大日本史〕

三百八十四國郡司、越中守欄

源資俊 承久元年八月任、  
大掾三善倫重 承元三年二月見  
大掾藤原家光 承元四年正月任

承久二年庚辰 紀元千八百八十年

正月 朔 壬辰

二十二日、癸丑文章博士菅原淳高をして、越中權介を兼ねしむ、

〔公卿補任〕

菅淳高 建保四六正五從四上、權中納言親經卿興福寺供養行事

賞讓十二月十二豐前守〔治國勢〕承久元正廿六正四下、四月廿八文章博士同二正

廿二兼越中權介同三十一院昇殿貞應二正一御侍讀○貞永元年の條

十月 朔 丁巳  
十四日、庚午幕府、伊勢國乙部郷越中國小針原莊、地頭職新藤氏に新券を給す、

〔進藤文書〕

楓軒文書 纂所收書

新藤内成定法師孫娘彦熊申、伊勢國乙部御厨内乙部郷并越中國小針原庄内靜  
林寺地頭職代々御下文及手繼讓狀紛失事、如申狀者、今月三日夜、於鎌倉住宅、爲  
竊盜被取資財物之刻、件證文等被盜取畢云々、而彼兩所故右大將殿御時以後相  
傳知行無異儀、縱雖紛失之書、不可有相違之狀、依仰下知如件

承久二年十月十四日

陸奥守平〔花押〕

仲恭天皇

承久三年辛巳

八紀元千八百一十一年

六月甲寅

八日、辛酉北條義時、將に京師を犯さんとし、兵を二道に分ち、北條朝時をして北陸道より進ましむ、官軍の將宮崎定範、石黒・林等を従ひ、之を越中に拒きて敗績す、

〔吾妻鏡〕

北五

廿五日、戊申、自去廿二日至今曉於可然東土者悉以上洛於

京兆、所記置其交名也、各東海東山北陸分三道、可上洛之由、定下之軍士惣十九萬騎也

東海道大將軍 從軍十萬余騎

相州、武州、同太郎武藏前司義氏、駿河前司義村、千葉介胤綱

東山道大將軍 從軍五萬余騎

武田五郎信光、小笠原次郎長清、小山右衛門尉朝長、結城左衛門尉朝光

北陸道大將軍 從軍四萬余騎

式部丞朝時、結城七郎朝廣、佐々木太郎實信

六月八日、辛酉今日、式部丞朝時、結城七郎朝廣、佐々木太郎信實等、相催越後國小國源兵衛三郎頼繼、金津藏人資義、小野藏人時信以下輩、上洛之處於越中國般若野庄、宣旨狀到來、佐々木次郎實秀、立軍陣讀之、士卒應勅旨、可誅右京兆之由也、其後相逢于官軍宮崎左衛門尉、精屋乙石左衛門尉、仁科次郎友野、右馬允等、各相具林石黒以下在國之類、合戰結城七郎殊有武功、乙石左衛門尉被討取訖、官軍雌伏加賀國住人林次郎、石黒三郎爲降人、來向于李部、并朝廣等陣、又武州逗留野上

〔承久記〕

式部丞北陸道へ向ヒ候シカ、道遠ク極タル難所ニテ、未著タリ共聞

へ候ハズ、都へ責入ン日、一萬透テハアシカリナン、小笠原次郎殿北陸道へ向ハセ給へ、長清ハ山道ノ惡所ニ懸テ馳セ上候ツル間、關太良ニテ馬共乗ツカラカシ、肩背膝カケ爪カ、セテ候、又タ大炊渡ニテ若黨共手負セテ候へハ叶ハジト申ケレバ、武藏守只向ハセ給へ、勢ヲ付進ラセントテ、千葉介殿筑後太郎左衛門尉中沼五郎伊吹七郎是等、ヲ始メテ一萬騎被添ハ小關ニ懸リテ伊吹山ノ腰ヲスキ、湖ノ頭リヲヘテ西シ、近江北陸道へゾ向ケル、式部丞朝時ハ五月晦越後國府中ニ著テ勢汰アリ、枝七郎武者加地入道父子三人、大胡太郎左衛門尉、小出四

郎左衛門尉五十嵐兼ヲ具シテゾ向ケル越中越後ノ界ニ蒲原ト云所アリ、略○中越中ト加賀ノ界ニ砥並山ト云フ所有、黒坂志保トテ二ノ道アリ、トナミ山ヘハ仁科次郎、宮崎左衛門向ケリ、志保ヘハ糟屋有名左衛門伊王左衛門向ヒケリ、加賀國住人林富樫井上津旗、越中國住人野尻河上石黒ノ者共少々都ノ御方人申テ防戦フ、志保ノ軍破ケレバ京方皆落行ケリ、其中ニ手負ノ法師武者一人カタハラニ臥タリケルカ、大勢ノ通ルヲ見テ、是ハ九郎判官義經ノ一腹ノ弟糟屋ノ有名左衛門尉ガ兄弟刑喜坊現覺ト申者也、能敵ヲ打テ高名セハヤト名乗ケレバ、タレトハ不知敵一人寄合、刑部坊カ首ヲトル、式部丞砥並山黒坂志保打破テ加賀國ニ亂入、

〔參考〕

〔三州志〕三 雜考 承久三年辛巳夏四月 後鳥羽上皇北條陸奥守義時ヲ追討スヘキノ院宣アリ、義時怒リ、北條相模守時房武藏守泰時ヲシテ却テ之ヲ撃タシム、二將十萬ノ軍ヲ帥テ、東海道ヨリ向フ、武田五郎信光小笠原次郎長清小山左衛門朝長結城左衛門朝光ハ、兵子五萬ニ將トシテ東海道ヨリ出ツ、北條式部丞朝時結城七郎朝廣ハ、兵四萬ニ將トシテ北陸道ヨリ進ム、時ニ、朝時五月晦日

○東鑑係三日、杉原越後ノ國府ニ到來シテ兵ヲ督シ、加地西仁入道信實其男二本承久記係五月晦、郎兵衛實秀同左衛門尉時秀大胡太郎左衛門尉重俊小出四郎左衛門尉五十嵐某等未可考、是ヨリ蒲原ニ抵ル此地南ハ巖石崔嵬猿躡モ飛足ヲ泥ミ、北ハ鯨浪天ヲ撲テ、纜ヲ解クコト能ハズ、其間ノ狹路曲盤、單騎ニ非スシテ、勒ヲ聯スルコト能ハズ、加之、市振淨土ニハ、越中ノ國土、宮崎左衛門尉政時政時ヲ東鑑ニハ記ニハ親式ニ作ル取周按ルニ日本史ニ宮崎定範將官守北陸道也、市振淨土記ニ蒲原之險、敵將北條朝時以計破之、定範敗走トアル是也、壽永二年、木曾義仲ニ與トスル越中ノ國土、宮崎太官軍ニ屬シテ、近郷ノ強奴ヲ率ヒテ、三百人許山上ニ弩弓ヲ設ケ之ヲ固守ス、依テ諸將參定アリ、加地西仁曰ク、狹路弩弓ヲ避ルニハ火牛ニシカズト、諸將之ニ從フ、暮ニ及テ、火牛七八十ヲシテ、其角ニ束薪シ、熾火シテ放ツ、果シテ弩弓コレガ爲ニ費ヘ陣防空シ、黎明ニ至テ風收リ、海濱ヲ望ムニ、敵ノ鐵騎銳卒、森然トシテ羅列ス、越兵之ニ破膽シテ走亡スレハ、東軍亡矢、遺鏃ノ費ヘ無ク、鹿砦ヲ切拂ヒ、砥並山ニ到ル、爰ニ黒坂ト志保山トノ二路アリ、黒坂口ハ仁科次郎盛遠宮崎政時之ヲ固守ス、志保山口ハ、糟谷有名左衛門有久、伊王左衛門ノ三士、チ云ハ仁科、宮崎、糟谷之ヲ固守シ、暨ヒ加賀ノ林下注ニ林次郎ハ光明ノ子、光茂又ハ孫ノ家、富樫ニ因テ家、春未々幼年タレドモ、越中ノ井上、桃井繼ナラシ、並ニ次郎ト稱ス、富樫ニ因テ家、春未々幼年タレドモ、越中ノ井上、桃井

大ナカヲ防クトイヘトモ大ニ兵ヲ送ルトアリノ上左衛門ノ津旗陸家ノ小三郎  
 越中ノ野尻野尻支那判高知ヲ頼ムトアリノ上左衛門ノ津旗陸家ノ小三郎  
 石黒ニ下注ニ石黒三郎ニ見ユトアリノ上左衛門ノ津旗陸家ノ小三郎  
 是ヨリ百十餘年ノ後建武二年ノ此野尻支那判高知ヲ頼ムトアリノ上左衛門ノ津旗陸家ノ小三郎  
 テ防クトイヘトモ大軍當リ難シ所謂大軍ニ切所ナク北陸道ヲ經過シテ東軍  
 上洛ス友野ニ是時宮崎左衛門時精谷三郎等在國ノ石ハ有名キテ支仁科大郎  
 城奇功アリ日本史ニハ仁科盛遠兵敗ニ結城スノ陣アリ

〔富樫家々譜〕

依之北條家大軍汝催し上洛せしむる故義時の二男朝時ハ四  
 万騎乃勢汝卒し北國を馳登る兼而法皇乃勅るれハ富樫家春幼少たりと云と  
 も越中井口桃井等とかがたらい合て越中越後の境川に勢汝屯し防たけるが終  
 關東の大勢に打負逃亡しけるにより朝時都へ上りける

七月 朔癸未

二十七日 諸國の社寺の莊預武士等の狼籍を禁す

〔東大寺要録〕

左辨官 下東大寺

應令國司且停止武士狼籍且言上子細當寺諸國寺領貳拾參箇所事

山城國 玉井庄 賀茂庄

攝津國 猪名庄

伊賀國 黒田庄 同新庄 同出作 (築奈本)

美濃國 廣瀬庄 山田有九庄 阿波庄

越中國 入善庄 茜部庄

越後國 豊田庄

丹波國 (後之) 俊河庄

播磨國 大部庄

周防國 宮野庄 榎野庄

紀伊國 木本庄

筑前國 觀世音寺封庄等

右近日都鄙罷騷擾丁壯苦軍旅俗之凋弊職而斯由就中五畿七道諸國神社佛寺

已下庄預(領家本)或武士寄事左右煩費州縣或民庶不營租稅已命山澤權大納言源朝臣通具宣奉勅宜令下知彼宰吏等停止狼籍但若有子細者言上聽裁者同下知諸國既畢寺宜承知依宜行之緝在機急暫莫延怠

承久三年七月廿七日

大史小槻宿禰

中辨藤原朝臣

〔承久三年四年日次記〕 承久三年七月

斯日被宣旨於五畿七道諸國□

近日都鄙罷騷擾丁壯苦軍旅俗之凋弊職而斯由就中五畿七道諸國神社佛寺已下庄領或武士寄事左右煩費州縣或民庶不營租稅已命山澤宜令下知彼宰吏等停止狼籍但若有子細者言上聽裁緝在機急暫莫延矣者

### 後堀河天皇

嘉祿元年乙丑 紀元千八百八十五年

正月 朔壬戌

二十三日甲申參議藤原公賢、越中權守に任す、

〔公卿補任〕 參議正四位下藤公賢廿四右中將中宮權亮嘉祿元年正月廿三日越

中權守正月廿八日出家○嘉祿元年の條

嘉祿二年丙戌 紀元千八百八十六年

正月 朔丁巳

二十三日己卯藤原實平をして、越中權守を兼ねしむ、

〔公卿補任〕 非參議從三位藤實平、廿左中將嘉祿二年正月廿三日兼越中權守

○嘉祿二年の條

十一月 朔壬子

藤原賴俊、越中守に任す

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中守藤原賴俊

嘉祿二年十一月任

寬喜元年己丑 紀元千八百八十九年

十月 朔乙未

後堀河天皇嘉祿二年 寬喜元年

後堀河天皇寬喜二年 貞永元年

藤原高經、越中守に任す、

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司越中守欄

藤原高經 寬喜元年十月任、

同三年四月罷

寬喜二年庚寅 紀元千八百九十年

正月 朔甲子

二十四日、源有資、越中介に任す、

〔公卿補任〕

源有資 寬喜二正五正四下、(鷹司院御給)同廿四日越中介、(左將重兼國)同十月廿五日轉左中將、(曆仁元年)の條

十一月 朔戊子

親繼、○姓越中權守たり、

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司越中守欄

親繼○姓 寬喜二年十一月見、

貞永元年壬辰 紀元千八百九十二年

八月 朔己酉

二十一日、前東寺長者權大僧都良遍寂す、

〔本朝高僧傳〕 五十四 京兆東寺沙門良遍傳

釋良遍、越中刺史藤顯成之子、稟金胎秘法於勝遍律師、又從公賢僧都重受密灌、建久八年冬、蒙東寺小灌頂之宣、翌歲十二月、改補觀音院小灌頂、建保元年夏、叙法印、六年冬、加任東寺長者、承久元年春、奉勅祈神泉苑、至第四日、暴雨普潤、乃蒙優賞、二年十月、辭長者職、一日、遘病、結印契、誦密咒、跌座而化、壽八十三、寬喜四年八月廿一日也、時呼越中法印、

〔東寺長者補任〕 承久 法印權大僧都良遍

十月十日、辭長者、未拜堂、勝遍律師入室受法灌頂弟子、越中守顯成息、建久八年十二月廿三日、蒙東寺小灌頂宣旨、同九年十二月十三日、改東寺爲觀音院小灌頂、建仁三年五月十九日、任權律師、寬遍御祈賞讓、承元々年五月廿二日、任權少僧都、滿項身、四年五月十五日、轉大修明門院御熊野詣、大僧正長嚴御先達賞讓、建保元年五月廿六日、叙法印、上皇護持身、承久三年十二月卅日、薨、去年三月、神泉御讀經、賞以權律師隆賢、申任權少僧都、寬喜四年八月廿一日、八十三、手結印契、口誦密

〔仁和寺諸院家記〕 理智院

良遍法印 號越中法印、越中守顯成子、顯輔三位孫、勝遍律師入室附法上足、又公賢僧都重受、

後堀河天皇貞永元年

三長者、建久二年七月廿日、於理智院受灌頂、<sup>四</sup>同八年十二月二十三日、蒙東寺小灌頂、宣旨同九年十二月十三日、改東寺爲觀音院、小灌頂、建仁三年五月十九日、任權律師、承元々年五月廿二日、任權少僧都、同四年五月十五日、轉大僧都、建保元年五月廿六日、叙法印、同六年十二月二十九日、加任長者、<sup>六</sup>承久元年、後七日、法行之、三月廿二日、神泉御讀經、廿五日、雨澤普灑、廿八日、結願、蒙賞、同二年十月十日、辭長者、未拜堂、寬喜四年八月廿一日卒、<sup>三</sup>手結印契、口誦密語、臨終正念云々、

〔仁和寺諸師年譜〕 理智院法印良遍者、越中守顯成之子、勝遍律師付法上足也、爲東寺三長者、承久元年三月廿三日、修神泉御讀經、廿五日、雨澤普灑、廿八日、結願、蒙賞、寬喜四年八月廿一日、手結印契、口誦密語、臨終正念、化春秋八十三、

〔參考〕

〔系圖纂要〕 藤原氏

顯輔

顯成 越中守  
正四下

成守

成行

重實

良遍

理智院、法印、大僧都、長者、承久二年八月廿一日、寂八十三、

顯尋

○尊卑分脈顯輔顯成の系に良遍を載せす、

四條天皇

延應元年己亥

紀元千八百九十九年

七月

朔 戊辰

二十五日、<sup>壬</sup>幕府、越中國東條河口・曾禰・八代の四保を地頭請所となし、東福寺に屬し、國役を免す、

〔吾妻鏡〕

三十三

七月廿五日、<sup>壬辰</sup>越中國東條河口會禰八代等保事爲請所、以京定米百斛可備進之旨、地頭等去年十一月、獻連署狀於禪定殿下、仍可停止國使入部并勅院以下國



役之由、同十二月、國司加藤宣就之去正月、任國司、應宣地頭等寄進狀、爲東福寺領  
停止、勅院事國役等、爲地頭請所可、令備進年貢百石兼、又當國宮島保雖、當家領  
被紀返國領之由、被遣禪定殿下政所御下文、是爲寄附彼寺所被相傳也、仍被申其  
趣於將軍家之間、可存其旨之由、今日被奉御返事、

嘉禎三年丁酉 九十七年八月

正月 癸丑

二十四日、丙藤原道嗣、越中權守に任す、

〔公卿補任〕 非參議從三位藤原道嗣、廿一左中將嘉禎三年正月廿四日越中權守

年〇嘉禎三年

寬元二年甲辰 百九十四年

十二月 丁卯

二十四日、庚感神院領、越中國堀江莊內西條村雜掌藤原康久、地頭代國繼の  
貢租を納れざるを訴ふ、是日、幕府、國繼に命して究濟せしむ、

〔前田家所藏文書〕 古蹟文獻

感神院御領、越中國堀江莊內西條村雜掌藤原康久與地頭代左兵衛尉國繼法

師法名相論年貢事、

右對決之處、如康久申者、以當村御年貢所被宛置六月御靈會用途也、而去仁治二  
年七月、康久補預所之後、僅六石八斗余之外、一切不致其辨、令抑留之條、無道之至  
也、早任本數可、令究濟之由、欲被仰下云云、如心佛陳者、當村者小泉村內小村也、而  
前預所圓印法橋之時者、依令一圓知行、無所當辨濟之煩、爰近年預所職被處分數  
子之間、面々使者等令入部之條、依可有其煩、如先例、就小泉領家方、可辨年貢也、康  
久可爲西條村預所職、有於小泉領家之許、可分取其分之由、所令申也、無其故、非抑  
留之儀者、令處分所領於子息等者、定法也、然而不加增年貢之本數者、何可有面々  
所濟之煩哉、爰心佛背當預所、可辨他方領家由、令申之條、甚以自由也、早於康久補  
任以後年貢者、任本數可、令究濟也、但公田定數者可、依圓印目錄、又佃米增減事、兩  
方雖有申旨、所證可任庄例之狀、依鎌倉殿仰下知如件、

寬元二年十二月廿四日

武藏守平(花押)

附箋

北條武藏守經時款

寬元三年乙巳 百九十五年

四條天皇寬元三年

正月 朔丁酉

十三日、西藤原信盛、越中權守に任す、

〔公卿補任〕 參議正三位藤原信盛五十寛元三年正月十三日兼越中權守三〇寛元

六月 朔甲子

卜部兼遠、越中守に任す、

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中守欄

卜部兼遠 寛元三年六月任

權介藤原博輔 仁治元年正月任

介藤原光兼 仁治二年二月任

權介藤原忠基 寛元三年正月任

### 後深草天皇

建長三年辛亥

紀元一千九百一十一年

五月 朔庚申

藤原有清、越中守に任す、

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中守欄

藤原有清 建長三年五月任

大掾菅原清長 建長四年正月任

正元元年己未 紀元一千九百一十九年

正月 朔己未

二十一日、卯越後介菅原在章をして、越中介を兼ねしむ、

〔公卿補任〕 菅在章 建長五正十三文章博士同六五十三越後介八二廿六復

任母正嘉三正廿一兼越中介年〇文應元

四月 朔甲戌

十七日、庚平信輔をして、越中守を兼ねしむ、

〔公卿補任〕 平信輔 正嘉三正月六日正五位下、二月聽内院昇殿四月十七日

兼越中守十一月廿六日止少進受禪日同日聽新帝昇殿弘長二四月八日任右兵

衛佐 ○正應元年の條

龜山天皇

文應元年庚申

紀元千九百二十年

三月朔辰

二十九日、丙左近衛少將藤原伊定をして、越中權介を兼ねしむ、

〔公卿補任〕

藤原伊定 嘉元十二月卅日任左近少將同二月十三日復任、父、正

元二正月五日正五位下、府勢三月廿九日兼越中權介弘長二正月七日從四位下、

府勢文永三二月一日兼紀伊介、○正應三

弘長三年癸亥 紀元千九百二十三年

正月朔壬午

二十八日、西大江重房、越中介を兼ねしめらる、

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中欄

介大江重房 弘長三年正月任

〔三州志〕

來因 概覽

弘長三年正月二十八日、江重房兼越中介、五月二日從五位

上

文永九年壬申

紀元千九百三十二年

七月朔丁巳

十一日、丙前參議藤原顯雅をして、越中權介を兼ねしむ、

〔公卿補任〕

前參議正二位藤原顯雅、六十大藏卿、文永九年七月十一日兼越前中

下文權守、○文永九

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中欄

權少掾菅原在兼 文永元年二月任、

介菅原在公 文永七年正月任、

文永十年癸酉

紀元千九百三十三年

四月朔癸未

十二日、丙藤原冬季、越中守に任す、

〔公卿補任〕

藤原冬季 文永八年五月二日叙爵、同十四月十二日任越中守、建治二

五月廿六日從五位上、十二月十二日去守、同四正月廿四日正五位下、弘安二七月十八日任右近衛權（コクヒヒ）少將、○正應二

文永十一年甲戌（紀元千九百三十四年）

二月（成中）

二十日、（成中）藤原有通をして、越中介を兼ねしむ、

〔公卿補任〕

藤有通 文永五正廿九兼近江權介同六（七）正五從四下（府勢）同

五月三日右少將還任、同八二八復任、同十一二廿兼越中介同十二正六從四上、建

治三十六右中將、○嘉元元年の條、

### 後宇多天皇

建治三年丁丑（紀元千九百三十七年）

正月（辛卯）

二十九日、（己未）藤原公重、越中權守に任す、

〔公卿補任〕

非參議從三位藤原公重、廿二左中將建治三年正月廿九日越中權守

○建治三年の條、

八月（戊午）

十一日、（辰戌）越中守、宇都宮賴業卒す、

〔尊卑分脈〕

藤原氏宇都宮流

朝綱鳥羽院武者所、後白河院北面、宇都宮檢校、依伊勢殿、配土佐國宇都宮三郎左衛門尉、武者所、號八田、母、

成綱左兵衛尉、左衛門尉、大庭二郎、イ業、母、號宇都宮、

賴綱弘三郎、宇都宮檢校、歌人、出家、法名蓮生、號、實信房、母、

時綱正五位下、美作守、母稻毛三郎重成女、號、實治、被誅了、

使賴業越中守、從五位下、母同時綱、伊豫守護、

泰綱修理亮、下野守、正五位下、宇都宮檢校、母、平時政女、法名蓮順、

宗朝石見守、從五位下、母、

女子內大臣通成公室、通賴卿母、

女子爲家卿室、爲氏爲教卿等母、

泰親淡路守  
 使時業左衛門尉出羽守  
 實業七郎左衛門尉  
 秀業八郎左衛門尉  
 頼基母  
 使業越中守

〔横田家系圖〕

藤原氏

宇都宮頼綱二男

頼業越中守從五位下四郎左衛門尉判官母  
 堀原平三景時女領横田郷千餘町建長  
 元己西八月十一日卒八十三城移住之建治三  
 丁丑五郎左衛門尉伯父宇都宮泰綱猶子

泰親無嗣子故甥以梁澄爲家督

〔下野國誌〕

横田城 河内郡横田郷兵庫塚と云所ふあて、奥街道雀宮驛の西  
 の方よて十町餘なり、宇都宮越中守頼業始て築く、嘉祿三年丁酉十月あて、

〔古今著聞集〕

武勇 承久三年のみたれや、宇津宮越中の前司頼業いまだ無

官なりけるが、宇治川をせよとて押あがさせて水の底へ入らりけるに、石に  
 りたつてて鑑波ぬがんとまきるが、上帯まめてとけざりきれば、引ちざりてぬ  
 ぎておとぎ上りよりきり、さしもとやき川の底ふてかくふるまひよりきるゆ  
 ゝしき事なりたり、水練なりたり、

弘安六年癸未紀元千九百四十四年

三月丙辰朔

二十八日、癸未、藤原光泰、越中權介に任す、

〔公卿補任〕

藤光泰 建治三九十三民部少輔、弘安六三廿八越中權介、正應二  
 正十三藏人、四月廿九遷中宮大進、同三六八兼右少辨、(元藏人)、十一月廿一左少辨、  
 同四三廿五右中將、(去大進)、四月六日從四下、七月廿九右中將、九月九右宮城使、永  
 仁元正五從四上、十二月十三左中辨、同二正六正四下、三月廿七右大辨、同日兼越  
 中權介、同三六廿三藏人頭、(四十二去辨)、八月五日兵部卿、(永仁五の條)

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中綱  
 藤原長宣 弘安元年正月任、

弘安九年丙戌紀元千九百四十六年

後宇多天皇弘安六年 九年

後宇多天皇弘安九年

三四六

十一月甲子朔

五日、戊辰越中國石黑莊直海郷の外宮役夫工米を免す、

〔御巫文書〕伊勢

請文案

越中國石黑庄内直海郷外宮役夫工米事、下知狀乍進之候、以此旨可有御披露

候、恐惶謹言、

弘安九十一年五月五日

神祇權大副爲繼

下知狀案

當國石黑庄内直海郷外宮役夫工米事、任内宮例可止其責之由、自太政大臣家  
所被仰下者、早止入部催促之儀、可被注進先例者、依造宮所仰執達如件、

弘安九年十一月五日

主典在列

越中國大使殿

### 伏見天皇

正應元年戊子紀元千九百四十八年

二月丙辰朔

十日、乙丑藤原俊光をして、越中介を兼ねしむ、

〔公卿補任〕 藤俊光 弘安六三廿八遷右權佐、蒙使宣旨同十正十三兼文章博

士、同十二月十補藏人同十四日聽禁色、同十一二十兼越中介、去博士、同八月卅中

宮大進○永仁三年の條

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中關

介菅原資宗 正應二年正月任

四月乙卯朔

源仲經、越中守たり、

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中守關

源仲經 正應元年四月見、

伏見天皇正應元年

三四七

後伏見天皇

永仁六年戊戌紀元千九百五十八年

九月乙酉

十三日庚戌藤原親方、越中守に任す、

〔公卿補任〕

藤親方 文永八正五叙爵、弘安元閏十月廿一兵部權大輔、同三七月十一從五上、罷兵部權大輔、叙之、十一月二十正五下、永仁六九月十三越中守、同月十六止守、同六十九民部權少輔、○正和五年の條

後二條天皇

嘉元元年癸卯紀元千九百六十二年

正月庚寅

清原良枝、越中權守に任す、

〔大日本史〕

三百八十四國郡司、越中守欄

清原良枝 嘉元元年正月任權官、

介藤原敦繼 正安元年三月又任、

花園天皇

延慶元年戊申紀元千九百六十八年

十一月乙酉

二十三日丁未幕府、院林左衛門尉と圓宗寺との太海院林兩郷地頭職を和與せしことを聽す、

〔三寶院文書〕

山城

鎌倉將軍賴經奉書

圓宗寺領越中國石黒庄内太海院林兩郷地頭院林左衛門尉 法師法名代家 貞與雜掌祐圓相論所務條々

花園天皇延慶三年

三五〇

右召整訴陳狀欲是非之處各所令和其也如嘉元四年治十一月廿三日家貞祐  
圓等連署和與狀者御年貢米事預所每年令下向可致直納沙汰同未進事寄事於  
直納百姓未進之時地頭不相繕者定可告公平賦於未進者地頭遂結解任被定量  
之旨可令究濟在庄間厨雜事爲百姓役可致沙汰但預所略人數不可致過分詰責  
御服綿並糸花紙事任先例名別分無懈怠可致沙汰刈田事預所江右衛門尉朝俊  
致刈田狼籍之山家叫訴申之間雖不知是非不及究真僞被改易訖於自今以後者  
可致穩便沙汰預所亦家叫子息宗繼不叙用預所及過言之由雖申之於向後者成  
水魚之思可令所務云々此上不及異儀任彼狀相互可致沙汰者依鎌倉殿仰下知  
如件

延慶元年十一月廿三日

陸奥守平朝臣(花押)  
相模守平朝臣(花押)

○建曆元年四月六日條參看すへし  
延慶三年庚戌 百七十九年  
十一月 戌

藤原經康越中守に任す

〔大日本史〕

三百八十四  
國郡司越中守攝

藤原經康 延慶三年十一月任

正和元年壬子

七十九年  
七十二年

正月 朔丁酉

宮内大輔丹波長直越中守たり

〔公卿補任〕

丹波長直 應長元十一年二月廿一宮内大輔(元權侍醫)同二正十

三正四位下(院御療治賞越忠守)正和三閏三廿五止大輔(元弘元年條)

文保元年丁巳

七十九年  
七十七年

三月 朔戊辰

二十七日(甲午)參議藤原資名をして越中權守を兼ねしむ

〔公卿補任〕

藤原資名 延慶二三月廿三補藏人三年四七兼文章博士十二月十

一兼右少辨(三事)四正十七去藏人權佐等二月三正五位上三月卅兼越中權介五

月十辭文章博士(正和四年條)

〔公卿補任〕

參議從三位藤原資名 左大辨造東大寺長官文保元三月廿七日兼

花園天皇正和元年 文保元年

三五二



花園天皇文保二年 後醍醐天皇元亨三年

三五二

越中權守四月六日遷左兵衛督去辨同日使別當四月十六日轉右衛門督未申慶  
已前也十二月廿二日任權中納言○文保元年の條

文保二年戊午 紀元千九百七十八年

正月朔癸亥

二十二日甲申參議藤原光經をして越中權守を兼ねしむ、

〔公卿補任〕

參議從三位藤光經文保二年正月廿二日兼越中權守三月十二日  
禮服宣下○文保二年の條二前參議正三位藤光經 元應元年十月十八日辭越中權守○元應元年の條

### 後醍醐天皇

元亨二年癸亥 紀元千九百八十年

八月朔庚申

二十七日庚戌僧源照能登の永光寺紹瑾の衣盃を傳持し遂に越中に入り信

光寺を翔む、

〔日本洞上聯燈錄〕二 永光瑩山紹瑾禪師法嗣

越中州信光寺珍山源照禪師加州人投淨住寺可鐵鏡西堂爲驅鳥鏡滅度後稟遣  
命禮謁瑩山和尚乃就弟子列久之契合元亨三年癸亥八月廿七日入室傳持衣盃  
經行入越中狹信光寺以瑩山爲開山之祖於是開堂演法爲瑩山燒香上堂記得雲  
門曰人人盡有光明在見時不見暗昏昏先師曰人人盡有光明在全體不藏露堂堂  
山僧不慙麼人人盡有光明在通身紅爛火裏看畢竟如何卓拄杖下座

嘉曆二年丁卯 紀元千九百八十七年

三月朔庚子

一日庚子氷見蓮乘寺日遷寂す、

〔本化別頭佛祖統紀〕十八 越中氷見蓮乘寺開山日遷上人傳

師諱日遷能州石動山板首眞言宗英也偶遊越後謁于摩訶一印公稟本化教更衣  
改宗入弟子數終捨石動山結茅於射水郡稻積村居之後移今地呼直至山蓮乘寺  
也師嘉曆二年丁卯三月朔日入滅師之裔崇六條日靜上人隸于本國寺蓋靜衣者  
印門之上普故也、

後醍醐天皇嘉曆二年

三五三

元弘三年癸酉

北朝元祿天皇正慶二年

二月乙未

十九日、癸未北條高時、皇子恒性を、越中に遷し之を害し奉る、

〔諸門跡譜〕 大覺寺殿 恒性越中 後醍醐院皇子、後宇多院孫、母龜山院皇女、

正慶二、二十九配越中國當國守護管領名越於配所奉殺云云、

〔門跡傳〕 大覺寺 恒性越中宮、後醍醐院皇子、後宇多院御孫、母后龜山院皇女、

延應二、二十九配越中國守護管領名越於配所奉害、○大覺寺門跡、大第同し、

〔大覺寺門跡略記〕 元弘二年三月八日、配越中國、同三月十日於越中、名越兵庫

助貞時爲御生害、

〔續史愚抄〕 十九 二月十九日癸丑、爲鎌倉沙汰流大覺寺恒性或作法親王、母龜山院皇女、于越中、門跡傳、或記、南方

○本條門跡傳延應二年とすれとも、延應は正慶を距るおと九十年前あり、正

慶の誤寫あること疑あし、門跡略記三月八日配流、十日御生害とす、今門跡譜

門跡傳に従ふ、門跡略記名越の名を貞時とす、尊卑分脈大系圖等に見えす、大

平記系圖纂要に貞持あり、或は貞時に作る、名越の系は五月十七日の條に收

ひ、

〔參考〕

〔衆裁亭 越中舊記〕 中 尊治親王、後ニ後醍醐天皇ト申奉ル御方ナリ、第十五ノ

皇子我國ニ配流アリテ、此寺○二塚村ニマシ越中ノ宮ト稱シタリ、然ルニ

時有今度巡廻ノ砌、配所ニ入、殺シ奉ル、慶三年トス、誤レハ延御母ハ龜山帝ノ皇女

也、時有ハ鎌倉ノ内命ニヨルト雖トモ、尊治親王大ニ怒リ、益北條一家ヲ亡ホシ

タキ心類リナリ、時有モ此君ヲ弑シ奉リ心樂マズ、此寺ニ宿シ菩提ヲ約ストナ

リ、此處ニ館アリ、故ニ今モ此處ヲ館村ト云フ、

五月癸巳

十七日、己酉越中守護名越時有、弟有公、甥貞持等と放生津に自殺す、

〔太平記〕 十一越中守護名越時有等自害 越中ノ守護名越遠江守時有、舍弟修理亮

有公、甥ノ兵庫助貞持三人ハ、出羽越後ノ宮方北陸道ヲ經テ京都ヘ責上ヘシト

聞ヘシカバ、道ニテ是ヲ支ントテ、越中ノ二塚ト云所ニ陣ヲ取テ近國ノ勢共ヲ

ソ相催シケル、斯ル處ニ六波羅已ニ被責落テ後東國ニモ軍起テ已ニ鎌倉ヘ寄

ケルナント様々ニ聞ヘケレバ、催促ニ順テ只今マデ馳集ツル能登越中ノ兵共

放生津ニ引退テ却テ守護ノ陣ヘ押寄ントゾ企ケル、是ヲ見テ今マテ身ニ代命ニ代ラント義ヲ存シ忠ヲ致シツル郎從モ時ノ間ニ落失テ、剩敵軍ニ加リ、朝タニ來リ暮ニ往テ交ヲ結ビ情ヲ深クセシ朋友モ忽ニ心變シテ、却テ害心ヲ挿ム、今ハ殘留タル者トテハ三族ニ不遁一家ノ輩重恩ヲ蒙シ譜代ノ侍僅ニ七十九人也、五月十七日ノ午刻ニ、敵旣ニ一萬餘騎ニテ寄スルト聞ヘシカバ、我等此小勢ニテ合戦ヲストモ何程ノ事ヲカシ出スベキ、恐ナル軍シテ無云甲斐、敵ノ手ニ懸リ縲繼ノ耻ニ及ハン事、後代迄ノ嘲タルベシトテ、敵ノ近付ヌ前ニ女性少キ人々ヲハ舟ニ乗テ澳ニ沈メ、我身ハ城ノ内ニテ自害ヲセントゾ出立ケル、遠江守ノ女房ハ僧老ノ契ヲ結テ、今年二十一年ニナレハ、恩愛ノ懐ノ内ニ二人ノ男子ヲソダテタリ、兄ハ九弟ハ七ニゾ成ケル、修理亮有公ガ女房ハ相馴テ已ニ三年ニ餘リケルガ、只ナラス身ニ成テ早月比過ニケリ、兵庫助貞持ガ女房ハ此四五日前ニ京ヨリ迎ヘタリケル上、薦女房ニテゾ有ケル、其昔紅顏翠黛ノ世ニ無類有様風ニ見初シ珠簾ノ隙モアラハト心ニ懸テ三年餘戀慕シガ、兎角方便ヲ廻シテ偷出シテゾ迎ヘタリケル、語ヒ得テ纒ニ昨日今日ノ程ナレハ、逢ニ替ント歎來シ命モ今ハ被惜ケル、戀慕ミシ月日ハ天ノ羽衣、撫盡スラン程ヨリモ

長ク相見テ後ノタマチハ春ノ夜ノ夢ヨリモ尙短シ、忽ニ此悲シミニ逢ケル契ノ程コソ哀ナレ、末ノ露本ノ雫後レ先立道ヲコソ悲キ物ト聞ツルニ、浪ノ上煙リノ底ニ沈ミ焦レン別レノ憂サ、コハソモイカマスベキト、互ニ名殘ヲ惜ツ、伏マロヒテゾ被泣ケル、去程ニ敵ノ早寄來ルヤラン、馬煙ノ東西ニ揚テ見ヘ候ト騒グハ、女房少キ人人ハ泣ク皆船ニ取乗テ遙ノ澳ニ漕出ス、ウラメシノ追風ヤ、シバシモヤマデ行人ヲ波路遙ニ吹送ル、情ナノ引鹽ヤ立歸ラデ漕船ヲ浦ヨリ外ニ誘ラン、彼松浦佐用嬪ガ王嶋山ニヒレフリテ澳行船ヲ招シモ今ノ哀ニ被知タリ、水手櫓ヲカイト船ヲ浪間ニ差留メタレハ、一人ノ女房ハ二人ノ子ヲ左右ノ脇ニ抱キ、二人ノ女房ハ手ヲ取組テ同ク身ヲゾ投タリケル、紅ノ衣絳袴ノ暫浪ニ漂ヒシハ、吉野立田ノ河水ニ落花紅葉ノ散亂タル如ニ見ヘタルガ、寄來ル浪ニ紛レテ次第ニ沈ムヲ見ハテ、後、城ニ殘リ留タル人々上下七十人同時ニ腹ヲ搔切テ兵火ノ底ニゾ燒死ケル、

【尊卑分脈】

平氏 北條流

公時 正五下、尾張守

時家

後醍醐天皇元弘三年

後醍醐天皇建武元年

公貞

從五上、民部大市

時有

續千作者、左將監

〔系圖纂要〕

北條

時章

名越

公時

尾報

時家

賴章

貞持

兵庫助

三年

五月

十七日

討死

時有

越左

將監

遠江守

元弘三年

五月

被誅

公貞

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

時見

貞家

高家

高邦

〔參考〕

建武元年甲戌

紀元千九百九十四年

正月朔庚寅

十三日、壬寅、右近衛中將藤原氏衡をして、越中權介を兼ねしむ。

〔公卿補任〕

藤氏衡、正慶元年三月十二日兼伊與介、同八月三日叙從三位同

月四日右近中將如元、元弘三年六月還本位本官、正四下右中將建武元年正月十

三日、兼越中權介、○建武四年ノ條、四

〔大日本史〕

三百八十四國郡司、越中編

大掾清原國格、元亨元年三月任、

四月朔戊午

十二日、○藏人所、牒を北陸道七國に移して舊規に従ひ貢蘇を備進せしむ、

〔大日本史料〕

六編之一

東寺百合文書、○山城

藏人所御牒案、梨云々、國司代官ハ渡邊治部左衛門尉云々、

藏人所牒、北陸道七箇國、登越中、越前、後佐賀、能、在、藏官人等、

應令早任舊規爲紀爲景沙汰備進彼七箇國貢蘇狀、使御藏左衛門少尉紀遠弘

仕人

牒件貢蘇者、守辰戊戌七箇年一度所宛召也、則正月八省御齋會、太元眞言法米、御

修法長日延命、如意輪、不動三壇御修法、及口大臣節會以下、恒例臨時料物公要非

後醍醐天皇建武元年

後醍醐天皇建武元年

三六〇

一、重色異他、然者早任舊規爲紀爲景沙汰、北陸道七箇國若狹・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡、雖爲中分地頭方、可令備進貢蘇之狀、所仰如件、國宜承知、勿違失、

建武元年四月日

出納散位安倍朝臣判

藏人左衛門權少尉大江判

式部少丞兼左近衛少進高階判

左近衛將監藤原判

兵部少兼左近將監藤原判

御原教光參河介兼春宮少進左兵衛少尉藤原判

兼坊城長朝文章生彈正忠兼中宮權少進內記菅原判

內舍人式部丞兼兵庫助左兵衛少尉藤原判

甘露寺藤長右少辨兼春宮大進藤原朝臣判

甘露寺定親民部權大輔藤原朝臣判

岡崎延國少納言兼侍從左衛門權佐藤原朝臣判

別當

御門經季頭宮內卿朝臣判

左近衛權中將藤原朝臣判

東寺百合文書は五十八之六

五卷貢蘇役御狀案等也

藏人所申北陸道貢蘇事、解狀經奏聞返獻之候、早任例可成牒之由、可被下知之旨、被仰下狀如件、

建武元年四月十二日

宮内卿判

藏人判官殿

建武二年乙亥紀元千九百九十五年

八月庚戌朔

中院定清越中守となる、時に名越時兼北條時行に應して兵を北陸に舉ぐ、定清軍を率めて之を討つ、

〔妙嚴寺文書前田侯爵本〕大日本史料六之二所收

中院中將清○定一見狀案

大和國高間大貳房行秀爲抽軍忠、自京都令馳參御供口事爲末代龜鏡、可預御證判、候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武二年九月日

源行秀判

進上 御奉行所

〔妙嚴寺文書〕

能登大日本史料六之二所收

後醍醐天皇建武二年

三六一

早發向鎌倉、可致軍忠之由所被仰下也、  
(宮部督進)  
大舍人頭(花押)

大和國高間大貳房行秀申、

去元弘三年、爲兵部卿親王家御手、抽度度軍忠、今年<sup>建武</sup>八月北國蜂起之間、爲誅  
罰凶徒、令發向畢仍數箇之忠功、令至極者也、雖然、下賜綸旨、令發向鎌倉、重爲抽合  
戰之忠、仍言上如件、

建武二年十一月日

○行秀九月の申狀に發向の地を擧げされとも中院定清之を證閱し、且十一  
月の申狀に北國蜂起云々とあるに參すれば、其の定清に屬して、名越等の軍  
を伐ちしむと推知すべし、又定清か越中の國司となれる年月詳ならず、故に  
此に連書す、定清の系は次の條に收む、

〔太平記〕

十三 西園寺公宗謀判 被誅事  
大日本史料六之二所收

故相模入道舍弟四郎左近大夫入  
道ハ元弘ノ鎌倉合戰ノ時、自害シタル眞似ヲシテ、潛ニ鎌倉ヲ落テ、暫シハ奥州  
ニ在ケルカ、人ニ見シラレシカ爲ニ、<sup>○天正</sup>本人ニ見シ、還俗シテ、京都ニ上リ、西  
園寺殿ヲ憑奉リテ、田舎侍ノ始テ召仕ハル、體ニテソ居タリケル、是モ承久ノ

合戰ノ時、西園寺太政大臣公經公、關東へ内通ノ旨有シニ依テ、義時其日ノ合戰  
ニ利ヲ得タリシ間子孫七代迄、西園寺殿ヲ憑申ヘシト、云置タリシカハ、今ニ至  
迄、武家他ニ異ナル思フ成セリ、是ニ依テ、代々ノ立后モ多ハ此家ヨリ出テ、國々  
ノ拜任モ半ハ其族ニアリ、然レハ官太政大臣ニ至リ、位一品ノ極位ヲ極メ、ス  
云事ナシ、偏ニ是關東最負ノ厚恩ナリト思ハレケルニヤ、如何ニモシテ、故相模  
入道カ一族ヲ取立テ、再ヒ天下ノ權ヲ取セ、我身公家ノ執政トシテ、四海ヲ掌ニ  
握ラハヤト思ハレケレハ、此四郎左近大夫入道ヲ還俗セサセ、刑部少輔時與ト  
名ヲ易テ、明暮ハ只謀叛ノ計略ヲ運ラサレケル、或夜政所入道<sup>○前田侯爵本</sup>件入道ニ作ル、  
大納言殿ノ前ニ來テ申ケルハ、國ノ興亡ヲ見ルニシカス、サレハ微子去テ、殷ノ  
代傾キ、范增罪セラレテ、楚王滅ヒタリ、今ノ朝家ニハ、只藤房一人ノミニテ候ッ  
ルカ、未然ニ凶ヲ察テ、隱遁ノ身ト成候事、朝廷ノ大凶、當家ノ御運コソ覺テ候へ、  
急キ思召立セ給候ハ、前代ノ餘類十方ヨリ馳參テ、天下ヲ覆サン事、一日ヲ出  
ヘカラストソ勸メ申ケル、公宗卿ケニモト思ハレケレハ、關東ノ大將トシテ、甲  
斐、信濃、武藏、相模ノ勢ヲ附ラル、名越太郎時兼ヲハ北國ノ大將トシテ、越中能登、  
加賀ノ<sup>○參考太平記ニ、北條家、勢ヲソ集ラレケル、</sup>南都本、越前トアリ、



利清并井上、○参考太平記ニ、金勝院天正本亦同シ、野尻、長深、○参考太平記ニ、毛利作仲澤四源院本不載長澤ト波多野ノ者共將軍ノ御軍ノ御教書ヲ以テ、兩國ノ勢ヲ集、叛逆ヲ企ル間、國中院少將定清、○参考太平記ニ、神宮司要害ニ就テ當山ニ楯籠ラル、處ニ、今月十二日攻メシハ、當ニ其前ニ在ルベシ、コノ日附誤アラハ、彼逆徒等、雲霞ノ勢ヲ以テ押寄ル間、衆徒等義卒ニ與シテ、身命ヲ輕ストイヘトモ一陣全キ事ヲ得スシテ、遂ニ定清戰場ニ於テ命ヲ隕サル、○参考太平記ニ、都本云、定清自寺院悉兵火ノ爲ニ回祿セシメ畢、是ヨリ逆徒彌猛威ヲ振テ、近日已ニ京都ニ攻上ラント仕候、急キ御勢ヲ下サルヘシト申ケル、

〔尊卑分脈〕

氏村上院

本良定何、候南朝、元弘以下

定清左中將、越中守、於越中國討死、

定平致平忠、逆世、

母雅平

〔石動山由來〕

能登

勅願所

九十六代光嚴院御宇、建武二乙亥年兵戰、干戈襲來、爲兵火寺院回祿、

○利清は井上宮内権少輔俊清と同人あるべし、正平元年三月十八日條參看すべし、

延元元年丙午

紀元千九百

二月 戊寅

七日、申足利尊氏、越中の院林了法の請に依り、元弘以來收公の所領を復せしむ、

〔三寶院文書〕

山城

越中國院林六郎左衛門入道了法謹言上、

欲早任法給安堵御教書、全知行院林太海兩口郷地頭職事、

右於地頭職者、了法重代相傳之間、知行無相違之口、去元弘三年以來、遍智院宮聖尊法、稱御拜領、濫妨之間、雖致訴訟、不道行之處、幸今善政之口、口重上者、賜安堵御教書、全知行彌欲抽軍忠、仍恐々言上如件、

裏書 建武三年二月日

了法花押

尊氏花押

此所元弘三年以來被收公云々、任相傳文書、如元知行不可有相違若構不實者、可處罪過之狀如件、

建武三年二月七日

後醍醐天皇延元元年



後醍醐天皇建元元年

三六八

○是歲十二月尊氏の吉見賴隆に命して兩郷の濫妨を停めしむるあり、  
今下に連收す、又院林太海の事は前後に散見せり、建曆元年四月六日の條參  
看すへし、

〔三寶院文書〕

山城（奉行大野盛前屋）院林六郎左衛門入道了法申、越中國院林大海郷事如申狀

者青柳孫二郎并今村十郎等濫妨所務致狼籍（云々）所詮停止押妨沙汰居下地於  
了法、以起請文可被注申、使節令緩怠者可被處其咎狀、依仰執達如件

建武三年十二月二十二日

沙彌在判

吉見（賴隆）參河守殿

〔裏書〕

建（武四年）□□□四月九日

僧快公（花押）  
藤原家秀（花押）

越中國院林大海郷事、去年三建武十二月廿二日任御教書之旨、吉見大藏大輔殿時子  
守河御代官桑名伊與房快公、沼田太郎家秀相共沙汰付下地於院林六郎左衛門  
入道了法候訖、仍渡狀如件

建武四年四月二日

僧快公（花押）

〔裏書〕  
爲後證所封裏也

藤原家秀（花押）

建武四年四月十日

大藏大輔（花押）

〔裏書〕

吉見大藏大輔請文建武四六十九

院林六郎左衛門入道了法申、越中國院林大海郷事任去年三建武十二月御教書之  
旨、以使者沼田太郎家秀、桑名伊與房快公、沙汰渡下地於了法候訖、仍請取狀進覽  
之、此條若偽申候者、曰本國中大小神祇冥衆殊八幡大菩薩可蒙御罰候、以此旨可  
有御披露候、恐惶謹言、

建武四年四月九日

大藏大輔賴隆（裏判）

進上 御奉行所

五月（丙午）

後醍醐天皇建元元年

三六九

後醍醐天皇延元元年

羽川時房、越中守たり、

〔大日本史〕三百八十四 國郡司、越中守關

羽川時房 延元元年五月見、

九月甲辰

十七日、映光嚴上皇勸修寺に、越中等諸國の寺領を安堵せしむ、

〔勸修寺文書〕二〇山城 大日本史料六之三所收

門跡領等御當知行不可有相違之由、院宣所候也、仍言上如件、

建武三年九月十七日

隆蔭

進上 勸修寺僧正御房

追言上

目錄封裏返進之候謹言、

勸修寺領

越中國淺井弘上〇前後の十七箇所は略す、

以上十八箇所

建武三年九月十七日

延元二年丁丑

紀元千九百九十七年 北朝光明天皇建武四年

七月己亥

二十一日、己未光嚴上皇、越中黒田保等の所務を全くせしめ給ふ、

〔壬生文書〕繪旨院宣御教書等 太日本史料六之四所収

越中國黒田保並中村保等事停止地下輩濫妨、可全所務者、依院御氣色執達如件、

建武四年

雅仲〇大藏卿(花押)

十月四日

(壬生屋越)左大史殿

十二月丁卯

二十四日、庚寅尊氏、佐々木頼宗の勳功を賞して、越中田中保半分の地頭職を

與ふ、

〔南狩遺文〕一 東寺藏

判尊氏

〔下〕佐々木信濃阿閉梨頼宗

南朝後醍醐天皇延元二年 北朝光明天皇建武四年

南朝後醍醐天皇延元三年 北朝光明天皇曆元年  
〔可令早〕 領越中國田中保八部半分、〔越〕後國佐味庄參拾貳分云々地頭職事  
□爲勳功之賞所宛行也者、□大夫判官高貞治鹽配分可致□□□□之狀如  
件

建武四年十二月廿四日

延元三年戊寅

北朝曆應元九年 九十八年

四月丙寅

二十二日、〔右〕尊氏、山城祇園社に越中堀江莊地頭職を寄附す、

〔古文書錄〕 〔乾祇園寶壽院藏〕 大日本史料六之四 所収

寄進

祇園社

越中國堀江庄地頭職〔越〕江入道〔越〕口〔越〕跡内事、  
右爲不斷大般若經轉讀以下料所寄附也、守先例可被致沙汰之狀如件、  
〔尊氏ナルヘシ〕  
源朝臣判

建武五年四月廿二日

閏七月癸亥

十一日、〔西〕光嚴上皇、院宣を尊氏に傳へ、三寶院領越中大海院林兩郷の濫妨

を停めしめ給ふ、

〔三寶院文書〕

〔山城〕 大日本史料六之六 所収

越中國大海院林兩郷河勾進入道院林平六以下輩濫妨事、賢俊僧正申狀副具如、  
此子細見狀候歟、可沙汰居雜掌於郷家之由、可被仰遣武家之旨、院御氣色所候也、  
仍言上如件、經顯恐惶頓首謹言、

後七月十一日

按察使經顯

進上 左馬助殿

越中國大海院林兩郷河勾進入道院林平六入道以下輩濫妨事、按察中納言奉書  
副具書如此、子細見于狀候歟之由、前右大臣殿兼季可申之旨候、恐恐謹言、

後七月廿七日

沙彌宣證

謹上 武藏守殿

○建曆元年四月六日條參看すへし、

天皇の時、郷義弘、佐伯則重及び宇津國光、刀工を以て著はる、

〔古今鍛冶備考〕

二 義弘 越中國松倉城主桃井家の侍臣と云、自然刀劍造成  
の事を深く好み、相州鎌倉へ下り、五郎正宗の門と成、傳を得て歸國も、天然の名

南朝後醍醐天皇延元三年 北朝光明天皇曆元年

人ふして八ツの妙所有師ふニツ劣れり恨らくは武夫なる故に造る物稀なり  
と云々在鎌倉の時を義廣又吉廣とも切と云是非不知

〔古今鍛冶備考〕 則重 越中婦負郡御服住佐作（俗名） 〇越中國一、或ハ二

字銘多し五郎三郎と號初め同國義弘門後相州へ來り五郎正宗門と成此地ふ

て相模國住人一と打文保正中比の年號多し御服郷と唱  
國光 宇多一と打越中宇津古入道と唱ふるもの是也本國和州宇多郡の人  
文保比

〔諸國鍛冶寄〕

後醍醐天皇御宇

建武比 義弘越中

太刀ノ姿長ク鎧少セハク庵丘也鍛板メイカニモコマヤカニシテムクヤキタ  
ルハタ也地色青メニグロク見ヘテ紫キ也ノダレ及ヲ焼切先ノヒタリニヘ多  
シ杉原ヲサキタル如ク成及ノフチ也刃色モソコ青メニミヘテ上ウキヤカニ  
白シ太刀ニ切先ノアダリト腰本ニ切カケニ成及見付有刀ニ直及モ有サレド  
モ先ニミタレル心ヲ焼也正宗ト義弘ノ自利上古ヨリ同様ニト傳ヘタリ亂及  
ノモシカラ地へ焼入タルエヤウ正宗ニ少モチカハス義弘ハ上少ノカワリ有  
ヘシ但シ正宗ハ鍛サラリトアラメ也義弘ハイカニモコマヤカニフツクリト

キタイ見ヘタリ中心ノ次第太刀ハ正宗ナトノ如ク也但シミネヲ角ニスルケ  
ンサキ少キツシヨヨ鑑出來ハ勝ンリ刀ハナカコサキヘサノミカレヌ様ニミ  
ネヲカクニヨコ鑑也ミネノ鑑ニテ同前也太刀ノ鑑モ刀同前也口傳

光明院御宇

曆應比 則重越中佐伯

太刀ノ姿長クソリ高シ鎧ヒキク少高シイホリイカニモ丘也鍛板メ也アヤ杉  
ノ様成木メ有及ノ内ニモ有大略及ノ内ニメ有木メノキタヒ有故也御郷コ  
レナリ始メ義弘カ弟子義弘廿四五ニテ死去ト云其後正宗カ弟子ニ成ソノ比  
ヨリマヘノ鍛ヲキテウツクシクキタフ也然トイヘトモ右ノ鍛ノ心殘ルナ  
リノダレ及ヲ專ラニ焼也熱荒ノ地色クロシ刃色モ青メニ白シ刀モ見様同前  
也右ノ鍛ノ時ニハ崎ヘ地ガキスニマシリテノホル也正宗ニ相傳ヘテヨリコ  
ノカタハサキヲモツヨク焼也中心サキケシカシラニ切太刀モ有刀ハナヲ有  
是ヲ正宗ト見義弘ト見ル目利繁多也口傳重々

後光嚴院御宇

康安頃 國光故入道越中宇津

太刀ノ姿鎧高シ庵フガク鍛柱目也地色白メニ赤シハタコマヤカ也亂及上手  
也丁子刃ヲモ焼腰及ヲモ焼也及ノ亂サキホヤキタリ亂及ノ細ミノ所ヨク

ニヘタリ、故入道ハ太刀ノ幅及ノ細メニ作ル也、尋常也、國宗ハメイ多シ、ヘタナ  
リ、太刀ノ姿ミチ薄ニ、鋸高ク、スヲミシカク作ル也、直及ヲヤク也、淺シ、國次國房  
國久友久上手也、故入道ハイツレモ劣レリ、口傳刀ノ姿、幅ヲヒロクカサヲ少  
薄ク作ル也、庵リ深シ、三ミチ丸ミチ多シ、鍛板メ也、地色白メニクロシ、鍛スタレ  
サルニヨリ地ニチハキ中鐵出ル作リ也、直及小亂刃ヲ燒也、ニヘモ有峰ニユハ  
シリヲモ燒也、太刀ハマレナリ、守弘森弘ニハ太刀多シ、後ノ千世鶴ト云々、

〔諸國鍛冶系圖〕

正宗 五郎入道ト云

行光子

貞宗 彦四郎ト云、○事蹟及弟子の姓名略す、

義弘 右馬允ト云、

爲繼

越中國松倉ニ住、正宗弟子、

義弘子、

左稱事蹟及弟子の姓名略す、

長義

兼光

廣光

長谷部國重

則重 五郎次郎ト云、

真景

越中國御服山ニ住ス、

則重弟子、

金重

兼氏

越中國宇津一家

宇多國光

本、和州宇多郡住人、後越中ニ來リ、宇津ト云在所ニ住、同銘二代、古入道ト云、

國房 國光弟子

國房子

國次 同弟子

國次子

國宗 同弟子

國宗子

國久 同弟子

友次 同弟子

國弘友次弟子

國友 同弟

友則國友子

南朝後醍醐天皇延元三年 北朝光明天皇曆元年

〔諸國鍛冶寄〕

諸國鍛冶上寄

義弘 越中松倉、後醍醐御宇

諸國鍛冶中寄

則重 越中佐伯住、後醍醐御宇

諸國鍛冶下上

國光 越中住、後醍醐天皇御宇

越中國

義弘 爲繼 則重 正信 重國 國光 國房

國宗 國安 國次 國友 國久 守吉 國弘

貞宗 友則 國清 平國

〔刀劍錄〕

四 鄉義弘 義弘越中松倉鄉人武夫而造刀者也然諸名工皆不能及世稱吉光正宗義弘曰三作其見重如此武家閑談曰古之武夫皆造武器越中山能造刀三作之號他工匠亦有之西人則義通信家高義彫工後藤則祐乘光乘即乘是也

則重 上杉輝虎將略關東安中春綱請爲前導輝虎大悅授則重刀北越則重居越中御服山下從鄉義弘學造刀號御服鄉從正宗學其刀酷肖正宗義弘云古今瑣尾

吉晴佩則重短刀會津之役水野忠重途爲刺客所殺加江吉晴在座獲刀殺刺客大空則重刀據刀劍考

〔工藝鏡〕

鄉義弘

鄉義弘は右馬允と稱す越中松倉の人元來武人なりしが好みて力を造り遂に正宗門下十哲の第一に指をりかぞへらるゝにいたりぬはじめ鎌倉に住し義廣と稱す世人吉光正宗義弘を併せて三作といふ後醍醐天皇の正中二年没す年二十七織田豊臣二氏の武將義弘の作を愛すること正宗に小とし加藤清正の鹿後郷鍋島勝茂の鍋島郷前田利光の北野郷富田知信の富田郷松本助持の三好郷などの類皆義弘の作にて天下の寶刀と稱せられき古今銘鑑本朝鍛冶家閑談武島家譜

〔越中觀蹟志〕

玉石雜誌角の卷曰則重越中國御服山佐伯の人元應元年三十歳の時同國松倉の人郷の右馬允義弘と共に鎌倉へ往て正宗に學び貞治五

年七十七歳にて没す、

校正古刀鑑卷一云正宗弟子吳服山下住佐伯則重か打し銘よ越中國婦負郡御服住佐伯則重嘉曆二年又佐伯則重元應二年相州住五郎一人也弟于十哲之入道正宗也

〔參考〕

〔刀劍錄〕四

甲斐武田氏有義弘左文字二寶刀甲斐及勝頼敗走追兵既逼乃悉殺姬妾、寃地稍高處取寶甲盾無衣世子信勝土屋昌恒爲之師、儀畢自殺、顛沛間執禮不苟如此、徃集此時猶不失寶甲、則其佩寶刀可知矣、

紀伊人松本助持佩義弘寶刀號三好鄉武家三好長慶佩刀也、長二尺三寸名物及

秀吉攻根來助持築紫固守、秀吉決水灌之、助持走阿波、獻刀乞降秀吉、寶愛後與

東照公講和贈之、公武家

秀吉將封加藤清正謂之曰、卿屢有戰功、我欲封卿、叢岐肥後、卿擇其一、時秀吉將伐

朝鮮、清正乃請封肥後、意在請先鋒、秀吉大悅、封之、肥後賜義弘刀清正清正佩刀號

肥後鄉者、蓋此刀也、名物清正軀幹魁壯、好佩長刀、碎玉朝鮮之役、海外震懾、比之鬼

神徃集、常而此刀僅二尺三寸四分、後獻之、紀伊南龍公名物

鍋島勝茂嘗爲江上家種所子、養家種傳義弘刀、天下名器也、關原之役獻之、東照

公鍋島直長二尺二寸六分、號鍋島鄉名物

前田利光嘗赴京師、獲義弘刀於北野、號北野鄉、長二尺三寸、其刀甚利、名物

富田知信佩義弘刀、秀吉獲之、號富田鄉、後賜前田利長、利長獻之、台徳公、公又賜

之利光、初其刀頗長、利長截而短之、長二尺一寸四分、名物當時名將多以古之名刀

爲甚、長往短之、名物古之長刀、蓋不過三尺餘、延喜式曰、遣大刀一口、用鐵十斤

也、元弘中丹波人佐治孫五郎佩五尺三寸刀、前此未有、其後南北分爭、日尋干戈、於

是曉將猛士咸佩長刀、

後村上天皇

延元四年己卯

北朝曆應二年

八月丁未

彌津名越中守たり、

南朝後村上天皇延元四年 北朝光明天皇曆二年

〔大日本史〕三百八十四、國

福津 ○名爾 耶司、越中守欄

權介藤原家倫 曆二年 正月任

興國元年庚辰 紀元二千 北朝曆三年

五月 朔 癸丑

二十日、壬子、足利尊氏、今河賴貞に命し院林了法の戦功を録進せしむ、

〔三寶院文書〕山城

院林六郎左衛門入道了法申 事去建武三年四月十四日口丹波國夜久野屬 當手以來度々依致合戦子證判 軍忠之次第載起請之詞、可被注申之 候、仍仰執達如件

曆應三年五月廿日

武藏守花押

上河駿河守殿

今月廿日御奉書之旨、謹拜見仕候訖、口被尋仰下之候、院林六郎左衛門入道了法 軍忠事、去建武三年四月十四日丹波國夜久野合戦以來、屬當手度度致軍忠、同六 月廿日於山門無助寺合戦子息又六光利令討死候了、仍證判分明以上此條若偽

申候者可能蒙

八幡大菩薩御爵候、以此旨可有御披瀝候、恐惶謹言

曆應三年五月廿七日

今河殿請文

前駿河守賴貞花押

○了法の事は、延元元年二月七日、興國五年十一月二十八日、正平五年十一月 三十日諸條に見ゆ、參看すへし、

九月 朔 辛亥

十八日、辰戌、光嚴上皇、三寶院と遍智院と越中大海院林兩郷を和與せること を聞食され、院林郷を以て遍智院に付せしめ給ふ

〔三寶院文書〕山城

院林郷和與敕裁曆應三十七到奉行侍從中納言隆蔭卿

越中國石黒庄内大海院林兩郷事、任正和勅裁和與之由、被聞食畢、以院林郷付遍 智院、永代知行不可有相違之旨、院宣所候也、仍執達如件

曆應三年九月十八日

權中納言隆蔭

謹上 三寶院僧正御房

南朝後村上天皇興國元年 北朝光明天皇曆三年



南朝後村上天皇興國元年 北朝光明天皇曆三年

三八四

○建曆元年四月六日、延元三年閏七月十一日、正平六年四月一日の諸條參看すへし、又貞和四年遍智院と覺洞院との和與の事は下に附收す、

〔三寶院文書〕

和與

醍醐寺遍智院覺洞院領以下相分條ス

一兩院家覺洞院事、

以和睦之儀竹園御一瞬之間、○下

一遍智院領越中國院林郷事、

同就院家御和談於半分者自下地宮廳被管領之竹園御一期之後可被付僧正坊至殘半分者自當時僧正坊可被知行之、

一同院領伊勢國黑田庄事、

中畧

右當門跡事自他烈祖代々貽所存及確論訖而僧正坊建武三年任相傳預 勅裁院務無相違爰竹園者先師僧正 賢助附法之間由緒異于他也依之宮御宰籠之時多年奉扶持之間曆應年中可有和睦之由依蒙仰己申成 勅裁之處有不慮之子

細及執論自他相承之趣究訴陳對決草度々然與重可有和睦之由爲惠鏡上人口入種々被申請之間閑是非所存所令和睦也所詮竹園當時御管領所々并僧正坊進止之地以下載右畢然則宮御一瞬之後者兩院家同院領以下悉僧正坊可管領若奉先立竹園自然事出來者彼遺跡相承之仁可令管領此趣所被載宮廳和與狀也向後止兩流之確執偏欲專院家紹隆此上者相互固守此狀無違越爲備後代龜鏡所被申成 勅裁也仍和與之狀如件

貞和四年六月 日

雜掌梁證

興國二年辛巳

紀元二千一年  
北朝曆應四年

正月己酉

二十日、戊辰南朝、瀧口義弘の勳功を賞して、越中射水郡東條莊地頭職を賜ふ、

〔南行雜錄〕三

越中國井水郡東條莊地頭職爲勳功賞瀧口彦次郎義弘可令知行者天氣如此、悉之以狀、

興國二年正月廿日

左少辨

六月丁未

南朝後村上天皇興國二年 北朝光明天皇曆四年

三八五

十四日、庚申南朝瀧口藏人の勳功を賞して、越中上津保を賜ふ、

〔南行雜錄〕三

越中國上津見保爲勳功賞可令知行者天氣如此悉之以狀

與國二年六月十四日

左中將

瀧口藏人館

八月丙午

十二日、丁卯越中護國寺運良寂す、

〔名僧行錄〕二

○大日本史料六之六所収

大日本國越中州黃龍山興化護國禪寺

開山勅賜佛林惠日禪師行狀

師諱運良號恭翁初名元琳師絕口而略不道其姓鄉邑夫至人以物迹爲大道之累况其姓氏等肯以爲童耶(重)或云羽州人傾然豐碩神惠疎朗一切文字不假師訓自然通曉受業越之後州玉泉寺了然明和尚十九歲遊方登壇受具初參洞谷瑩山瑾○運禪師周年之間盡得曹洞之旨趣於其授受之際乃自惟曰禪有傳授豈佛祖自證自悟之法遂棄之竟問(問)慈峯法燈國師○覺熾化於南紀往諮參國師示以狗子話從昏鐘提撕至五鼓豁然契悟越扣丈室竊作是念老和尚不可讓國師見來便曰除汝

胸中劍師不覺白汗浹背即問曰和尚八十二與學人二十二是同是別國師曰同々從此機語密契針芥相投親炙者數歲辭去遊方欲訪諸善知識國師告曰汝緣在北地往欽哉師少有出群作略名聞四方故一時宗匠共推尊之稱元琳長老其肆說如蘇張之雄辨其應機如孫吳之用兵諸老歛衽莫敢當其鋒往詣東大寺因聽戒壇主○本朝高僧傳ニ講華嚴六相義屢加難問主辨口不言即自慚服就問別傳之旨師曰我佛祖單傳之正宗豈義學之所階哉然既問不可不言即示以宗門關捩主之所未聞也疑網頓除起而作禮曰若不見師安得窺佛祖之玄樞師從容告曰我師法燈昔遊於此時戒壇徵尊直指之道有省又有一老宿虔恭諮啓於是省悟忽坐化尊乃建且過於戒壇院待十六開士以報法燈今也不給起廢於不朽亦可哉主即諾爾來復接雲水之衲子且過之再興者實師之力也尊贈謚與正菩薩師如京依萬壽

南浦明和尚于時浦舉德山末後句話示衆々咸不契師乃答云毒藥醍醐一器盛浦擊節稱賞極愛厥俊利待之于明窓下甚厚浦住相陽建長壽福兩寺之間師隨行親近浦嘗稱於衆曰古人節角諸訛處即好下語批判僧是也必爲再來人浦主巨福講碧巖一日師自偏室出吐師子吼曰和尚老矣引誤學者浦瞑目良久即輟講席仍徵師曰那裏是老僧請訛處師啓發之言錄如破竹節々皆迎及而解浦首肯便巡察遍

告衆曰今日之講說乃元琳長老之所演如此既而辭去北遊先是師在城南深草日  
 笠山商量師劔乃上話因約以加州休息之地其徒峨山積（頃之）又問劔乃上事笠山乃曰  
 爾往見琳公侘必能成就這話便賣書去見師々一日命積（頃之）剪紙風吹翻轉以刀尺鎮  
 之師曰此是風力所轉耶抑亦你轉處耶積即舉所持尺師曰你我弟子也積曰祇承  
 師證明走而出笠山又付書明峯哲（哲之）成問師于不識話師相對只寒暄而已渾無言說  
 哲亦不肯舉話留七宿而辭師以一絨報之回呈笠山曰這僧參得不識話了也哲聞  
 之當下知解水釋師遂北矣即空大乘寺令爲住持依託以一夜碧岩并櫻欄拂子應  
 器等昔如大陽玄以皮履布履（衣之）以寄浮山圓鑑誠有以乎師南面行事鐘鼓魚板一時  
 改養其演法也不爲德山殆乎爲臨濟經歲學徒益盛海衆之中六群之黨以違境據  
 之師雅不事物即蹈彼彼鉢多（勇）曾退棄寺如視脫屣住居白山之麓眞光寺時徒衆多  
 染瘋寺之土地妙理權現也師呵之投河由是病僧不日而皆痊瑞應山傳灯寺之邊  
 民覺圓始捨自產之莊田山林創一梵刹請師爲開山始祖丈室之後翠屏列峙嵩泉  
 倒懸阿闍大明王現（忿怒）金怨之相於飛流之中光燄一道然深雪以懌々寺衆無識者唯  
 師時々自擊能作丹青之戲臨入筆端三味雖園工不能敵也靈驗昭々于世矣寶光  
 山興禪寺亦師之權輿也往越取途於直生山因詣八幡神祠向廟中而尿巫祝遙怒

神託曰我特恭敬此師汝等慎勿觸忤巫皆戟手駭異後至于射水郡擬建興化兜率  
 兩寺堂宇猥々學者誦々凡殿臨四衆則破諸方之邪解死學徒之偷心預其聽法者  
 皆有益所以緇白翕然嚮風如優曇華一現於世師野行之時驚鷲恒隨行一日有蟋  
 蟀忽至于前師喝便作設利羅每剪爪髮（所剪之）或取隨之齒牙爭取藏玄皆作舍利若綴金  
 粟時人不名指謂肉身佛或時失脚踏著金剛經師尙萬自若侍僧見之有懼色即命  
 投火中燦然經存水見海濱有岩石屹乎波心師於其尖上建石浮圖蓋師之心欲來  
 往舟船乃至海中鱗介之類游泳于搭影者共得結緣也曆應四年辛巳秋八月初示  
 微恙十二日剃浴末後垂誠委曲付囑即書偈云心不是佛々不是心々佛不如豈直  
 古今投筆吉祥而逝壽七十五預囑光侍者（慈華）開山曰汝護我舍利其計若干開維  
 烟氣所及得五色舍利果如所言道俗悲動塔號大光室扁常寂延文五年後光嚴帝  
 勅謚佛惠禪師應永十六年後小松帝特謚佛林惠日禪師其爲人也面目嚴凜有御  
 史之風也近而依之風韻洒然如旱天霖感入深矣欲昭示後來使佛祖法眼不滅故  
 有正法眼藏之語禪戒正傳破（網之）佗邪網故有血脉相承之訣愛人及物等之以慈故有  
 假名見性鈔怒罵嬉笑莫非佛事故有種々法語沒後侍眞蒼皇而趨點灯供香祖乃  
 劈脊一棒々痕終身不滅加州大野尾寺忽罹回祿有自畫且讚觀自在像在於烈焰

堆裡人以爲燒失後觀之幘子燬却慈像并讚自若舉衆異之即讚曰弘誓湛海威德  
重山逼刹悲體同塵慈顏天堂地獄分身一般乾坤內外轉生無間半甲一鱗應光空  
劫或妃或童垂迹亂髮春入千林華處々發應物現形如水中月云々奇峭之語不學  
而能之蓋非夙薰般若之力無師自然之智豈可企及哉兜率居士寺讚攸作變地密邇  
于祖塔燎燄之勢殆不可救乍神人數輩頻注瓶水于猛煙舉衆仰見于時北風忽南  
塔院無恙所自畫之不動尊像粲然于灰燼中遠近頂禮及履履之後靈異頗多不遑  
備載今據始末大槩具之於大手筆之草本以欲潤色爲萬世之標準與此山不廢法  
孫比丘某甲謹狀

行狀後序

前南禪華岳建昌現

越之興化禪寺開山勅諭佛林惠日禪師實錄予周覽者數十回矣一字無曾可增損  
者實得僧史之筆乃今遷固也然有一段脫所且聞師欲到大乘寺之前夕瑩山夢應  
來集于山門上厥貌太俊山怪之翌日師至便原前夢延待首座寮瑩山謂衆云欲參  
余者參首座衆僉參首座於是山避席師南面行事云云是口碑之所傳也姑書以作  
褚少孫之補云

越之中州黃龍山興化護國禪寺開山勅諭佛林惠日禪師塔銘并序

師諱運良號恭翁卓爾儀形（題之）詔然德量禪河教海之辨棒雨喝雷之機人皆辟易以却  
無嬰其鋒者初參洞谷瑾禪師旁搜曹洞之旨後詣南紀慈峰法燈國師々示以狗子  
語一夕豁然大悟遂吹起法灯不餓之照矣又遊南都講寺以化律虎逮入於東浴禪  
窟乍伏僧龍大凡若道契王臣行感神鬼青鹿兆夢白鷺隨行可謂解慧三昧者也且  
夫師資叮囑賓主酬對及生平禪坐經行之偈頌舉足下足靡不佛法規範人事警策  
矣今不贅焉悉見於本山行實昭々若懸鏡以照物矣曆應四禩辛巳秋八月初示微  
疾十二日親自剃浴乃書偈云心不是佛々不是心々佛不如豈亘古今輒擲筆安祥  
逝矣世壽七十五閑維後其徒光侍者收拾設利蓋順師遺命也塔號大光室扁常寂  
延文五年後光嚴帝勅諭佛惠禪師應永十六年後小松帝特賜佛林惠日禪師塔于  
本寺系以銘厥銘云

赫々慧日 光破夏夷 常照寂爾 曾無盈虧 維師行業 古今不移  
大機大用 殺活臨時 噴拳熱喝 一等慈悲 如遼天鶴 似踞地獅  
勅號再降 契兩朝帝 法運所系 承一國師 南紀創業 北越建基  
平生確論 潛子器之 大唱祖道 盛行禪規 青鹿瑞兆 犬陽孤兒  
一夢兩覺 彼々不知 經像示異 神鬼著奇 東山祖圖 聯彼五葉

南方佛法、分此一枝、若墮齒牙、若剃髮髻、設利如粟、貼器離々、  
又化火後、璨如摩尼、烟氣所及、木葉琉璃、雲湧青巒、無縫之塔、  
月印滄海、不磨之碑、大人境界、豈易津涯、嚮彼象教、億々萬支、  
龍天所護、日月無斯

嘗寬正龍集協洽秋九月日 前南禪華岳建胃老衲謹銘

〔扶桑五山記〕

二 日本禪院 諸山 座位 次第 十利位次 興化寺 越中州 佛林 惠日 禪師 開山 恭翁

〔本朝禪林宗派並五山十刹〕

由良門派

本日 興國 法燈 山 覺心

興化 開山 恭翁 運良 佛林 惠日 禪師 常在 建仁 桂 運芳

〔延寶傳燈錄〕

十五 傳燈恭翁運良禪師法嗣

越中州護國山長慶寺絕當運奇禪師初遊洞家門闡研究五位歸恭翁輪下開悟本  
源為長慶第一世臨終集諸徒曰示汝等末後緊要處良久曰喫茶珍重即時脫去

興國三年壬午 北朝 康永元年 十二月 己亥

十五日、癸丑尊氏、東大寺八幡宮に越中高瀬社地頭職を寄附す、

〔石埼記録〕

奉寄進 東大寺 八幡宮

越中國高瀬社地頭職事

右為周防國大前村贊奉寄進之狀如件

康永元年十二月十五日 權大納言源朝臣判 尊氏御判

是春、後醍醐天皇の皇子宗良親王、越中名子に駐り給ふ、

〔李花集〕

興國三年越中國にすみ侍し頃歸雁を聞て

おあしくは散までをみて歸る鴈花の都のことかたらあん

同頃歸中百首とてよみ侍し中に

かへる雁こしちの嶺のへたてをも我おえてこそ思しりぬれ

越中國にて歸中百首歌よみ侍し中に鴈を

思ひやれ都の空も鴈あけは獨こしちの跡のさひしさ

越中國あこのうらに忍て侍しに歸中百首よみ侍とて月を

都にやおなし空ともなかわらん我は行術も浪の上の月



尊良親王 母藤原爲子權大納言爲世女

世良親王

恒良親王

成良親王

後村上天皇

護良親王

靜尊法親王

宗良親王 尊澄法親王、母同尊良親王

興良親王 母藤原氏時野介良長女

尹良親王 母藤原氏井伊介道政女、後龜山天皇猶子

僧尊良

○以下皇子皇女略す

〔本朝通鑑〕

五十 庚寅曆應三年南朝與冬十月宗良親王自駿河赴信濃至大河原主

香坂高宗家聞北陸猶有通志於南朝者潛赴越中國主石黑氏家到處詠歌以述懷

〔閑田耕筆〕

一 同し國中○越名子けうらひ今放生津といひて名よも似き漁家

三千餘ある其東北の一町を名子町とよぶのみむらし此邊より牧野せいふ  
とありりけて名吳乃浦なるべし牧野の南朝乃將軍中務卿宗良親王三年り  
せおのくませし所也なせいふけよこゝにのませしからに越中宮と申しはふ  
其御作歌にも今のほふとひくる人もなこのうらに去るぬれてすむあはと去  
らなんといふの李花集御家集に見えざるにゆへにまふるはと乃人よ見せ  
とや立山乃ちとせふるてふ雪はあけほのといふ御うた其所の口碑は傳へて  
牧野乃北は口よ少したりた地獄雪見岡せいふ猶此邊に親王乃御名こり我申  
所おれりせありせりや、これ射水河も此邊より八九丁の間まで又四五町よ  
て北海に流入とそ。

〔射水通覽〕

神皇社無格社步數五十六步中道本村、荒木

舊記ニ曰後醍醐帝第五皇子征東大將軍宗良親王入道尊元正月還俗ノ名御潛匿ノ

地ナリ文和元年南朝正新田義宗奉親王シテ足利尊氏ト潛水嶺ニ戦ヒ敗北ノ

後親王越中ニ入臣荒木大西柴田ト牧野村ニ潛匿偶奈吳浦ニ釣ス土人牧野氏

一見毛利氏ト諮リ奉伴シテ牧野ノ家ニ駐留ス嘉慶元年南朝元館ヲ此地ニ築

キ御潛座數年ニ渉ル毛利氏子無シ荒木氏明德三年南朝元南北和陸天下大ニ





南朝後村上天皇興國五年 北朝光明天皇康永三年

四〇〇

爲對治越中國凶徒、相催能州地頭御家人等可發向之由、去月廿五日被成御教書  
之間、今月廿日所進發也、任被仰下之旨可被下向之狀如件、

康永三年十一月十六日

大藏大輔(花押)

得江九郎殿

○この後、賴隆、井上俊清等を撃たんとして越中に發向すること、明年三月七日の條に見ゆ、參看すへし、

十一月 朔丁亥

二十八日、寅幕府、院林了法の訴に依り、桃井直常に令して今村十郎の越中院林太海兩郷地頭職を濫妨するを停め、之を了法に交付せしむ、

〔三寶院文書〕

山城

院林六郎左衛門入道了法申、越中國院林太海兩郷地頭職事、訴狀副具書如此子細見狀不日停止今村十郎濫妨、任延慶元年十一月廿三日關東下知狀並度々施行之旨、沙汰付了法於下地可被執進請取狀也、使節緩急答事、已被定其法畢、更不可有遲引之儀之狀、依仰執達如件、

康永三年十一月廿八日

散位(花押)

桃井駿河前司殿

〔編書〕 桃井刑部大輔

貞和二六十三

院林六郎左衛門入道了法申、越中國太海院林兩郷地頭職事、任被仰下旨、欲令致其沙汰候之處、於院林郷者、無地頭職之由、三寶院雜掌支申候之間、不能遵行候、至太海郷者、御室雜掌與相應院雜掌相論最中之上、無地頭職之由同申之候、仍不及打渡候、可爲何様候歟、此條若偽申候者、可能蒙入幡大并御罰候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

貞和二年四月十五日

前刑部大輔直常(裏判)

進上 武藏守殿

○延元元年二月七日の條參看すへし、又この後幕府桃井直常に令し本條の地の領家と地頭との爭論を裁せしむるふとあり、下に附收す、

〔三寶院文書〕

山城

院林六郎左衛門入道了法申、越中國院林太海兩郷地頭職事、重訴訟、口口止今村十郎押妨、可沙汰付了法之由、先度被仰之處、院林郷雜掌申子細之間、召決兩方畢、

南朝後村上天皇興國五年 北朝光明天皇康永三年

四〇一

雜掌則當鄉者爲領家一圓地之山中、了法亦捧延慶元年十一月廿三日關東下知狀地頭職口口之山搆之、所詮如了法所進下知狀者、領家地頭狀相論被裁許之條分明也、此上任先度狀地頭職者、嚴密可被沙汰付了法之狀、依仰執達如件、

貞和三年五月十四日

散位花押

桃井刑部大輔殿

越中國院林鄉雜掌申、當鄉事院林六郎左衛門入道了法訖延慶元年十一月廿三日關東下知狀、對今村十郎申子細之處、當鄉者爲領家一圓地之由、雜掌雖支申、依無支證、先任延慶下知可沙汰付地頭職外了法之旨、被仰畢、而今如雜掌出帶元久二年八月廿七日關東下文者、停止地頭職之由所見也、然者地頭有無追委細可被糺明、於去五月十四日奉書者、不日可被返進之狀、依仰執達如件、

貞和三年八月廿八日

散位花押

桃井刑部大輔殿

十二月朔丁巳

二十九日、乙參議源雅顯、越中權守に任す、

〔公卿補任〕

參議從三位源雅顯、康永三年十二月廿九日任越中權守元左大

辨造東大寺長官、○康永三年、三貞和元年十二月卅日去權守、○貞和元年、於上第除目召仰事

〔園太曆〕

二 正月廿日天晴、抑今日頭辨藤長朝臣入來、有除目召仰事、○中正月廿五日丙戌、及晚少外記師躬持來大間成文硯已下、聞書一本加之、○入宮師躬著侍所家司仲康衣冠相逢取之持參、留硯文書等、返給宮了

越中權掾藤原匡範、○業生得、大目管原秀長文章生、少掾之山追仰外記

權目上中下、○春宮大夫藤原朝臣當年給、○開書の前後略す、

〔參考〕

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中欄

權目上中下、○康永三年正月任、○貞和三年三月爲參河權目、○北朝貞和元年

興國六年乙酉

正月朔丙戌

二十九日、○甲柳原資明、洞院公賢に謁し、越中和泉及ひ美濃の戰亂の狀を告ぐ、

〔園太曆〕

四 正月廿九日、天晴、藤中納言、○柳原資明入來、謁之、越中合戰以外桃井軍不利之由有其聞、而和泉守護代ツ、キ次郎與凶徒合戰及一兩度之由有風聞、父

南朝後村上天皇與國六年 北朝光明天皇貞和元年

附朝後村上天皇與國六年 北朝光明天皇貞和元年

四〇四

入道今日下向之山云々而又美濃土岐親族等有反逆之聞所々不穩然候

三月乙酉

七日辛卯吉見賴隆、井上俊清等を撃たんとし越中に赴き、尋て高槻滑河に戰ふ、

〔得江文書〕

得江九郎賴貞申軍忠事

右爲對治越中國凶徒井上宮内權少輔俊清以下輩、今年康永三月七日大將吉見大藏大輔殿隆御發向之間、奉屬彼御手、抽所所戰功、同七月十一日、於高槻要害、再滑川御敵等寄來之間、賴貞不惜身命、致合戰忠節之刻、若黨栗山侍從房朝圓被疵切疵訖、此等次第侍所長井藤内左衛門尉見知之上者、早下賜御證判爲備向後、龜鏡恐々言上如件、

康永四年八月日

(吉見賴隆承)丁(花押)

六月癸丑

三日、乙國泰寺妙意寂す、

〔延寶傳燈錄〕

雲樹孤峰覺國師法嗣

越中州摩頂山國泰寺、慈雲妙意禪師信州平氏子、幼上山寺、剃染受戒、撥艸在越中關野山、結菴枯坐、孤峰明公歸自奥州、信宿菴、見其法器、相率回、由良參待法燈國師、一日問語次、喚國師惡牛、脫下重擔、國師曰、爾師孤峰也、且去商量此事、師往雲樹峰、付印記、往國泰寺、後醍醐帝召宮間法、賜清泉禪師之號、并紫方袍、貞和元年六月三日書偈而逝、壽七十二、收靈骨於本山正脈塔、

〔日本禪林諸師賜號〕

特賜清泉禪師

慈雲妙意

〔國泰寺由來帳〕

當寺開基慈雲妙意禪師は、紀州山良興國寺法燈國師の嗣法、雲州雲樹寺三光國師之傳法にて、御座候當國射水郡二上山の内被致庵居候處、諸方之學徒、追々に尋來候故、被建殿堂東松寺と申候、道德達天聽、後醍醐天皇嘉曆三年依勅、請令參内、叙感不淺、清泉禪師號並紫衣、且又摩頂山國泰寺の勅額被下之候、依茲尊氏公殿堂爲修葺、寺領被爲寄附、願所之法式行之來候、光明帝之御宇、貞和元年開山遷化に付、慧日聖光國師號賜之、則塔所今以二上山之内に有之候、夫より代々住持、遂參内奉拜天顏儀に御座候、開基以來四百年之間、天下之

南朝後村上天皇與國六年 北朝光明天皇貞和元年

四〇五

大變及數度候得は、寺領茂公儀之裁許無之、其上應仁二年諸堂致炎燒出世參内之儀式茂執行難仕處、後奈良院之御在位天文十五年、當寺廿七代雪庭と申仕持、右赴禁裏、遂奏開蒙紫衣勅許候而只今之居屋敷に所替仕、伽藍致再興候、

正平元年丙戌 北朝貞和二年

三月 庚辰

十八日、丁酉吉見氏賴越中より來りて木尾嶽城を攻む、是日、又其正門を攻む、南軍劇戰之を却く、後木尾嶽城陷る、

〔得江文書〕

得江九郎頼員申軍忠事

右越中國凶徒井上宮内權少輔俊清與同八條殿、井新田式部權少輔貞員、栗澤彈正忠致景、富來彦十郎俊行以下輩、今年二月貞和三月六日、令亂入當國、能州依楯籠富來院内木尾嶽爲對治之、大將吉見掃部助殿頼員自越中國御發向間、屬彼御手同十六日攻寄城、致合戰、忠節訖、同十八日、押寄彼城大手、頼員不惜身命、攻戰之刻、自身被疵、左射疵同若黨長野彦五郎季光被疵、右足射疵訖、加之同廿三日、廿五日以後合戰之時、差向若黨等、每度致軍忠、同五月四日、攻落彼城畢、此等次第侍所長井藤内

左衛門尉見知之上者、早下賜御證判爲備、向後龜鏡、恐恐言上如件、

貞和二年五月日

承了花押〇吉見

○俊清は太平記に見えたる越中守護普門藏人利清と同人あるへし、上杉古文書に參するに俊清は越後にも領地を有せり、建武二年十二月條及び是歲閏九月十四日條參看すへし、

〔參考〕

〔上杉古文書〕 上杉憲顯

尊氏ナルヘシ

下 上相民部大輔憲顯

可令早領知越後國大面莊 井上宮内權少輔俊清跡地頭職事、

右爲相模國河匂庄、并常陸國佐都東郡半分替所充行也者、守先例可致沙汰之狀如件

康永三年十一月一日

閏九月 丙午

南朝後村上天皇正平元年 北朝光明天皇貞和二年

大變及敷度候得は、寺領茂公儀之裁許無之、其上應仁二年諸堂致炎燒出世參内之儀式茂執行難仕處、後奈良院之御在位天文十五年、當寺廿七代雪庭と申仕持、右赴禁裏、遂奏聞蒙紫衣勅許候而、只今之居屋敷に所替仕、伽藍致再興候、

正平元年丙戌

北紀元二千六年  
北朝貞和二年

三月庚辰

十八日、吉見氏賴越中より來りて木尾嶽城を攻む、是日、又其正門を攻む、南軍劇戰之を却く、後木尾嶽城陷る、

〔得江文書〕

得江九郎頼員申軍忠事

右越中國凶徒井上宮内權少輔俊清與同八條殿、井新田式部權少輔貞員、栗澤彈正忠致景、富來彦十郎俊行以下輩、今年二月貞和三月六日、令亂入當國、能州依楯籠富來院内木尾嶽、爲對治之、大將吉見掃部助殿○兵自越中國御發向、聞、屬彼御手、同十六日、攻寄城郭致合戰、忠節訖、同十八日、押寄彼城大手、頼員不惜身命、攻戰之刻、自身被疵左肘、同若黨長野彦五郎季光被疵右足、訖、加之同廿三日、廿五日以後、合戰之時、差向若黨等、每度致軍忠、同五月四日、攻落彼城畢、此等次第侍所長井藤内

左衛門尉見知之上者、早下賜御證判爲備、向後龜鏡恐言上如件、

貞和二年五月日

承了花押○吉見

○俊清は太平記に見えたる越中守護普門藏人利清と同人あるへし、上杉古文書に參するに俊清は越後にも領地を有せり、建武二年十二月條及び是歲閏九月十四日條參看すへし、

〔參考〕

〔上杉古文書〕

上杉憲顯

御判

下 上相民部大輔憲顯

可令早領知越後國大面莊井上宮内權少輔俊清跡地頭職事、

右爲相模國河匂庄、并常陸國佐都東郡半分替所充行也者、守先例可致沙汰之狀如件

康永三年十一月一日

閏九月丙午

南朝後村上天皇正平元年 北朝光明天皇貞和二年

十四日、北軍、尾張羽豆崎城を抜き、越中の普門氏を降し、新田の兒子を捕へ斬る、是日、足利氏、書を島津氏に贈りて之を報す、

〔薩藩舊記〕

雜抄

島津の左京しん入道たのの入道の子とも、いまてこらへてちうをいたま事  
神妙へうよん尾張のくに豆崎つりさきのしやうもたとされぬ、越ちうのふ  
もんくたへも降こう人まいりぬぬ、こなさまのみあせいひつしては猶くち  
うをいたまへし、新田子忠ちしろくもいけとられぬてき斬をぬぬ、いまいごとく  
ちからをそへて忠をいさまへし、御盛きよかんゐるへし、これはひさのしんくこそ  
あへましくしんつうふんへ、

貞和二年閏九月十四日

○本書署名闕け、其人的知すへからず、是時今川貞世九州の軍事を掌れり、此書或は貞世の島津氏に贈りしものからむ、得江文書に據るに、是春越中の南軍井上宮内權少輔俊清俊清の事は建武二年條に見ゆ、新田式部權少輔貞員等能登に入り、木尾城に據り、遂に北軍に攻め陥さる事あり、本書に越中の普門とあるは

即井上俊清にして、新田の子息とあるは新田貞員ならむ、

正平二年丁亥 北朝貞和三年

十月 朔庚午

橘業俊、越中守に任す、

〔大日本史〕 三百八十四 守欄

橘業俊 貞和三年十月任、

大掾藤井有久 貞和二年二月任、

掾藤井松景 貞和三年三月任、

正平三年戊子 北朝貞和四年

七月 朔丙申

源信顯、越中守に任す、

〔大日本史〕 二百十三

源信顯 貞和四年七月任、

介藤原行光 貞和五年二月任、

權大掾藤原業範 貞和五年二月任、

南朝後村上天皇正平三年 北朝光明天皇貞和四年

正平五年庚寅

北朝崇光天皇觀應元年

十月

朔癸未

二十三日、乙直常氷見湊を攻め、遂に進みて能登に入る、能登の井上富來二氏も之に應し、得江石王丸の兵と戦ふ。

〔得江文書〕

得江石王丸代長野彦五郎季光申軍忠事

一 去年觀應元年十月廿日、於越中國凶徒打出、同廿三日賣來同國氷見湊之間、堀切石

王丸一族等所領志雄越山能州令警固、致度々合戦訖。

一同十一月三日御敵井上布袋九富來彦十郎以下、自當國能州富來院打出、寄來花

見槻之間、馳向彼所、致軍忠訖。

一同四日、凶徒等、取陣同國飯田宿之間、季光押寄彼在所、致合戦忠節、追越御敵等

於越中國訖、是等次第能州守護桃井兵部大輔殿御代官矢野余五郎令見知訖

一同日、四兵部大輔殿能州桃井自京都當國能州御下向之間、屬彼御手之處、同十九日

御敵桃井兵庫助直信率數千騎、自越中令亂入能州、取陣高島宿、同十二月一日寄

來石王丸等領内志雄保之間、季光不惜身命、致戰功、追歸凶徒等訖、一同十三日被

楯籠兵部大輔殿金丸城之處、御敵等寄來之間、季光自城中打出、致合戦忠節、追歸凶徒等訖。

一 今年觀應二年正月廿一日、被差向里見彦七殿於羽田城之間、屬彼御手、致合戦、燒拂麓至子同廿五日、毎日抽忠訖。

右如此致、每度戦功上者、且被經御注進、且賜御證判、爲備向後龜鏡、言上如件。

觀應二年正月 日

承了(花押) 義綱 桃井

〔參考〕

〔尊卑分脈〕

桃井

義胤 遠江守從五下兵部少輔

賴氏 桃井三郎

胤氏 實如幻子

胤氏 三郎二郎

尚義 綱二郎元弘

義通 刑部大輔

滿氏 又二郎

南朝後村上天皇正平五年 北朝崇光天皇觀應元年

僧 如幻  
 桃井 賴直 小二郎 貞頼 六郎 實如 幻子  
或義胤末子  
 直常 攝磨 駿河等守  
 直信 修理 大夫

〔諸系圖〕

桃井 桃井又二郎 尙義 遠江守

滿氏 桃井又二郎 尙義 遠江守  
 義通 附孫三郎刑部大輔 尙義 男 義綱 五五  
下兵部大輔

〔初懲記〕

滿氏 又二郎 滿義 綱一郎

義綱 兵部大輔

十一月 朔壬子

二十日、辛巳足利義詮、院林六郎左衛門に命して越中の南軍を撃たしむ、  
 〔三寶院文書〕

北國凶徒對治事、可致軍忠之狀如件、

〔義詮〕花押

觀應元年十一月卅日 院林六郎左衛門入道殿法了

○了法の事は延元元年二月七日、與國元年五月二十日、五年十一月二十八日の諸條に見ゆ、

正平六年辛卯

紀元二千十一年 北朝觀應二年

正月 朔辛亥

十五日、乙丑桃井直常、足利直義に應し、越中の兵を率ゐて近江の坂本に抵り、尋て白河に陣す、是日、京師に入り、足利義詮と戦ふ、

〔園太曆〕

正月一日或出明日彼禪門直可入洛云々又隆持卿四來濃州合

戰、江州凶徒蜂屋黨類多打取之、其首少々今日上洛云々、

三日、或日桃井卒和田勢入來坂本大嶽舉火云々、三門主或上洛之由備、或不然云々、典藥頭嗣成朝臣略中又云、桃井事頗實說哉、但子息直和在坂本、交者一兩日之間可到着之旨風聞云々、

四日、今日自坂本軍兵已入洛之由風聞、仍京都守護輩少々向河原云々、及晚無其



實之間、面々引歸之由風聞、

五日、今朝已自坂本北國勢襲來之旨、軍士東西馳走、宰相中將可出河原之旨風聞、但無其實、歟、及晚、靜謐、

正月十五日、天晴、未明之間、有火云々、即起出見之處、南方也、高越後守師泰館留守者、自放火云々、又宰相中將以下、京中勢悉沒落之由、有其聞、就中千葉介又走南方云々、其後所々放火、師泰以前、仁木兵部少輔賴章同馬助○太平記ニ、賴章舍弟等、右馬權助義長とあり、等放火、其外武藏守師直以下、館十ヶ所許放火云々、午刻、計桃井刑部大輔直常○入京、自一兩日、即參仙洞云々、又山僧少々同參可守護申之由申之候、祇候之處、將軍畢程在坂本出河原相戰之由有說、仍桃井以下、即馳向前河原、數合戰、道譽差江州沒落之處、三井僧下向相坊之間、返合戰之間、將軍自二條廻後、自三方責戰、桃井引退、將軍又同引退、二條京極千手堂吉良左京大夫○貞等館陣取、桃井法勝寺陣取云々、入夜、以太夫申入仙洞、其間將軍以千秋藏人太夫高範上洛之由申候云々、

〔建武三年以來記〕

正月五日、北國勢已攻入坂本云々、洛中騷動、入道左兵衛督時日已入八幡之由風聞、

正月十五日、卯刻、仁木兵部少輔賴章宅高止萬同左馬助宅橋門、兩所自放火云々、

今日晝程於河原有合戰、大樹父子以下、自山崎入洛、桃井自坂下出逢合戰、所々燒亡、師直師泰宿所以下、大略各自放火、

正月十六日、今曉大樹以下於（洛）路陽被沒落于丹波國、今夕八幡勢入洛、十七日、桃井自坂本入洛、

〔東寺王代記〕

正月一日、桃井播磨守○直從越中率大勢發向于山門、彼云此、洛中騷動以外也、

十五日、將軍執事自山崎馳上京都、宰相中將屬彼手歸入于京都、桃井山徒相共率大勢、責入京都、於四條河原合戰、死人不知其數、先代未聞之事也、

〔醍醐地藏院日記〕

正月十三日、天晴、今夜自西坂下宮方軍勢并北國桃井軍勢等、藪里ニ下來テ、藪里ノ在家燒拂フ、白河々原東岸に打口、口京方軍勢ハ法成寺京極殿等取陣、今夜十三終夜相待敵之寄來夜ヲ明ス、山方軍勢ハ京方ノ寄來ルヲ相待テ、無左右不及合戰、香檜爲敵云々、龍與龍之戰、雌雄兼難測云々、

〔參考太平記〕

二十九宮方京攻附桃井直常入洛、義盛逃近江事、桃井右馬權頭直常其比越中守護ニテ在國シタリケルカ、兼テ相圖ヲ定メタリケレハ、同正月八日起中ヲ立テ能登加賀越前ノ勢ヲ相催シ、七千餘騎ニテ夜ヲ日ニ繼テ攻上ル、東寺長者

補任云、觀應二年正月朔、桃井直常從中發向、取登折節雪影シク降テ馬ノ足モ比叙大嶽云々、與太平記不同、固太曆說亦異、可合見、折節雪影シク降テ馬ノ足モ立サリケレハ、兵ヲ皆馬ヨリ下シ襜ヲ懸サセ二萬餘人ヲ前ニ立テ道ヲ蹈セテ過ルニ、山ノ雪凍テ鏡ノ如クナレハ、中ニ馬ノ蹄ヲ勞セスシテ、七里半ノ山中ヲ

バ、馬人容易越ハテ、比叡山ノ東坂本ニソ着ニケル、

天正本云 爰ニ桃井直常越中ヨリ北國ノ兵ヲ攻從ヘテ上リ給ヒケルカ、今年ハ陰寒例ヨリ甚シク、雪山谷ヲ埋テ道ヲ村頭ニ求メ、人馬旅泊ニ滯留ス、サ

レトモ直常ハイツモ合戰ニ氣ヲ緩メヌ人ナル上、京都ノ相圖相違セハ軍ニハツル、ノミナラス、武略ノ名ヲ失フベシトテ歩立ニテ二萬餘人驗ノ竿ヲ

先ニ立テ深雪ヲ蹈分サセ夜ヲ日ニ繼テ攻上ル云々、下同、

略○ 上去程ニ、十三日夜ヨリ、桃井山上ニ陣ヲ取ヌト見エテ大箒ヲ燒ハ、八幡山ニ

モ相圖ノ箒ヲ燒ツトケタリ、是ヲ見テ仁木細川以下宗徒ノ人々評定有テ、合戰

ハ始終ノ勝コソ肝要ニテ候ヘ、此小勢ニテ彼大敵ニ合シ、千ニ一モ勝事ヲ得

難ク覺候、其上將軍已ニ西國ヨリ御上リ候ナレバ、今ハ攝津國邊ニモ著セ給ヒ

テ候ラン、只京都ヲ事故ナク御開候テ、將軍ノ御勢ト一ニナク、則京都ヘ寄ラン

候ハ、ナトカ思フ圖ニ合戰一度セテハ候ヘキト申サレケレバ、義詮卿義ハ宣

ニ從フニシカストテ、天正本云、面々ノ屋形ニ火ナカク云々、下同、正月十五日

早旦ニ西國ヲ差テ落玉ヘバ、同日午刻ニ桃井都ヘ入替ル、治承ノ古ヘ當永作、平家

都ヲ落タリシカトモ、木曾ハ猶天臺山ニ陣ヲ取テ、十一日當作、四日、按、歷代皇紀

七月廿五日、平家没落、二十八日、木曾義マテ都ヘ入ス、是全ク入洛ヲ急カサル非

ズ、敵ヲ欺カサル故ナリ、又ハ軍勢ノ狼籍ヲ靜メン爲ナリキ、武略ニ長セル人ハ、

慎ム所加様ニコソ堅カルヘシ、今直常敵ノ落ヌトイヘハトテ、人ニ兵糧ヲツカ

ハセス、馬ニ糠ヲモカハセズ、粗忽ニ都ニ入易ルコト、其要何事ソヤ、敵若偽テ引

退キ却テ又寄來ル事アラバ、直常一定打負ヌト云ヌ人コソ無リケレ、又桃井ヲ

引者ハ敵御方勝負ヲ決スヘキナラハ、爭カ敵ヲ欺カザルベキ、イマダ落ヌ先ニ

モ入洛スベシ、マシテ敵落ナバ何ミニ少モ擬議スベキ、如何ニモ、入洛ヲ急テコ

ソ日比ノ所存モ違スベケレ、若敵偽テ引退キ又歸寄ル事アラハ、京都ニテ尸ヲ

曝シタラン事何カ苦シカルベキ、又軍勢ノ狼籍ハ入洛ノ遲速ニ依ヘカラズ、其

上深キ料簡モオハスラント申族モ多カリケリ、

〔參考太平記〕二十九、上洛、附阿保、秋山河原、平家、義詮、心細ク都ヲ落テ、桂河ヲ打

渡リ、向、明神ヲ南ヘ打過サセ玉ハントスル處ニ、物集女前、西岡ノ東西ニ當テ馬

煙影シク立テ勢ノ多少ハイマク見ヘス、旗二三十流飄テ小松原ヨリ懸出タリ、  
天正本云、義詮ハ取物モ取敢ズ都ヲ落チ給ヒケル、略中去程ニ義詮ハ相從フ  
兵トモ寡クシテ、十五日ノ曙ニ桂川ヲ打渡シ、向、明神ノ御前ヲ南ヘ打過給フ  
處ニ、神南櫻井山脇ヨリ馬煙東西ニ靡カシテ、勢ノ多少ハ見ヘス、白旗二三十  
流小松ノ影ヨリ打出タリ云々、下同、本文

義詮馬ヲ控テ、是ハ若八幡ヨリ搦手ニ廻ル敵ニテヤアラントテ、北條家南都本、  
云、サヲハ逃レ  
トテ、面々、思ヒ切候、先人ヲ見セニ遣サレタレハ、八幡ノ敵ニテハアラテ、將軍  
トテ、云々、下同、本文武藏守師直山陽道ノ勢ヲ驅具シ、二萬餘騎ヲ率イテ上洛シ玉フニテソ有ケ  
ル、義詮ヲ始奉リテ諸軍勢ニ至ルマテ、只窮士ノ他國ヨリ歸テ父ノ長者ニ逢ル  
カ如ク、悦ヒ合事限ナシ、サヲハ懸テ取テ返シテ洛中ヘ打寄、桃井ヲ攻落セト、將  
軍父子ノ御勢都合二萬餘騎ヲ桂川ヨリ三手ニ分テ、大手ニ武藏守ヲ大將トシ  
テ、仁木兵部大輔頼章、舍弟右馬權助義長、細川阿波將監清氏、今川駿河守五千餘  
騎、義長以下至此、金勝四條ヲ東ヘ押寄ル、佐々木佐渡判官入道ハ手勢七百餘騎、  
院源院本不出、四條ヲ東ヘ打通りテ今比叡邊ニ控ヘ、大手ノ合戰半  
ヲ引分テ、本七百、毛利家東寺ノ前ヲ東ヘ打通りテ今比叡邊ニ控ヘ、大手ノ合戰半  
ナラン時、思モ寄ヌ方ヨリ敵ノ後ヘ懸出ント、旗竿ヲ引ソハメ、笠驗ヲ卷隠シ、東

山ヘ打上ル、將軍ト宰相中將殿ハ一萬餘騎ヲ本一作、毛利一手ニ合、大宮ヲ上リニ  
打通り二條ヲ東ヘ法勝寺ノ前ニ打出ント、和圖ヲ定メテ寄玉フ、是ハ桃井東山  
ニ陣ヲ取リタリト聞ケレバ、四條ヨリ寄ル勢ニ向テ合戰ハ定テ川原ニテソ有  
リスラン、御方偽テ京中ヘ退カハ、桃井定テ勝ニ乗テ進マンカ、其時道譽桃井カ  
陣ノ後ヘ懸出テ不意ニ戰ヲ致サハ、前後ノ大敵ニ遮ラレテ進退度ヲ失ハン、時  
將軍ノ大勢北白河ヘ懸出テ、敵ノ後ヘ廻ル程ナラバ、桃井猛シト雖トモ、引テハ  
ヤハカ戰フト謀ヲ運ス處ナリ、按ノ如ク中ノ手大宮ニテ旗ヲ下シテ直ニ四條  
河原ヘ懸出タレハ、桃井ハ東山ヲ後ニアテ、加茂川ヲ前ニ界ヲ赤旗一揆扇一揆  
鈴附一揆二千餘騎ヲ北條家金勝院源院南都、云々、三所ニ控テ、射手ヲハ面ニ進マ  
セ、帖楯二三百帖ツキ竝ヘテ、敵懸ラハ共ニ懸リ合テ、廣ミニテ勝負ヲ決セント、  
靜リ返テ待懸タリ、兩陣旗ヲ上テ関ノ聲ヲハ揚タレ共、寄手ハ搦手ノ勢ノ相圖  
ヲ待テイマタ懸ラス、桃井ハ八幡勢ノ攻寄ニスル程ヲ待テ、能事ヲ延サントス、  
亘ニ勇氣ヲ勵ス程ニ、或ハ五騎十騎馬ヲ懸居懸廻シ懸引自在ニ當ラント、馬ヲ  
乗浮ブルモアリ、或ハ母衣袋ヨリ母衣取出シテ是ヲ專途ノ戰ト思、ヘル氣色顯  
レテ最後ト出入入モアリ、懸ル處ニ桃井カ扇一揆ノ中ヨリ長七尺許ナル男ノ

七尺金勝院四源毘黑ニ血眼ナルカ、火威ノ鎧ニ五枚兜ノ緒ヲシメ、鉄形ノ間ニ紅ノ扇ノ月日出シタルヲ殘サス開テ、夕陽ニ耀カシ、檜木棒ノ一丈餘リニ見ヘタルヲ八角ニ削リテ兩方ニ斂入、右ノ小脇ニ引ソハメテ、白瓦毛ナル馬ノ太ク逞シキニ白沫カマセテ只一騎、河原表ニ進出テ、高聲ニ申ケルハ、戰場ニ臨ム人毎ニ討死ヲ心サ、スト云フモノナシ、然共今日ノ合戦ニハ、光政殊更死ヲ輕シテ、日來ノ廣言ヲケニモト、人ニ云レント存スルナリ、其名ヲ申ニテ候ナリ、中其後合戦始テモ候ハヌ間、餘リニ事々シキ様ニ候ヘ共名字ヲ申ニテ候ナリ、略其後合戦始リテ、桃井カ七千餘騎仁木細川カ一萬餘騎ト天正本云、仁木細川桃井カ勢一萬餘騎云々、白川ヲ西ヘマクリ、東ヘ追靡ク七八度カ程懸合タルニ、討ルルモノ三百人、創ヲ被ル者數ヲ知ス、兩陣互ニ戰屈シテ、馬ヲ控テ息ヲ繼處ニ、兼テノ相圖ヲ守リテ、佐々木判官入道々譽七百餘騎ニテ七百、毛利家思ヒモ寄ス中靈山ノ南ヨリ関ヲ咄ト作テ桃井カ陣ノ後ヘ懸出タリ、天正本云、仁木細川高家ノ人々、宗徒ノ桃井カ兵是レニ驚キアラテヲ、二手ニ分テ相戰フ、桃井ハ西南ノ敵ニ破立ラレテ、非西南ノ敵ヲ前後ニ討テ、七八度カ程手痛ク相當、兵引色ニ見ヘケル間、兄弟二人態馬ヨリ飛下リテ敷皮ノ上ニ著座シテ、運ハ天ニ在、一足モ引事有ヘカラス、只討死ヲセ

コトソ下知シケル、天正本云、直常見弟殺ニアリ、同枕ニ討死セヨト下、知去程ニ日已ニ夕陽ニ及テ、戰數刻ニナリヌレドモ、八幡ノ大勢ハ會テ攻合セス、北國ノ兵氣疲レテ、暫東山ニ引上ラントシケル處ニ、將軍并羽林ノ兩勢五千餘騎上萬ニ作り、相ニ手ヲ東ヘ懸出テ、桃井ヲ山上ニ又引返サセシト跡ヲ隔テソ取卷ケル、天正本曰、將軍父子孫北八川ヘ先チ横切テ敵ヲ山上ヘ引返サセシト取卷ケル、秋山新藏人愛子孫北八川米三郎工藤三郎左工門チ始メトシテ宗徒ノ兵討死ス云々、按第三十卷、天正本載、非也、可合見也、桃井終日ノ合戦ニ入替ル勢モナクテ戰疲レタル上、三方ノ大敵ニ圍レテ叶ハシトヤ思ヒケン、粟田口ヲ東ヘ山科越ニ引テ行、サレ共尙東坂本マテハ引返、サテ其夜ハ關山ニ陣ヲ取テ天正本又陣ヲ取云々、大籌ヲ燒テソ居タリケル、

○直常の二月以降に係かる事は、國太曆得江文書、遠山文書に散見す、左に彙收して參考に資す、太平記にも此事に叙及せるも略す、但大日本史直常の傳は太平記國太曆に據りて顛末を叙し、頗る梗槩の知らるべきを以て、文書の後後に收む、又七年六月六日、十年二月六日、十七年六月、二十三年二月二十四日、二十四年四月十二日、建徳元年三月十六日、二年七月二十八日の諸條を參看すへし、

〔園太曆〕

二月廿三日、天陰、又宰相中將自丹波可打出之旨、風聞之間、桃井上杉勢、并諏方上宮祝等、率數千騎發向、已追退此輩、又可降參之由、有其聞、爲申事子細、桃井馳歸八幡之山中云々、

九月十五日晴陰不定、江州合戰事、縱橫說猶不聞定、大略兩方黑白說也、所詮桃井常○直陣被破之條者、實事歟、將軍方又有失理之輩、歟之旨風聞、

〔得江文書〕

得江石王九代、長野左衛門四郎光信申軍忠事、

右今年觀應二年八月十八日、兩御所義隆兵、御下向江州之間、能州守護桃井兵部大輔

綱○義殿被供奉申訖、而北國凶徒等、取陣江州八重山相山之間、同九月十二日、屬兵

部大輔殿御手責、登八重山西中尾、致合戰忠節、同十月十四日、至于兩御所御入洛、

御共仕訖、然早賜御證判、爲備向後龜鏡、言上如件、

觀應二年十月日

(桃井義綱承了花押)

〔遠山文書〕

古証文

去十二日八相山合戰之時、致忠節之條、尤神妙也、可有恩賞之狀如件、

觀應二年九月廿六日(尊氏花押)

遠山加藤左衛門尉殿

〔大日本史〕

桃井直常

正平五年、足利尊氏與弟直義構嫌隙、直常密通意於直義、及尊氏西襲其子直冬、直義潛逃歸順、直常還越中起兵、與直義約期、攻足利義詮、明年直義陣于男山、直常將北兵發越中、會大雪沒馬足、乃令士卒乘橋前行、而后徑開、

人馬通行、進至延曆寺、舉火諸峰、義詮懼而西走、直常入京師、義詮與尊氏軍合來攻、

直常迎戰、互有前卻、各罷而休兵、佐木高氏兵七百餘、斷直常後、軍分爲二、直常兄

弟下馬安座、大呼曰、死生在、汝曹勿退一步、戰數刻、尊氏義詮扼其歸路、直常三方

受敵、兵士皆疲、遂敗走關山、明日尊氏西走、直常復入京師、既而尊氏與直義講和、直

常及石塔義房等恃勢伐功、與仁木賴章、細川賴春、土岐賴康、佐佐木高氏等不協、平太

記直常夜造直義而歸、有人自暗中刺之、直常衷甲、因得不洞、乃擒刺者、國太已而賴

章賴春等皆逃歸、領國謀事於是、直常具義房等勸直義走越前、太平尊氏兵至近江、

直義命直常及細川顯氏、島山國清拒之、不利、諸將皆北、直常獨留陣三日、部下皆勸

歸、遂引兵還于越前、太平是行也、細川顯氏、島山國清說直義與尊氏講和、直常固

爭以爲不可、顯氏等忿歸、尊氏自後兵士相繼逃亡、直常復勸直義走鎌倉、太平顯氏據

天正本太平 尊氏將兵來攻宇都宮氏綱率兵助之直常迎拒被敗直義兵亦大敗遂  
降于尊氏直常逃歸越前〇下文は正平七年の事に係かる、  
七年六月六日の條に収む。

四月庚辰

一日、庚辰足利氏、桃井直和に命し逸見二郎三郎の遍智院領院林郷の濫妨を  
止めしむ。

〔三寶院文書〕

三寶院前大僧正坊雜掌申越中國院林郷事申狀具書如此逸見二郎三郎以下輩  
濫妨云々甚以濫吹也所詮今月十五日以前沙汰付當郷於雜掌可執進請取狀若  
不承引之爲處罪科載起請詞可被注申使節不可有緩怠之狀依仰執達如件

觀應二年四月一日

左衛門佐在御列

桃井右馬權頭殿

觀應二六十七

院林郷雜掌重申狀

越中國院林郷雜掌慶重重謹言上

欲早被停止逸見次郎三郎同小五郎以下輩非分押領全所務專寺用越中國院

林郷間事

副進

一通 御制札案

右當郷者爲醍醐寺遍智院領三寶院前大僧正坊數代御相傳之地也而於半分者  
遍智院宮御一期之間所被避進也於半分者御管領無相違之處自去年十月廿一  
日無放逸見次郎三郎以下之輩打入當郷押領所務之間就被訴申停止押領可被  
沙汰付下地於雜掌之由雖被成御制札於桃井殿守護代不及遵行之沙汰之間嚴  
重寺用忽令闕如欲及長日勤行退轉之條歎而有餘者也然者早重被成嚴密御教  
書於守護方被退濫妨人全所務專寺用粗言上如件

觀應二年六月 日

三寶院領當國院林郷事任御狀候間彼代官方漏申候了於向後此類口口可存知  
仕候諸事期後信恐々謹言

九月廿四日

右馬頭直和花押

謹上 京極殿

御報

○延元三年閏七月十一日、與國元年九月十八日の條參看すへし、

八月戊寅朔

十八日、乙未吉見氏賴、能登三引保赤藏寺に據る、桃井直信之を圍む、尋て長秀信曲松に軍し、氏賴を援けて直信の兵と戰ふ、

〔得江文書〕

得江石王九代長野彦三郎家光中軍志事、

古今年觀應八月十八日、吉見參河守頼朝殿當國能登三引保赤藏寺被楯籠間、

桃井刑部大輔直信以下凶徒押寄當陣、終日戰也、凡及御方難儀之間、爲後攻於將

軍家御方九月十六日同國自大津長左衛門尉秀信打出間、屬家光彼手取三引保

内曲松要害之處、凶徒等寄來當陣、日々合戰致無貳軍忠訖、

一同十九日、於三引南山寄來御敵等之間、抽合戰忠節訖、

一同廿日、於三引山寄來御敵山小田遠江掃部助之間、不惜身命、致戰功訖、

一同廿一日、押寄三引御敵城、捨一命致散々合戰、追越凶徒等越中國之刻、家光被

疵頭首疵訖、此等次第同所合戰之間、勝田左衛門五郎所令見知也、且被經御注進、且

賜判刑爲備後證言上如件、

觀應二年九月 日

吉見氏賴承了花押

正平七年壬辰

閏二月乙巳朔

紀元二千十二年北朝後光嚴天皇文和元年

高山名越中守たり、

〔大日本史〕

三百八十四國郡司、越中守欄

高山名文和元年閏二月見、

六月壬寅朔

六日、丁未吉見氏賴、能登より越中に入り、横河保芝塔下に陣す、桃井直常直信來り攻む、尋て氏賴水谷城を攻め、氷見湊を襲ひ、三角山木谷の諸城を攻む、

〔天野文書〕

天野安藝三郎遠政代堀籠六郎右衛門尉宗重中軍忠事、

右大將吉見三河守殿頼朝兵令對治能州凶徒、去年觀應六月六日、越中國御發向之

間、奉風彼御手於越州横河保頼朝婦頼朝に余川芝塔下被取御陣之處、桃井播州、

常并刑部大輔殿頼朝直民部少輔殿以下凶徒寄來彼所之間、終日致合戰、追歸凶徒

南朝後村上天皇正平七年 北朝後光嚴天皇文和元年

畢

- 一同六月八日、同國州水谷城令夜討、致合戰忠、追落彼城入替敵陣畢、
- 一同十四日、氷見淡夜討之時、爲彼人數令放火敵陣、討取數輩凶徒等了、
- 一同十五日、同國州八代庄内被攻三角山城凶徒常門新左衛門尉城、新左之間、致合戰之刻、舍弟七郎宗成被疵射有罪畢
- 一同年七月一日、寄押木谷城、致合戰之間、討取教輩凶徒等了、
- 一今年文和二年四月五日、桃井播州并刑部大輔殿民部少輔殿以下凶徒寄來同國芝塔下之間、捨身命致合戰忠節畢、此等次第大將直御見知之上者、賜御證判爲備後證恐々言上如件、

文和二年六月日

吉見三河守殿 承了判

○正平六年正月十五日條參看すへし、又得江文書天野文書に據るに氏頼は正平九年の頃掃部助にして、六年八年の頃には三河守たり、十四年十七年の文書には前三河守氏頼と署し、二十三年に沙彌と署し、二十四年に吉見伊豫入道と書せり、薙髮後は道源と稱したり、

〔参考〕

〔大日本史〕

桃井直常 百七十七

七年足利義詮逼車駕于男山、直常與左近衛少將新田義宗等奉勅入援、進至能登車駕已出國、乃斂兵歸國、下文は十七年の事に係る十七年六月條に収む

正平十年乙未

紀元二千十五年 北朝文和四年

二月戊午

六日、癸未直常は直冬等と京に入り、是日山崎に戦ふ、

〔草野文書〕

後豐

直冬時氏直常等乱入洛中之間、爲誅伐、自播州責上之處、今月六日、山崎合戦、同十五日、京都戰、共以御方討勝了、其子細所仰使者也、此時分、其堺事一途可致沙汰之狀如件、

文和四年二月廿一日

義詮花押

田原直貞 豐前藏人三郎入道殿

〔園太曆〕

文和四年正月廿二日、天晴、彼是云、今日午越許左兵衛佐直冬入洛、此間在丹波國和久邊、是將軍起江州入洛之由、桃井遣飛脚仍馳上、其勢數千騎云々、又云々、○天田郡

桃井馳向東山橋陣於如意山、將軍爲欲向此山而先有其勢之間、入山門云々、

〔參考太平記〕

三十二 神南合戰事 略 ○上將軍○尊ハ三萬餘騎ノ勢ニテ當有文和四年二月

南朝後村上天皇正平十年 北朝後光嚴天皇文和四年



四日、東坂本ニ著給フ、東寺長者補任云々、文和四年正月二十二日將軍自江州取登、比叡大獄云々、歷代皇紀皇年代略記云、二月八日、後光嚴帝、自江州幸義詮朝臣ハ七千餘騎ニテ同日ノ早旦ニ山崎ノ西神南ノ北ナル峯ニ陣ヲ取給フ、右兵衛佐直冬モ始ハ大津松本ノ邊ニ馳向テ合戦ヲ致サント議セラレケルカ、山門三井寺ノ衆徒皆將軍ニ志ヲ通スル由聞ヘケレハ、只洛中ニシテ東西ニ敵ヲ受見ツクロナテ合戦ヲスヘシトテ、一手ハ右兵衛佐直冬ヲ大將ニテ尾張修理大夫高經、子息兵部少輔、毛利家天正本作左衛門佐兵部少輔、按經是兵部少輔、高經、桃井播磨守直常、土岐原、蛸屋、赤松、彈正少弼、川家、毛利家、北條家、四源院、南部、天正本云宗徒者五十三人云々、北條家、南部本不載、赤松、毛利家、天正本不載、土岐、原、蛸屋、赤松、重出、四條、隆俊、手且、赤松氏、隆俊、不可、高經直常也、其勢都合六千餘騎、東寺ヲ詰ノ城ニ構ヘテ、七條ヨリ下九條マテ家々小路小路ニ充滿タリ、

○正平六年正月十五日條參看すへし、

〔參考〕

〔大日本史〕

後村上天皇

正平九年甲午十二月十三日庚午、右兵衛佐足利直冬、

伊豆守山名時氏、發伯者兵討足利尊氏、足利高經與播磨守桃井直常率北國兵應直冬、二十四日辛巳、足利直冬等進到丹波、足利尊氏以後光嚴院走近江、太平記、二

歷代皇紀、皇年代略記、東寺長者補任、毛利家十年乙未、春正月十日丁酉、播磨守桃井直常、至京師、本國太曆〇太平記、作十三日、十六日、癸卯、尾張守足利高經、至京師、太平記、本國太曆〇太平記、作十三日、十六日、癸卯、尾張守足利高經、至京師、

師、天正本、二月二十二日己酉、右兵衛佐足利直冬、伊豆守山名時氏、至京師、國太曆、東寺長者補任、時氏、行本、太平記、係九年、

利直冬、足利高經、桃井直常等據東寺、遣大納言藤原隆俊左兵衛督藤原康長據男山、山名時氏與足利、義詮戰于神南山、敗績、是月足利高經、桃井直常等數戰于京師、三月十二日戊戌、諸軍與足利尊氏大戰于七條、敗績、太平記、十二日、據國太曆、東寺長者補任、北條家、本四源院、本

南都本、天正本、太平記、十三日己亥、足利直冬及諸將退保住吉四天王寺、吳浦途各引還、參取國太曆、東寺長者補任、太平記、

正平十一年丙申

紀元二千十六年  
北朝延文元年

正月

壬午

二十八日、西藤原忠光をして、越中介を兼しむ、

〔公卿補任〕

藤忠光 文和二七月廿五日迁左衛門權佐、廿七日服暇、父、同十月

廿八復任宣下、十一月廿一除服、同二年十二月廿九日兼文章博士、三年六月廿九任右少辨、同日爲防鴨河使、同十一月十五叙正五位上、廿才、同四年十二月廿九轉

左少辨同年十二月廿三辭佐河使如元同五年正月廿八兼越中介延文元六月廿九服解九月五復任同日去博士十二月廿五從四位下同三年八月十二日轉右中辨○康安元年の條

〔大日本史〕三百八十四 國郡司越中欄

大目中原守常觀應元年三月任

權目磯部頼浪觀應元年三月任

十二月丁未

四日、庚戌幕府、井上左京權大夫に命し波多某の遍智院領院林郷の濫妨を停めしむ、

〔三寶院文書〕山城

三寶院前大僧正坊雜掌申越中國院林郷領家職事訴狀副具如此波多野下野守濫妨云々、太不可然不日停止其妨沙汰付下地於雜掌可被執進請取狀更不可有緩怠之狀依仰執達如件

延文元年十二月四日

沙彌花押

井上左京權大夫入道殿

○建曆元年四月條を參看すへし、

正平十四年己亥

紀元二千十九年 北朝延文四年

七月壬辰

六日、丁酉吉見氏頼、得江石玉丸を招く、

〔得江文書〕

參御方可致忠之狀如件

延文四年七月六日

(吉見氏頼 前參河守花押)

得江石玉殿

十一月庚申

源兼世、越中守に任す、

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司越中欄

源兼世延文四年十二月任

正平十五年庚子

紀元二千二十年 北朝後光嚴天皇延文五年

上杉憲顯、越後、越中に轉戦し、東城寺城を圍み、是に至り、又赤田城を攻む、

〔八住所藏文書〕

古文書  
所載

目安

石河遠江入道妙圓并舍弟刑部少輔光親申軍忠事

右去延文四年越後國御發向之間最前馳參三寶寺城致忠節其後於東城寺城○  
中郷向陣田尻御陣波○致宿直同五年赤田城川○上新貴之時光親子息隼人佐光  
波郡被疵之間被檢知訖又於上田水○射妻有兩城所被數々度忠勤也將又鎌倉御共  
仕拙忠節者也然則下給御證判爲備未代龜鑑恐々言上目安如件

貞治三年十一月日

(上杉憲朝)  
承了(花押)

正平十七年壬寅

紀元二千二十二年  
北朝貞治元年

五月

朔乙巳

二十八日、北軍、能登を攻め、富來院氏等を木尾城に破る、是日、足利義詮書を北軍に與へて諸城を陥り、越中に入らしむ、

〔前田家所藏文書〕

能州富來院○羽木尾城合戰事去十六日注進狀披見訖富來齋藤次已下討捕云云、早廻籌策追落當國城等不日可對治越中國凶徒之狀如件

康安二年五月廿八日

六月

朔乙亥

(義隆)花押

直常、信濃より越中に至り、舊好を招致し、將に進みて加賀の富樫介を攻めんとす、

〔參考太平記〕

三十八

諸國官方錄起附前軍并桃井直常越中軍事

越中ニハ桃井播

磨守直常此文下天正本脫甚簡省與信濃國ヨリ打越テ舊好ノ兵共ヲ相語フニ當  
國守護尾張大夫入道ノ代官鹿草出羽守カ、國ノ成敗漫ナルニ依テ、國人舉テ是  
ヲ背ケルニヤ、野尻井口長澤倉光ノ者共、四源院本直常ニ馳附ケル程ニ其勢千  
餘騎ニ成ニケリ、桃井繼テ勢ニ乘テ國中ヲ押ニ手ニサハル者ナケレハ、加賀國  
ヘ發向シテ、富樫ヲ攻ントテ打出ケル、能登加賀越前ノ兵共、是ヲ聞テ敵ニ先ヲ  
セラレシト相集リテ三千餘騎越中國ヘ打越テ三箇所ニ陣ヲ取、桃井ハイツモ  
敵ノ陣イマタ取ヲホセヌ所ニ懸散スヲ以テ利トスル者ナリケレハ、逆寄ニ推  
寄テ攻戰フニ、越前ノ勢一陣先破レテ、能登金勝院本越中ノ兩陣モ全カラヌ、十  
方ニ散テソ落行ケル日暮レハ、桃井本ノ陣ヘ打歸テ、物具脱テ休ケルカ、夜半許  
ニ些評定スヘキ事アリトテ、此陣ヨリ二里許隔タル井口カ城ヘ誰ニモ角トモ

知セスシテ只一人ン行タリケル、此時シモ能登加賀ノ者共三百餘騎打連テ降人ニ出タリケルカ、執事ニ屬シテ大將ノ見參ニ入ント申間、同道シテ大將ノ陣ヘ參シ事ノ由ヲ申サントスルニ、大將ノ陣ニ一人一人モナシ、近習ノ人ニ尋ヌレ共何クヘカ御入候ヌラン、イマタ霽ヨリ大將ハ見ヘサセ給ハヌナリトッ答ケル、陣ヲ並ヘタル外様ノ兵共、是ヲ聞テサテハ桃井殿落ラレニケリト騒テ、我モ何クヘカ落行マシト、物具ヲ着モアリ、捨ルモアリ、馬ニ乘モアリ、騎ヌモアリ、ヒタヒシメキニヒシメク間、燒捨タル火陣屋ニ燃著テ燎原ノ熾盛ナリ、是ヲ見テ降人ニ出タリツル三百餘騎ノ者共、サラハイサ落行敵トモヲ打取テ、我高名ニセントテ、籠ヲ敲キ開テ作テ、追懸追懸撃ケルニ、返合セテ戰ハントスル人ナケレハ、此ニ追立ラレ、彼ニ斬伏ラレ、討ル、者二百餘人、生捕百人ニ餘レリ、桃井ハイマタ井ノ口、城ヘモ行著ス、道ニテ陣ニ火ノ懸リタルヲ見テ、是ハ何様返、忠ノ者有テ敵夜討ニ寄タリケリト心得テ立歸ル處ニ、逃ル兵トモ行合テ息ヲモツキアヘス只引セ給ヘ、今ハ叶フマシキニテ候ソト申合ケル間、方及ハス桃井モ共ニ井ノ口、城ヘ逃籠ル、晝ノ合戰ニ打負テ御服峯ニ逃上リタル加賀越前ノ勢トモ、桃井カ陣ノ燒ルヲ見テ、何トアル事ヤラント恠シク思フ處ニ、降人ニ出テ心ナ

ラス高名シツル兵共三百餘騎、生捕ヲ先ニ追立サセ、鋒ニ首ヲ貫テ馳來リ、鬼神ノ如ク申ツル桃井カ勢ヲコリ、我等僅ノ三百餘騎ニテ夜討ニ寄テ、許多ノ御敵共ヲ打取テ候ヘトテ、假名實名事新シクコトコトシケニ名乗申セハ、大將鹿草出羽守ヲ始トシテ國々ノ軍勢ニ至迄哀、大剛ノ者共カナ、此人々ナクハ争カ我等カ會稽ノ恥ヲハ雪カマシト感セヌ人モ無リケリ、後ニ生捕ノ敵トモカ委シク語ルヲ聞テコソ、サテハ降人ニ出タル不覺ノ人トモカ、倒ル、處ニ土ヲ廻ム風情ヲシタリケルヨトテ、却テ憎ミ笑ハレケル、

○天正本云、桃井播磨守直常信濃ヨリ起テ越中國ヘ打出、舊好ノ兵ヲ語フニ、野尻井口長、倉光、播磨守ニ馳加リケル間、應テ大勢ニ成ニケリ、桃井其勢ヲ併テ加賀國ヘ發向シ、富樫介ヲ攻ントテ打立ケル間、能登、加賀、越前ノ勢共是ヲ聞テ鹿草出羽守ニカヲ合セ、三所ニ陣ヲ張、急ニ拉テ攻戰フ間、桃井終ニ打負テ井ノ口、城ニ引籠レハ、是ヨリ北國ハ富樫介ニ挑マレ、其儘無爲ニ成ニケリ云々、○本條、太平記年月を明記せず、本朝通鑑貞治元年正平十六年六月に繫ぐ、大日本史も亦正平十七年とせり、故に今姑く之に従ふ、正平六年正月十五日の條參看すへし、

〔參考〕

〔大日本史〕百七十七條 十七年義軍竝起直常亦舉兵信濃本國豪族野尻井口氏等應之奔赴日多將進攻富樫介能登加賀兵士三千餘來拒陣未成列直常掩擊大破之至夜直常欲議軍事潛赴井口城會能登加賀兵士三百餘來請降左右不知直常所在由是營中大騷擾失火降卒乘亂反擊斬獲三百餘人而歸直常在途顧視營壘火起以為敵軍來襲將還拒之有敗卒急呼曰事敗矣請速走直常不知所為遂走投井口城太平記〇毛利家本天正本曰十九年直常降足利氏而諸本皆曰後雅髮匿京師〇下文は直常の越中に走り兵を起して松倉城

正平十八年癸卯

紀元二千二十三年 北朝貞治二年

六月己亥

五日癸卯光禪寺旨淵寂す

〔日本洞上聯燈錄〕二 永光明峰素哲禪師法嗣

越中州光禪寺松岸旨淵禪師未詳其姓氏加州人也茂年割愛薙髮依止瑩山於大乘山一見以大器期之恒加訓誨後參明峰于洞谷問曰如何是空劫已前自己峰曰天上天下唯我獨尊師擬開口峰便打師當下領悟自是服勤多年晨夕敲磬盡窮玄

微既而開法播之永天繼茲越之光禪繼伍景慕道聲日起觀應元年遷大乘未幾舉洞谷僧問如何是洞谷宗風師曰五老峰頭月正明如何是和尙家風師曰夜參不點燈僧曰學人不曾請師指示師曰猿叫青嶂後鷹還五老前能州刺史無藏居士欽師道狷建光恩寺延為第一代住持貞治二年六月五日示寂嗣子照菴鑑德翁呈玉泉言等各化一方

正平二十二年丁未

紀元二千二十七年 北朝貞治六年

二月戊申

十三日庚申大藏卿菅原長綱をして越中權守を兼ねしむ

〔公卿補任〕 非參議從三位菅長綱 大藏卿貞治六年二月十三日兼越中權守

〇貞治六年の條

八月

伊井〇名越中守たり

〔大日本史〕三百八十四條 國郡司越中守欄

伊井〇名貞治六年八月見

九月乙亥

南朝後村上天皇正平二十二年 北朝後光嚴天皇貞治六年

南朝後村上天皇正平二十二年 北朝後光嚴天皇貞治六年

四四〇

二十七日、辛義詮三寶院僧正光濟を以て鎮守八幡宮別當に補し、且越中吉河西東の地を本社に寄付し、其祭資に充つ、

〔三寶院文書〕

鎮守八幡宮別當職事所補任也早於當社、三條坊門每月御神樂并大般若經轉讀以下之神事可被執務之狀如件

貞治六年九月廿七日

正二位花押

三寶院僧正御房光濟

奉寄 鎮守八幡宮

越中國吉河西東猪俣一族事

右於當社三條坊門爲毎月御神樂并大般若經轉讀之料所寄進之狀如件

貞治六年九月廿七日

正二位源朝臣花押

越中國吉河西東猪俣一族事所奉寄鎮守八幡宮也早可打渡社家雜掌之狀如件

貞治六年九月廿七日

〔花押〕

桃井修理大夫殿直信

十一月甲戌

十八日、辛足利氏の家人本郷昭覺の所領越中米田保地頭職を冒す者あり、是日、幕府、守護桃井直信に命し之を本主に付せしむ、

〔古證文〕

本郷左衛門大夫入道昭覺申、越中國米田保毛利一族地頭職事先度被仰之處、不事行云々、太無謂、不日退濫妨輩、相渡下知於昭覺代可申左右不可有緩怠之狀如件

貞治六年十一月十八日 義詮御判

桃井修理大夫殿

正平二十三年戊申紀元二千二十八年 北朝應安元年

二月壬寅

二十四日、壬直常逃れて越中に來れり、  
〔花營三代記〕上 二月廿四日、桃井播州禪門、迹下越中國云々、

南朝後村上天皇正平二十三年 北朝後光嚴天皇應安元年

四四一

○本書の文意を按ずるに、他國より逃れて越中國に下向したるものなり、然るに本朝通鑑には、本文に據り、斯波義將に加賀に敗られて越中に歸るとあるも、恐らくは然らざるへし、正平六年正月十五日、二十四年四月十二日、建徳元年三月十六日、二年七月二十八日の諸條を參考すへし、

〔參考〕

〔本朝通鑑〕

丁未六年、南朝、正平二年八月、斯波義將、獻使於京都、陣道朝無罪請赦、先是、細川頼之密諫義詮、且諭諸將、而通使越前、教誨義將、故義詮許其請、而使義將領越前、尾張、如故、且加越中守護職、由是富樫介得援、直常不能取加州、  
應安元年、南朝、正平三年是月、○正義滿令斯波義將歸越前、拒桃井直常、直常老於武事、故屢戰克之、然義將與富樫介共對陣、超月、  
二月乙丑、桃井直常爲斯波義將被敗、避加賀國、歸越中國、由是義將威振于北方、  
三月、斯波義將率越前加賀兵、向越中、擊桃井直常、  
五月、斯波義將擊破桃井直常、直常逃入松倉城、越中過半屬義將、詳列曰、是月十八日、直常病死、  
正平二十四年己酉 北朝、應安二年

四月 朔乙丑

十二日、丙寅直常、直和等、松倉城を拔き、遂に能登に入り、吉見氏頼の族將頼顯、伊豫入道と戦ふ、尋て頼顯、能登の兵を率ゐて來り、富樫昌家を援く、桃井の軍利あらずして、越中に退く、

〔花營二代記〕

應安二年四月十二日、越中國松倉城沒落之由、後日有其聞、

〔前田氏所藏文書〕

得田加賀介章房申軍忠事

- 右今年 應安二年 四月廿八日、桃井播州以下凶徒乱入當國、能州之間、章房軍前馳參金丸城、屬于吉見左馬助殿御手、至于六月一日、連日致合戰忠、
- 一北國爲御退治、御下向之處、桃井中務少輔以下凶徒加州平岡野陣取、依及富樫城難儀、同八月十五日、御發向之間、屬吉見左馬助殿御手、於野々市、日夜々致合戰畢、
- 一同九月八日、押寄平岡野陣致合戰中、務少輔已下凶徒等追落畢、
- 一同十七日、御敵引退、越中國一乘之城間、御發向即追落畢、

一同廿四日、井口千代、檣城責落畢、  
 一同十月廿二日、松藏城御發向之間御共仕、至于御歸國之期抽忠節畢、  
 一同十二月廿八日、楯籠山方六郎左衛門入道以下凶徒谷山庄山方城之間馳向  
 致合戰、同晦日、彼城追落畢、比等次第大將御見知之上者、下賜御證判、爲備龜鏡  
 恐々言上如件、

應安二年十二月日

承丁(花押)

〔得江文書〕

得江八郎次郎季員申軍忠事

右今年應安四月廿八日以來至于六月一日、於能登部城屬于吉見伊豫入道殿  
 御手、日夜抽戰功畢、  
 一御下向之間、自越前國金津加州御越之時御共仕、屬于吉見左馬助殿御手、向平  
 岡野致連日合戰忠畢、  
 一同九月七日、御敵攻寄宮腰之間、同九日、當所御發向之時御共仕處、凶徒即引退  
 大野宿畢、

同十二日夜、御敵令沒落大野宿、取陣宇多須山之間、同十五日、被責落彼城、同十  
 七日追落松根、同十八日越中國千代檣城御發向之時、屬同御手、彼城至于沒落  
 之期、致忠節畢、

一同十月廿二日、御發向松藏城之間、御供仕抽忠勤畢、  
 一同十二月二日、御歸國御共仕、凶徒御退治於所々致忠節畢、  
 是等次第賜御證判、爲備向後龜鏡、恐々言上如件、

應安二年十二月日

承丁 (判) (吉見氏賴沙彌道源)

○正平六年正月十五日、二十三年二月二十四日、建德元年三月十六日、二年七  
 月二十八日の諸條參看すべし、

〔參考〕

〔大日本史〕

百七十七 桃井直常

二十四年、走越中起兵、拔松倉城、○上文は十七年六月に  
收め、下文は建徳元年三

條に收む、  
月十六日

〔本朝通鑑〕

五十

己酉、○應二年、南朝、正平  
二十四年、夏四月、乙丑朔、丙子、斯波義將陷越中

松倉城、桃井直常亡跡、

南朝後村上天皇正平二十四年 北朝後光嚴天皇應安二年



九月癸巳朔辛酉桃井直常復入松倉城然越中國兵多降斯波義將故直常兵勢自

尊卑分脈

清和源氏桃井

貞頼 六郎

直常 播磨駿河守

直和 中務少輔

直信 修理大夫

詮信 刑部少輔

直弘 爲直常子

○花營三代記に右馬助直和桃井播磨入道孫子と云ひ尊卑分脈に直弘爲直常子と云ふ蓋孫は猶の字弘は和の字の誤寫ならん續本朝通鑑直常の孫と爲すは非なり直和の官分脈中務少輔に作る文書と合ふ今之に従ふ

三州志

轉 卷餘考

二年己酉夏四月二十八日直常能登へ進ミ入ルユへ得田

加賀介章房得田次郎章通ノ後也但金九城ニ抵リ吉見左馬助ノ族ニ屬シ六月朔日ヨリ數日連戦ス又氏頼ノ將得江八郎次郎季員モ上ケル名ナラシメ吉見伊豫入道ノ族ニ屬シ四月八日以來六月朔日マテ能登部城ニ在リ城迹今鹿島郡スニ據テ日夜ヲ定メス擊鬪ス或ハ桃井中務少輔直和稱ス三代記ニ直常ノ孫ト

トナス今曰賀州平岡野永ノ廣岡也壽ニ布營シ富樫カ城中野々市城是也此時ヲ觀觀スルヲ以テ章房季員左馬助ニ屬シ季員ハ平岡野ニテ銳戰累撃シ章房ニ八月十五日野々市ニ於テ合及ヤマス九月七日桃井方ヨリ宮腰へ還擊スルニ利アラス九日引去リ大野石川ニ宿陣シ十二日夜又大野ヲ引去テ宇多須山辰山ナル今ノ卯ニ下營スルヲ左馬助十五日攻テ此城ヲニ小城有シナラシメ山ノ十七日松根嶺道跡存スノ陣營十八日越中國千代ヶ様城今云彌波郡庄下郷今モ千代ヶ様ノ遺跡アリ十月二十二日松藏城本倉也今原ト累進連攻シテ數城皆屠ル章房ハ九月八日平岡野ノ敵陣ニ進撃シテ直和ヲ趁散シ直和一乘寺城河北彌波ニ在リ遺ニ引去テ左馬助ト俱ニ又之ヲ尾シ驅リテ二十四日井口城方人呼フ城跡存スナリ城四ヲモ取リ十月二十二日松藏ノ陷城ニ會シ十二月十八日山方六郎左衛門入道此人未考フノ保メル若山庄郡洲山方城此城地今考馳向ヒ奮闘シ晦日此城ヲモ屠ル本朝通記ニ應安二年九月斯波義將越中ノ桃井直常ヲ倍越中ニ兵ヲ擧ク舊好ノ月直和及ヒ伯父桃井修理大夫直信其子刑部少輔詮信此本文ヲ以テ起ルハ直和今九月ハ加賀ニテ時世相合ハス

三州志

南朝後村上天皇正平二十四年 北朝後光嚴天皇應安二年

越中礪波郡

一乘寺 乘一作條、或呼升形山、此山賀越分界之地而跨二國也

壇城 庄城 千代様 三名一蹟也、千代様今作千代例、在庄下郷庄金剛寺村領山

應安二年桃井直和千代様ニ據ヲ能登ノ吉見左馬助攻之、五月廿四日陥ル

吉見氏頼花押見證ノ古軍狀ニ見ヘ

池尻 井口 蛇喰 三名一跡也、城地在井口郷池尻村領、井口村在城西故亦呼井口地也

元弘中土著ノ士井口藏人據スト云、注應安二年九月二十四日吉見左馬助攻テ桃井直和ノ井口城ヲ陥スト、得田章房申軍忠古狀ニ見ニ

後龜山天皇

建德元年庚戌 北元二千三十年

三月 朔庚寅

十六日、乙直常、直和を遣はして長澤に陣せしむ、斯波義將來り攻む、直和敗

死す、既にして松倉城兵逃降相踵く、

〔花營三代記〕 上 應安三年三月五日、桃井右馬助直和、桃井播磨同伊與守等打

出越中國長澤之由、後日有其聞、守護人治部大輔義經并富樫竹童丸注進云々、

三月十六日、於長澤、合戰、直和以下數輩被誅伐云々、後日注進、子細同前、

三月十八日、桃井餘黨、松倉城之輩、或降參、或沒落云々、

○正平六年正月十五日、二十三年二月二十四日、二十四年四月十二日、建德二年七月二十八日の諸條參看すべし、

〔參考〕

〔太平記〕 翌年毛利家北條家天正本、貞治五年非也、毛利家本等前云貞治五年、得、按貞治五年八月、道朝越前、而今云、同年七月、卒、相、齋、南、都、本、作、貞、治、六、而、攻、之、六、年、七、月、道、朝、卒、櫻、雲、記、云、貞、治、五、年、道、朝、卒、又、非、也、七、月、二、天、正、本、云、七、月、十、日、道、朝、俄、ニ、病、ニ、侵、サ、レ、逝、去、シ、ケ、レ、ハ、子、息、治、部、大、輔、義、將、様、々、ニ、歎、申、サ、レ、ケ、ル、ニ、依、テ、同、九、月、ニ、宥、免、安、堵、ノ、御、教、書、ヲ、成、レ、京、都、へ、召、返、サ、レ、幾、程、ナ、ク、越、中、ノ、討、手、ヲ、承、テ、桃、井、播、磨、守、直、常、ヲ、對、治、シ、タ、リ、シ、カ、ハ、降、參、武、家、段、云、本、此、上、降、參、今、時、氏、爲、義、將、被、討、者、相、齋、齋、按、花、營、三、代、紀、載、應、安、元、年、二、月、二、日、桃、井、播、磨、州、禪、安、門、四、下、越、中、國、應、安、四、年、狼、據、越、中、而、無、其、所、終、今、所、謂、義、將、討、直、常、平、之、者、蓋、在、應、安、門、四、後、乎、應、テ、越、中、守、護、職、ニ、補、セ、ラ、ル、是、ヨ、リ、北、國、ハ、無、爲、ニ、成、ニ、ケ、リ、

南朝後龜山天皇建德元年 北朝後光嚴天皇應安三年

南朝後龜山天皇建德元年 北朝後光嚴天皇應安三年

四五〇

〔大日本史〕

百七十七 桃井直常

建德元年更發兵遣子中務少輔直和出陣長澤守護斯波

義將併富樫竹童丸兵來攻直和敗死餘衆走投松倉城尋又離叛直常亡匿明年再

舉兵越中與義將兵戰不利又與能登兵戰于後位莊花營三代記本書于中務少輔

義將作義經傳太平遂為義將所敗太平不知所終

〔本朝通鑑〕

五十 庚戌

三年南朝改正平二年三月庚寅朔甲午桃井直和常

孫助右蜂起越中國據長澤城乙巳越中國守護斯波義將加賀富樫竹童合兵擊桃

井直和斬之其餘黨在松倉城者或逃去或降義將

〔南山巡狩錄〕

三月五日

桃井直常與孫右馬助直和同伊豫守等兵を越中國長

澤に發し武家方と合戦よおよふ花營三代記

三月十六日越中國に在り治部大輔義經富樫竹童丸等長澤に馳集り桃井り

一族と合戦有此時桃井直和以下敵れ爲に討る花營三代記○參山考太平記に太

る降參乃直常は桃井直常も同じ武家方に降參と云又同卷道朝諸大名に記言せら

るは條に直常は越中國にて足利義將の降參に討るといふ道朝又花營三代記に正平

廿三年北朝の應安元年二月廿四日桃井直常亦越中國に逃下るを詳に述す北

朝乃應安四年猶越中に在りて武家と合戦なす事見へ其後逃下るに有は義と註辨のし

是を合考すれば義將直常を討たり案なふるに應安四年太平記の時代は義と註辨のし

たりさも有るべしといへとも再び案なふるに應安四年太平記の時代は義と註辨のし

言の去頃迄を記せし例なるに直常か事跡に限り遠に平記迄を括り書し諸大名

花營三代記大輔義經の爲に討れしを義將の爲に討らしとれと一族右馬

助直和治部大輔義經の爲に討れしを義將の爲に討らしとれと一族右馬

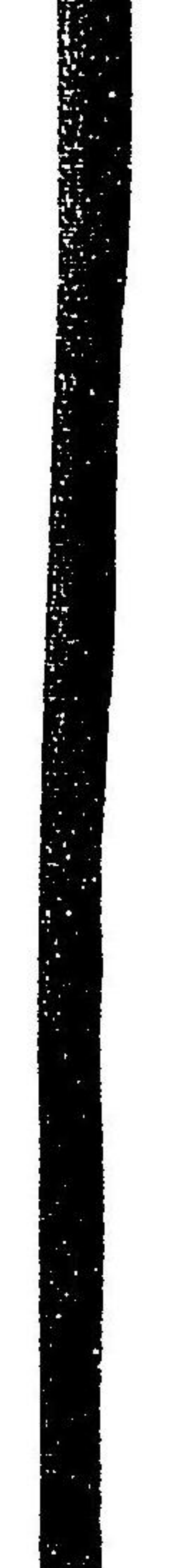
か討死を記せしは太平記に直常○直常を討り取し直常を討らしとありて必

三月十八日桃井り一族去る十六日戦ひ討る者多く敗軍に及ひしりと

猶も松倉城に籠籠り勝負を決せんと及されとも此頃ふ至りては城兵ぬけぬ

けに寄手に降參ありと記り花營三代記

〔尊卑分脈〕 清和源氏斯波



南朝後龜山天皇建德元年 北朝後光嚴天皇應安三年

四五〇

義植

〔斯波家譜〕 左兵衛督義將朝臣の道朝禪門ノ子よて候、十一ノ年元服候、公家の儀式よて從五位下治部太輔任候、此時初て管領職を被仰付候を、高經堅く辭退申候處、猶錦小路の御例トシテ當家の事ハ自餘の方へ執事と被仰付候ニ者可相替候之由、別而被仰出候程ニ領掌申、其時義將朝臣兄ノ左衛門佐氏頼ト申候ひし、當時の義ハ何とも候へ、末代ハ御遠族の多くひみ世間の心得成行へく存とて、佐ゐに遁世候つる、信濃庵主玉扱義將朝臣勘ヶ由小路室町ニ屋形を作り候ひしより、稱號を錦小路ト申候、惣て此義將朝臣ハ越前越中能登若狹信濃佐渡六ヶ國を歷任候し、法燕寺道將雪溪應永十七年五月七日逝去六十一と申候義將の事よて候、

建德二年辛亥

紀元二千三十一年 北朝應安四年

四月

朔癸未

藤原仲宗、越中守に任す、

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中守 藤原仲宗 應安四年四月任、

七月

朔辛亥

十七日、越中守護斯波義將、島田彌二郎に命して、其肩占する所の堀江莊地頭職小泉村を祇園社に還付せしむ、

〔祇園執行日記〕

七月一日、自越中夏見上洛、小泉事自玉堂殿被下少輔御狀云、

島田無替地之由歎申先々暫可閑云々、此上可爲何様哉云々、

十日、天晴、堀江庄地頭職小泉村給人島田押領事申入之處、恐可返付社家之由、御

狀被出之、第三度也、堀江及小泉村あり

十二日、天晴、小泉事、先日大輔殿御狀文章大様之間、爲申上進伊口處、客來之間、不

申入之、

十六日、雷鳴、參玉堂、堀江小泉御文事申之處、可被調置、今夕可重取之由、以井山中

次被仰之間、及晚進朝立之處、御休息之間、不申入云々、

十七日、天晴、堀江小泉以下村々事、玉堂殿重御文被下、少輔殿今日被出之、使朝立、

廿一日、天晴、參玉堂、略中、小泉事、先日御狀畏入之由申了、

廿二日、夕立、越中へ夏見下向、玉堂重御狀持下、糧物一人分三連給之、

〔附録〕

南朝後龜山天皇建德二年 北朝後光嚴天皇應安四年

〔祇園執事日記〕

應安五年七月廿日、天晴、夏見近日可下向越中之間、餞送寄合、

圓信、神法、仁正、玄伊、

廿六日、天晴、夏見越中へ立、糧物二人夏見三連、男二連、已上五連給之、此外下人男百五十文給之、夏見帷代五連、小袖請分四百五十文、又ハ、キ分廿文給之、

玉堂殿御文二通、一通少輔殿、一通二宮入道、又甲斐八郎進少輔殿狀入一通有之、小泉井上高木也、又恐身狀少輔へ進之、又二宮入道許へ卷數各進之、山路許へ茶一斤、五錢土肥許へ同一斤、五錢遣之、

九月四日、天晴、越中ヨリ夏見狀土肥狀自安田許以使送之、

七日、雨降、自丑刻越中へ返事自安田許取ニ來、今日夏見山路土肥許へ返事下了、山路許へ茶筥一杪一下之、夏見許へ扇一本欲下之處、僧一人下間不可持之由申間止之、大力南方等夏見可請取之由、土肥申旨雖申之、土肥狀ニハ不申之、年貢急可沙汰之由申間、先今年ハ可爲其儀之由、夏見許へ申下了、

十月卅日、天晴、參將軍、名々見參、堀江事、不道行可爲何様哉之由申之處、當時有子細自大方殿ハ玉堂大輔殿ニ不被仰通云々、十二神御名可書給之由被仰之間、於當座出之、女房達名あせ、局云々、

十一月一日、天晴、僧都來、堀江村上、甲斐八郎ニ可契約由事可申談云々、

二日、天晴、堀江事内奏爲申之向休所之處、違例之間無見參、越州公方御領事内々雖申之、不渡之間、申公方御教書了、此上者一口料所事可被申公方御教書歟之由、被仰之間、退出了、略下

八日、天晴、土肥許へ年貢事狀并夏見許へ之狀安田許へ遣之、他行留守ニ置云々、十一日、初雪降二寸、堀江南方大力年貢サイフ一十貫以土肥狀上之、代官安田房彼狀持來、今年事北堀江高柳輩者、一圓管領、大力半濟同領知之上、南方并兩度落間、年貢無正躰云々、十貫サイフ外夏見方へ二貫沙汰遣云々、自是申下給恩歟、替屋四條坊門町北云々、替文サイフ在之、又生鮭三尺、スチコ十自土肥許上之、

十四日、天晴、高木村事宗壁許ヨリ玉堂殿自筆御書少輔殿へ被出之間到來、安田殿來明日土肥中間可下向、先日際符請取可給之由申間、返事ニ載てサイフ一給之由書之、無別請取、

玉堂殿自筆狀、山路許へ狀ニ入テ土肥返事ニ副テ下之、夏見許へ之狀同下了、十五日、堀江村へ御教書爲申之、松田許へノ申狀遣北坂之處、今日付之可申沙汰

之由領狀云々

十六日天晴堀江年貢自土肥能登許サイフ用途十貫文今日伊與房取テ來之間衣物石房女房達下女等ニ給之

十二月一日朝小雪自晝晴萱野ヨリ夏見上洛今年早損之間一貫六百五十文分ニ而絹一上シ百姓可起請文書進之絹今一不沙汰之條以外次第也  
二日天晴夏見ハタコフルイ沙汰之酒數献及一聲了

二十八日寅直常義將と相戦ひ是日又能登軍と後位莊に戦ふ

〔花營三代記〕上

七月廿二日自越中國飛脚到來越中國桃井播州禪門打出之間合戦兩方討死手負數十人御方勝戦云々

廿八日桃井與能登勢於越中國後位莊合戦云々

八月十二日去八日夜桃井引退越中陣之山飛脚到來

○正中二十三年二月二十四日二十四年四月十二日建德元年三月の諸條參看すべし

〔參考〕

〔本朝通鑑〕八十五

辛亥〇應安四年南朝建德二年秋七月辛亥朔壬申桃井直常復起于越

中國國士拒之互殺傷數十人直常失利戊寅直常與能登國士戰於越中後位莊

八月辛巳朔丙戌京軍自南方歸戊子桃井直常退越中陣而逃去按此後桃井不見

俗傳桃井部族零落爲舞者世

文中元年壬子

紀元二千三十二年北朝後圓融天皇應安五年

十月甲戌

十七日寅朽木氏綱所領越中部田岡成地頭職三分の二を兄氏秀に讓る

〔朽木文書〕

楓軒文書纂

越中國部田岡成兩名地頭職事

右兩名地頭職本御下文渡申候當御代度々御教書并賜御施行等知行無相違之處近年依國動亂不知行之間出羽二郎氏秀方渡申候被改沙汰有理者先立任契約狀彼土貢參分一於被去出殘於三分二者可有知行候本御下知渡申上者永代更不可有相違仍狀如件

應安五年十月十七日

氏綱花押

○越中國部田岡成之地名は方今の地志地圖に所見なし何郡なるか詳なら

之由領狀云々

十六日天晴堀江年貢自土肥能登許サイン用途十貫文今日伊與房取テ來之間  
衣物石房女房達下女等ニ給之

十二月一日朝小雲自晝晴萱野ヨリ夏見上洛今年早損之間一貫六百五十文分  
ニ而絹一上シ百姓可起請文書進之絹令一不沙汰之條以外次第也  
二日天晴夏見ハタコソルイ沙汰之酒數献及一聲了

二十八日庚戌直常義將と相戦ひ是日又能登軍と後位莊に戦ふ

〔花營三代記〕上

七月廿二日自越中國飛脚到來越中國桃井播州禪門打出之  
間合戦兩方討死手負數十人御方勝戦云々

廿八日桃井與能登勢於越中國後位莊合戦云々

八月十二日去八日夜桃井引退越中陣之山飛脚到來

○正中二十三年二月二十四日二十四年四月十二日建德元年三月の諸條參  
看すべし

〔參考〕

〔本朝通鑑〕八十五

辛亥〇應四年南朝建秋七月辛亥朔壬申桃井直常復起于越

中國國士拒之互殺傷數十人直常失利戊寅直常與能登國士戰於越中後位莊

八月辛巳朔丙戌京軍自南方歸戊子桃井直常退越中陣而逃去按此後桃井不見

俗傳桃井部族零落爲舞者世  
號幸若移居越前未知然否

文中元年壬子

紀元二千三十二年  
北朝後圓融天皇應安五年

十月甲戌

十七日庚戌朽木氏綱所領越中部田岡成地頭職三分の二を兄氏秀に讓る

〔朽木文書〕

楓軒文書集

越中國部田岡成兩名地頭職事

右兩名地頭職本御下文渡申候當御代度々御教書并賜御施行等知行無相違之  
處近年依國動亂不知行之間出羽二郎氏秀方渡申候被改沙汰有理者先立任契  
約狀彼土貢參分一於被去出殘於三分二者可有知行候本御下知渡申上者永代  
更不可有相違仍狀如件

應安五年十月十七日

氏綱花押

○越中國部田岡成之地名は方今の地志地圖に所見なし何郡なるか詳なら  
ず

〔参考〕

〔系圖纂要〕 宇多源氏

朽木 佐々木流

義綱 出羽五郎左衛門尉、出羽守、从五下、入道種義、  
住近江高島郡朽木庄、稱「號」朽木、領常陸國本木郷、陸奥國板寄郷、山城國久

時經 出羽四郎左兵衛尉、  
元弘二年八月、補朽木庄地頭、九ノ賜、越中國岡成名領、

義氏 出羽四郎、  
左衛門尉、

頼氏 池大納言頼盛、出羽七代河内二郡、出羽守、  
後經二、可壽丸、出羽七代河内二郡、出羽守、  
甘繩、正平、六年、六ノ地、武藏國之内、丹野、田坂、村、安郷、内余保呂村、相模國鎌倉郡

氏秀 出羽三郎、出羽守、从五下、入道、子近江高島郡後一條地頭、  
天授二年丙辰、

氏綱 本氏時、出羽五年、左衛門尉、正平十八年繼父、  
天授二年丙辰、

二月乙酉 北朝永和二年六月

菅原時親、越中權守に任ず、

〔公卿補任〕

非參議從三位菅時親 治部卿永和二年二月日兼越中權守

五月甲寅

十四日、丁二宮信濃入道、稅錢を北朝藏人所所管越中野市鑄物師に課す、義將令して之を止めしむ、

〔東寺文書〕

内裏藏人所燈爐供御人越中國野市金屋鑄物師等申、彼職者被停止諸國守護地頭預所等煩勤仕 勅役之條、勅裁并武家御下知施行等分明之處、於國二宮入道宛課公事之旨歎申候事實者不可然候所詮公驗以下歷然之上者、向後可被止彼煩候也、恐々謹言、  
永和二

五月十四日

玉堂殿 義將在判

伊豫守殿

内裏藏人所燈爐供御人越中國都波那鑄物師等申、彼職者被停止地頭預所等煩勤仕 勅役之條、勅裁并武家御下知施行等分明之處、始宛課公事旨歎申云々、就之者五月十四日自京都堅被仰下處也、所詮於向後者可止彼煩之狀、依仰執達

南朝後龜山天皇天授二年 北朝後圓融天皇永和二年



如件

永和二年七月十一日

左衛門尉宗直在列

二宮信濃入道殿

内 越中國射水郡

武家御下知 京都固

永和二年七月十一日

左衛門尉宗直列

由宇又次郎殿

○尊卑分脈諸家系圖纂に二宮見えす系圖纂要二宮氏年代を記せず伊豫守左衛門尉の二氏姓を闕けは誰たるを詳にする能はず然れとも其事實に由りて推考するに伊豫は斯波の守護代にして左衛門は其代官或地頭の如きものなるへし

天授三年丁巳

北紀元二千三十八年

六月

朔

越中の國人、守護代某と戦ひ、細川頼之の邑太田莊に逃る、某の兵入て之を捕ふ、頼之之を聞き怒り篠本某に命し之を撃しむ、

〔後愚昧記〕

七月十三日略又聞、去月於越中國國人與守護代合戰、國人等多被討取了、守護方乘勝之間、國人等被討漏之輩逃籠武藏守所領太田庄之處、守護勢寄來る、猶討殺餘黨輩又燒拂庄内了、仍武藏守合忿怒、與守護代爲合戰下、遺篠本太田庄了云々、篠本先下着飛驒國、相催軍勢、可越越中云々、依此確執、可及天下重事之旨、有巷說等云々、

〔三州志〕

越中國新川郡太田庄

八月

朔

八日、甲寅京師訛言あり、義將頼之と越中太田莊の事を争ひ、諸將二氏を援け、將さに戦はんとす、

〔後愚昧記〕

八月八日、今夜又可有騒亂之由風聞云々、人々推量分ハ依越中合戰武藏守與越中守護入道故大夫向背之儀也、依之兩方大名等可見繼之間、可及天下珍事云々、其間雖有種々巷說、不遑記之、

〔參考〕

〔東寺過去帳〕

法花寺殿、雪溪、勘解由小路、右兵衛督入道、道將應永十七、五、七、入

滅後繼之  
二從テ

南朝後龜山天皇弘和三年 北朝後小松天皇永德三年

四六二

〔忠定記〕

應永十七年五月七日 今日午刻前管領入道左衛門佐源義將朝臣法名圓寂也春秋六十一

弘和三年癸亥

北朝後小松天皇永德三年

僧浮玉寂す、

〔本朝高僧傳〕

三十 丹後安國寺沙門浮玉傳

釋浮玉字寶山、晚號几山、藤姓、越中人、母平氏、夢持法華僧來投宿、即娠、誕而方時、偶見僧誦法華、輒抱持其衣、躍然喜、十歲禮郡之興聖寺竺山源禪師、斐染受戒、山授以法華、伊吾能上口、十六入京、參儉約翁于南禪、每有陞堂、玉出衆進語、翁稱英靈、翁順世後、通翁則夢窓石相次住持、玉歷參二老、職在知賓、聞嵩山在西禪、越方熾、特往參問、機語投契、及山住南禪、命典藏教、從於山、退休丹之幸泉、秋月山應建仁之請、以秋月付玉曰、夫天橋靈區、往來之僧、落袍之地也、汝其盡力興建、亡何層閣高堂、飛出林巒、山招居後版、山受圓覺之命、玉辭旋丹州、山臨遷化、付與法衣一襲、玉展遺像、始獻嗣香、曆應二年、天下每州置安國寺、秋月預其數焉、放牛林公住東山日、玉分座接納、應安元年、出世伯之禪、永寺居三年、歸丹之舊院、垣越創西林寺、方請爲開山始祖、又移幸泉殿堂、像設爲之一新、康曆年中、大將軍義滿源公以洛之真如相之淨智請帖荐至、固辭不就、弟子數輩道聚寂寞之濱、永德三年三月、以風痺疾持不食、二十四

日、深談至晚、翌旦玉使侍僧謝訪、僧未復命、玉索紙筆、書偈曰、不管輪回悟了輪回、悟了底味、無去無來、閑筆如假、寢然滅之逝矣、俗齡八十有奇、僧臘六十有六、塔於西林矣、

元中七年庚午

北朝後小松天皇明徳元年

八月辛酉

僧綽如、瑞泉寺を創建す、

〔瑞泉寺文書〕

郡○東 郡○井波 町波

勸進狀

勸進沙門堯雲敬白

請特蒙衆人恩憐、預諸方助成、祐堂舍供養、敬彌陀三尊、定一結止住僧衆、致六時不退精勤、專自行化他利益、成行學恢弘、願望子細狀、右彌陀弘誓之船、浮苦海、度衆生、安養法報之國、裝妙臺、分引群類、西土之教、下界在緣者、歎弟子幸入真門、偏欣淨域、道念雖疎、疎生滅遷變之相、在眼前、以易悟、行業雖、飲自他解脫之計、蓄心底、以不休、而去明德、初曆季陽、下旬、暫辭上都之塵累、遙赴北陸之邊邑、頻在幽居之志、屢卜、栖息之地、然而无本尊之可恭敬、无寺院之可住持、只

南朝後龜山天皇元中七年 北朝後小松天皇明徳元年

四六三

致瞻仰於虛空之外、僅擬觀解於禪念之中、雖應不乖法界唯心之真理、无便乎想淨土真要之靈儀、爰不圖先得一勝地、即越中國都波郡山斐鄉內、以此處稱井波山深、今俗緣偷、里遠、今人事稀、觀念无妨、練行在便、仍壁山腰、拂莓雲、既及立柱之企、兼定題額之字、蓋於此地、在靈水、故稱瑞泉寺、觀夫東望則在峻嶺、峨峨風傳、回音之響、北顧亦在長河之渺、渺波湛、真如之色、或西在靈社、高瀨明神之仁祠、春花芳、南在蕭寺、止觀圓融之學、窓秋月明、凡佛法繁昌之地、四神相應之砌也、但如弟子者、遲遲春日、歎蔬食之猶空、嫋嫋秋風、愁薜衣之易破、與隆之思、雖切困乏之力、難覃、自非諸檀那之助成者、爭遂一伽藍剎、刷乎就中、勸誘若限一國者、願望難達、大功歟、然者、匪啻自國隣邦之合力、愆亦仰十方諸人之與善、伏乞、都鄙遠近、豪貴卑賤、信男信女、千門萬戶、各同其志、共助此願、不嫌尺木不棄、寸鐵偏任、志之厚薄、不論物之輕重者也、於戲、流年不停、猶過於山水之浪、妄雲頻覆、爭在兔獄火之烟、豈如植生前之善種、努費夢後之行、枉然、則助成道俗信順、上下現世百年之間、拂災難、分遊壽域、最後十念之終、除惑障、分致淨刹、善哉善哉、勉矣勉矣、仍所唱如件、

明德元年八月 日

勸進沙門堯雲敬白

〔瑞泉寺記〕

驛有巨剎曰瑞泉寺、○中後小松天皇明德紀元歲次庚午、真宗第五

世綽如上人所創立也、時南北戰爭未平、大谷本廟衰廢殆極矣、上人曰、京畿難敷教化、未知僻地何如也、我將試之、出游於越中、寓其徒弟杉谷慶善家、杉谷即八乙女山背地名、上人夙有博學宏辭之譽、應召將赴闕下、騎到山前、馬跑地長嘶、鞭之不前、乃掘地數尺、靈泉湧出焉、上人喜曰、我道其興乎、猶泉之滾滾不止、盈科而行、終於海也、於是相宅於泉側、名其地曰井波寺、曰瑞泉、先記其祥也、入對稱旨、因勸講大無量壽經、賜別號周圓上人、蓋稱其德也、上人因奏曰、臣僧堯雲、將創一寺於越中八乙女山下、而費用無所出焉、願許臣以十方勸進之舉、制曰可、辭還、賜以聖德太子自雕靈像及巨勢金岡所畫太子傳八幅、乃作勸進狀、以募有緣、越中越後、加賀、能登、飛騨、信濃、六州士女奔走助役、未幾堂宇落成、於是安置彌陀尊像及所賜太子靈像焉、宣旨爲敕願所、自此賽者漸多、上人喜曰、湧泉之兆、果不虛也、上人以南北講和之明年夏四月二十四日、寂、葬於寺後山林之間、今稱大谷是也、

〔大谷寺誌〕

第五世綽如上人名ハ時藝、又堯雲ト稱ス、後村上天皇正平五年三月十五日誕生ス、善如上人ノ子ナリ、童名ヲ光德磨ト稱シ、權大納言時光公ノ猶子トナル、某年得度シ法印ニ叙シ、後權大僧都ニ任セラル、宏才博識ニシテ世ニ重セラル、元中七年職ニ就ク、當時近畿騷亂、教ヲ布キ難キヲ以テ、法務ヲ法嗣巧

南朝後龜山天皇元中七年 北朝後小松天皇明德元年

如上人ニ委ネ、北陸ニ巡錫ス、越中國利波杉谷ノ地ヲトシ、宗義ヲ弘通ス、此地固ト人煙稀疎ノ幽境ナリシモ、上人ニ歸スル者四來シ、遂ニ都會ヲナセリト云、後小松天皇明德元年、異邦使ヲ遣ハシ書ヲ朝ニ獻ス、文辭難澁容易ク讀ヘカラス、乃チ諸寺ニ詔シテ碩學ヲ募ル、青蓮院道圓法親王、上人ヲ薦ム、上人はヲ讀ミ、詞義通暢ス、天皇其博識ヲ賞シ、周圓上人ノ號ヲ賜ヒ、又勅シテ大無量壽經ヲ紫宸殿ニ講セシム、其賞トシテ聖德太子ノ像及ヒ巨勢金岡畫ク所ノ太子傳繪八軸ヲ賜フ、上人乃チ一寺ヲ越中杉谷ニ創シ之ヲ藏ス、時ニ靈泉湧出ノ瑞アリ、因テ地名ヲ井波ト改ム、復タ詔シテ瑞泉寺ノ號ヲ賜ヒ、勅願所トナス、永享元年四月廿四日遷化ス、享壽四十四、在職四年ナリ

〔眞宗假名聖敎〕

十二古本

綽如上人、越中國井波トイフ所ニ、一字御建立、瑞泉寺ト號ス、是又勅願所ナリ、後小松院ノ御宇、明德元年ノ比、造立ナリ、始ハ同シキ國

杉谷トイヘル所ニ居ラシメマシマス、諸家ヨリ學匠文者ノムネ、崇敬申セシカハ、勤行威儀ヲムネトシ給ヒシトナリ、勅定トシテ別號ヲ周圓上人ト授タマフトナン、

〔賢心物語〕

綽如上人、京都ヨリ野尻ヘ御下向候ノヨシ、承リ傳ヒ候、若シ芝村

カ杉谷慶善ト申仁、本來ハ何所ノ人ニ候ヤ、野尻ニ居住候テ、彼ノ仁、東山殿ヘアリ、上下ヲモ申サレツルガ、慶善ヲタヨリ、御沙汰候テ、御下向アリテ、野尻ニスコシ御座候ツルガ、佛法修行ニハ、アマリニ里中ハアシキモノト仰ラレ、杉谷ノ義、慶善何トゾ有縁アリテ申上ラレ候ツルガ、スナハチ慶善御供申サレ、杉谷ヲ御覽ゼラレ、ヤガテ一字ヲ御トリタテ、御籠居ト云、其時節大唐國王ヨリ日本内裏ヘ、牒狀來リ候所ニ、彼ノ書中ニ讀マレザル文字三字アリ、シカレバ南都北嶺五山以下ノ學匠ヲ以、勅詔ヲ以テ召ヨセラレ、御尋候ヘトモ、終ニ讀ム人ナシ、然レバ、此ノ文字ヨミワケズハ、御返答モイカニ、且ハマタ日本ノ不足トオホセラレ、僉議マチ、ナル所ニ、爰ニアル人申テイハク、東山本願寺カノ仁ナラテハ心ニクキカタコレナシト申ニヨツテ、スナハチコノヨシ奏聞申サレケレバ、イソギ東山ヘ勅使ヲタテヨト繪言アルニヨリ、勅使ヲタテラレケレバ、田舎ヘ在國ト御留守衆ヨリ申サル所ニ、田舎トハイツクト重テ御尋アリケレバ、越中國ナニト申在所トクワシク答申候ヘハ、スナハチ越中ヘ勅使ヲタテヨト宣旨アリケレバ、ヤガテ當所ヘ勅使下向アリテ、イソギ御上洛候テ御參禮アレト申サレケルトコロニ、勅詔何事候ヤト、勅使ニタツネ申サレ候所ニ、右ノ子細ヲ、

ネンゴロニ申サレケレバ、文字ノコトナラバ如何ヨウノ字ナリトモ、アソバシ  
 候ハンスルモノヲト思召候ヘツルナリ、頓テ勅詔ニ應ジマシ、御上洛アリ、  
 河原毛ナル御馬ニメシテ、當寺ノ屋敷ニナリ候地、カタソフナルヤウノ野山ニ  
 テ小松ココカシコニ生テ、細キ徑一スヂアリ、カノ徑ヲ御トホリ候トキ、一字ヲ  
 モ御建立アラバ、シカルベキ勝地ト、御心ニ思召候トコロニ、大キナル櫻ノ木ニ  
 本コレアリ、彼ノ木ノ本ニテメサレ候御馬、ハタト行トドマリ、サキヘモススマ  
 ズ候トコロニ、御馬上ニテ御ヒトリゴト仰候ヤウハ、サテハココニ一字ヲタテ  
 ヨトノコトカト仰ラレ候トキ、御馬サキヘススミ申トナリ、ノチノ時ニコノヨ  
 シ人々ニ御モノ語アリケリ、御ヒトリゴトヲバ御供ノ衆ミナ、ウケタマハ  
 リ候サラニモテソノココヲエズ候ト申サレタルトナリ、奇特ノ瑞想ト云、其  
 ノチ都ヘ御ノボリアリテヤガテ御參禮候テ、カノ躰狀ヲヒラカセ申サレケレ  
 バ、則チカノ三字ヲアソバシワケ、敬感ナカ、ハカリナシ、然レバカノ返狀ヲ  
 禁中ニヲイテ、可被認ヨシ、勅詔アルニヨリ、コレヲ認ラレシニヨリ、頓テ上人ノ  
 號ヲ周圓トゾ勅號ナサレ、御褒美トシテ、越中國利波郡山田ノ郷ヲ可被施行ノ  
 ヨシ候所ニ、郷莊ナト可賜コト出家ニ不似合候ノヨシ御申候ヘ、ハサラバ何事

ユテモ御望アラバ、御申アルベキト候所ニ、當寺敷地竝ニ山林ノコト一字可有  
 興隆ニツキテ、ノゾミ申上ラルルユヘニヨリ、宣旨ヲモテ寄進ニサダメラレ、則  
 チ勅願所ニ相定ラレ候、證文ドモ有之、ヤガテ以勅詔一字興行ノ勸進帳ヲ御作  
 リアリテ、近國ヲ勸進アリテ、普請作事以下隣國ノ諸武士ニ被仰付諸侍取立阿  
 彌陀堂、太子堂、造建アリケリ、國々ノ事加賀、越中、越後、信濃、能登、飛騨、コノ六ヶ國  
 ノ衆馳走ナリ、大門、四足門、馬場、猪垣、双方ノ石倉、六ヶ國ノ武士コレヲキツキ、國  
 郡在所名字假名乗以下迄、石ニ書記シ、近代マデアキラカニ見ヘ候ツルヨシ  
 申傳候ナリ、然レハ當流ニ於テ北國ノ開山ハ當寺ナリト、蓮如上人ヲリ、被  
 仰候トナリ、

〔參考〕

〔瑞泉寺記録帳〕

御代代御系圖

○ 蓮如上人

山法印、權大僧都、中納言、依勅、號、周圓上人、時、號、曉雲、慶乘、御  
 母、權大納言、時、光、爲、子、明德、四、歲、四、月、廿、四、日、四、十、四、歲、御、往、生、

巧如上人

女子

南朝後龜山天皇元中七年 北朝後小松天皇明德元年

南朝後龜山天皇元中七年 北朝後小松天皇明德元年

四七〇

頓圓
周覺
蓮覺
蓮超
實顯
女子
教確
女子
顯惠
存如上人
空覺
如乘
女子

瑞泉寺二世、寺務、青蓮院門侶、聖光院住侶、山法印、權大僧都、中納言、公名二位、宣稱、慶阿若松本泉寺開基也、寬正元年正月廿六日、  
 四十九歲、御人、御弟、周覺、御女、法名、勝如、  
 內室、巧如、上人、御弟、周覺、御女、法名、勝如、

蓮乘 兼銀、左衛門督、童名、光養丸、蓮如上人御二男、元兩、禪寺、爲子、喝食也、本泉寺兼住、養母、勝如、禪尼、廿余年、依病氣、籠居、籠同三司繼光

之爲子、永正元年二月廿一日五十九歲、御往生、  
 內室、如乘、御末、如秀、

女子
女子
蓮欽
女子
女子
女子
了明
女子
賢心
實順
教宗

公名、兵部卿、童名、藤藤丸、周覺六男、華藏閣男、蓮實ノ治男、禪如上、  
 人、御絲也、明應五年八月廿七日、廿八歲、母、如乘、女、如秀、

兼乘、童名、幸壽丸、公名、兵部卿、修、哲、坊、蓮、欽、男、  
 天文廿一年正月五日六十五歲、蓮如上、人、御、絲、也、  
 了如、禪尼、內室、康、兼、法、印、蓮、哲、女、

南朝後龜山天皇元中七年 北朝後小松天皇明德元年

四七一

女子

賢勝

〔越中志〕

瑞泉寺 東派末寺三百五十余ヶ寺

本願寺門跡ノ連枝ナリ、本堂西向拾七間、四面中ノ五間四方、脇ノ間四間ニ五間ニシテ、左右同シ、椽側二間、玄間ノ四本柱角ニテサシ渡シ一尺三寸、椽板厚サ三寸五分、ユリ高サ五尺余、總規造リナリ、鐘樓、鼓樓、山門等ハ先年焼失ナシタリ、本堂ハ近年造レリ、此寺ノ且越加州ニ多クアリテ、越中ニハ些シ、凡三千斗モ有ヨシナリ、寺中ニ坊官侍等アリ、本山ノ外ニ坊官ヲ仕フ寺ハ、瑞泉寺而已ナリト云

後小松院明德三年、綽如ノ建立ナリ、綽如ハ本寺ヲ巧如ニ譲リテ、越中ニ來リ、彌波郡杉谷ニ隱居ナセリ、其ヲリ異國ヨリ香翰、京都へ來リシ所、能ク讀ム人無ニツキ、勅シテ、綽如ヲ召シテ讀シムル所、句々水ノ流ル、如ク有シカハ、最叡感アリケリ、其ヨリ、綽如越中ニ一字ヲ建シ、事ヲ願ハレシカハ、スミヤカニ勅許アルニヨリテ、ヤカテ越中へ歸リテ、地處ヲ見立玉フニ、井波ニ至リテ、綽如ノ乗タル馬止テ、勅カス、歸ニテ、地ヲウカツニ、忽ニ清泉涌出タリ、サラハトテ爰ニ

寺ヲ建テ、レタルニツキ、勅シテ、瑞泉寺、周圍上人ト號ヲ玉ヘシト云ヘリ、其泉今モ猶アリテ、是ヲ白浪水ト云ト云リ、什物ニハ上宮太子ノ繪傳、巨勢大納言金岡ノ筆ニテ、御銘御讚ハ、宇多天皇御震、難ナリ、表具ハ加賀中納言利常卿ノ寄附ニテ、毎歲六月廿五日拜スル事ヲ許ス、其外靈寶數品アリ、井波家數五百余アリ、

〔越中志〕

瑞泉寺 東派末寺三百五十余ヶ寺

井波 二十四輩巡拜圖會云、井波、齒杉谷山

瑞泉寺ハ、人王百一代後小松院ノ勅願所トシテ、本願寺第五代ノ別當、綽如上人建立シ、玉ヲ所ナリ、本堂十七間、四面、本尊阿彌陀如來ヲ勅願、安國ノ尊像ト稱ス、唐土ヨリ難讀難解書ヲ禁庭へ奉リケルカ、其折朝庭ノ官人誰有テ讀者ナキ所、綽如上人滯ナク、讀玉ヘシヲ、帝叡感限リナク、勅詔アリテ、今ノ精舎ヲ創建ナシ、勅願所トナシ給ヒケル、佛閣造立ノ時ニ當ツテ、奇異ノ靈水涌出セリ、ヨツテ瑞泉寺ト稱シトナン、此寺越中第一ノ貴院ニシテ、代々本願寺御門主ノ御連枝寺務シ、玉ヲ所ナリ、靈寶數品アリ、

元中九年壬申

北朝後小松天皇明德三年

八月 朔 庚戌

南朝後龜山天皇元中九年 北朝後小松天皇明德三年

佐佐木賴泰、越中守たり、

〔大日本史〕

三百八十四  
國郡司、越中守欄

佐佐木賴泰明德三年八月見

### 後小松天皇

應永七年庚辰

紀元二千六十年

三月丙寅

十二日、丑光禪寺正呈寂す、

〔日本洞上聯燈錄〕

三 光禪松岸旨淵禪師法嗣

越中州光禪德翁正呈禪師、妙年脫白、徧叩師門、參松岸於大乘朝參、暮請不捨寸陰、遂洞明心源、岸即付伽黎一頂、爲傳法信起住播之永天繼尸、越之光禪、僧問如何是學人用心處、師曰、坐臥經行、問如何是相付底事、師曰、子還就父時、父全不回顧、以應永七年三月十二日而逝、出雪庭祥燈外光二人、

應永八年辛巳

紀元二千六十二年

三月庚寅

二十四日、丑左近衛中將藤原公宣をして、越中權守を兼ねしむ、

〔公卿補任〕

非參議正三位藤原公宣、應永八年正月五日從二位左中將叙留、三月廿四日兼越中權守、○應永八年

應永十年癸未

紀元二千六十二年

三月戊寅

四日、辛僧希讓寂す、

〔本朝高僧傳〕

三十六 京兆東福寺沙門希讓傳

釋希讓字在先、越中人也、早拜龍泉涿公出家了事、去參無涯、浩頑石生月心圓相山、永諸尊宿、皆承證明、屢歷諸職、至德元年由東山第一座出主、三聖明德元年遷普門、應永戊寅秋八月、住東福病起上堂、山僧一月半、臥聞鐘鼓聲花落作綠陰、絮飛作青萍、瀉山水枯牛、角瘦荷長、國清寒山子、不甘餓飯殘羹、擬枯桂杖腕頭乏力、擬舉拂子、兩手戰栗、如來禪也、扇出、祖師禪也、吐出、阿呵々、日面佛、月面佛、五帝三皇是何物、以拂盤禪牀下座、佛誕生上堂、肌勻玉藕、水拍金盆、看々滄々、浴出搏桑、噉應永十年三



月四日寂于海藏院享齡六十九塔曰靈源有三會語錄

應永十一年甲申 紀元二千六百十四年

三月 壬寅

十七日、戊午左中將藤原實富を、參議兼越中權守と爲す、

〔公卿補任〕 參議從三位藤原實富、應永十一年三月十七日任參議左中將如元

今日兼越中權守○應永十一年の條

應永十三年丙戌 紀元二千六百十六年

洪水、飢饉

〔加越能三ヶ國御繪圖被仰付候覺書〕 ○石埭記 錄所收

庄川の事

庄川往古の小牧村之屈曲より高瀬村へ落合、河崎村江至り、小矢部川江入、鷺ヶ島村之方江流候之處、應永十三年丙戌六月、大洪水ニ而野尻川江入、夫より追々東江決流し、中村川又千保川江落合候事、

〔極性寺歷代略記〕 三 應永十三年ハ春ヨリ天下大ニ飢饉シ秋ノコロ洪水大

風未曾有ニテ諸人カナシメリ、

應永十五年戊子 紀元二千六百十八年

正月 辛亥

二十五日、乙卯立川寺大徹寂す、

〔日本洞上聯燈錄〕 二 總持峯山紹碩禪師法嗣

越中州眼目山立川寺大徹宗令禪師、肥前人也、受業於無方公、後謁峨山於總持山、問鐵牛生兒時如何、師曰、石女動梭、樞機密回、山曰、切忌道著、師擬開口、山則打師、當下有省、山晚參、舉芭蕉柱杖、師問無措、歸單不眠、至天明、倏然了悟、乃入室、通所證、山再三徵詰、當機無礙、山曰、汝徹也、因與今號、對衆證明、奉侍有年、出世、總持、然香證、峯山之嗣、澁州并益有高峰靈妙菴主、改妙應教寺爲禪居、遊師居之、師奉峯山爲創業始祖、菴主投誠參詳、至蒙許可、征夷大將軍義滿公、聞師德望、喜捨山林田莊、又越中、檀越於新川郡、創眼目山立川寺、延爲開山第一世、康曆中、攝州信官建護國寺、招竺山僊、僊推師爲始祖、所至萬衆雲臻、驟聲雷動、應永十五年正月初、示疾立川、二十五日、臨終、訓徒、畢、據禪椅、書頌曰、生死無常人不識、從前佛祖不能及、頭長三尺更是誰、萬仞峰頭獨立、擲筆而寂、春秋七十六、闍維、建塔、菴曰師子、後龍神夜夜捧燈於塔下、人咸驚嘆云、

〔日本洞上聯燈錄〕三 立川大徹宗令禪師法嗣

攝州護國寺竺山得仙禪師，姓平氏，江州清瀧人也。童卯慕佛，乘恰似宿習。九歲印施地藏菩薩像，誓欣離塵。十五告父出家，父不許，將奪其志，而強誘以欲境。年十九一夕，夢有牛頭馬頭二鬼，即驅師去，須臾到一城，鐵壁周匝，猛火熾然，中有大釜，熱湯涌沸，四面迸流。二鬼投師釜中，通身紅爛，忽有地藏菩薩，手持錫杖來，師自言：「我有何罪墮此獄中邪？」菩薩曰：「汝先誓出家，所縛塵累，不遂其志，汝若果出家，當得還人間，師諾於此。是菩薩垂錫，師捉之得出，既寤自惟，菩薩大慈救我於獄中，時至也。豈拘於此邪？其夜潛遁抵京城，拜東山大辯和尚，祝髮，服勤左右三年，辭遊方初，參永源寂室，光定、光平心齊，次依大拙能于野之吉祥，及去拙，送出門，師轉身合掌，拙擒住曰：「燒作一堆灰，後向什麼處安身立命？」師有省，又謁白翁雪于積翠，不味志于真，如後見大徹于妙應，徹多至上堂，舉洞山大師冬夜示衆有一物，上柱天下柱地，黑如漆，曰：「如何？」是箇一物師，忽豁然大悟，出衆禮拜，徹曰：「汝見什麼道理？」師曰：「獨掌不浪鳴，徹曰：「未在。」更道，師便擲下坐具，徹曰：「如是如是。」師侍六年，遂受衣法也。暨徹住總持，師典牋記，對衆乘拂，康曆二年，攝州有應久菴主，創護國寺，延師，師推大徹爲鼻祖，島山金吾傾心歸授爲外護，大相國義滿公，聞其法席之盛，將使護國，準于五山，師聞之，勉辭，應永初年，浮遊關東。

少憩上州真淨寺，野州宇都宮諸信士，創桂林精舍，請居之。四年春，住越中立川，尋董總持六年春，建江州長命寺。十五年正月，大徹寂立川，師稟遺命，董其席上堂，孟夏十五日，合眼去。初秋，今朝開眼，來把住則老，蠶吞鍼，蕪菜，放行則鳥龜吐甘露，醋合開吞吐，是什麼繫脚，概咄，佛殿階前，石獅子點頭，撫掌笑，哈哈，上堂一年，又一年，去而復始。一日，又一日，周而無涯，新年頭有佛法，野老欲得三升酒，新年頭無佛法，趙州戴去一雙鞋，佛法有無且置，今朝正節一句如何道，大平豐樂徧天下，香風和氣滿江涯，望日上堂十五日，已前，隔靴搔癢，十五日已後，劔去劫船，正當十五日，有誰著言詮，五臺山上雲蒸飯，古佛堂前狗屎天，以拂子拍禪床左右曰：「左之星辰日月，右之江湖山川，如今雲水兄弟，還識此意麼？」利竿頭上煎槌子，三箇胡猴，夜簸錢，上堂小春十五風聲惡，落葉紛飛，庭際紅，不識古今誰染作，直饒佛眼也難通，相公益欽尚，召赴京，延第，諮詢玄要，師提本分，艸料爲之，直說公不契，後數請皆稱病不應，亦松上總性，松禪閣，以攝州佛果寺稅之，使者三返，師以老病卻之，爰有永光之命，不得辭，而赴居三年，移董濃之妙應，晚檀越請還桂林，二十年正月，庭松，俄枯悴，衆皆怪焉，師曰：「世尊滅度，雙林變白，當知老僧住世不久矣。」二月，示疾，三月十八日，鬚髮沐浴，告徒曰：「明朝逝焉。」十九日辰刻，侍僧請遺偈，師書曰：「殺佛殺祖，寸陰不閑，及一息斷，直墮無間，過了也，咳，須彌走。」

入藕絲擲筆而化壽七十臘五十一塔于本山西南隅院曰祖心嗣法五人曰惟忠勤大材棟大珠龍中心忠絕深珠有語錄傳世  
羽州向川寺日山瓦旭禪師信州人也童幼受業大方和尚遊方至越之眼目山依大徹一語忽投群疑頓解徹可之命分座由是名播叢林羽州新城府主以向川關之師請大徹以爲藝祖再領總持聲聞益顯如越之洞昌與之實相諸剎皆州牧鉅公爲之延請爲第一世遂唱滅于洞昌護國竺山禪師爲師拈香曰鶴領原上難兄弟一鳴孤飛看若何隻履西歸惹嶺月光輝新發盡山河某人逸格氣宇機機應句句活接人辣手多減少少添多用捨行藏有義有命進退是非如切如磋借功明位非偏非正借位明功非自非他明皓皓處齊把玉線暗昏昏處密擲金梭背也那吒忿怒向也心切老婆此是開祖平生爲人底一句山僧即今有恁麼手段諸人須看取打圓相曰土鐵船馬載驢馱其或未然三世諸佛目證口法  
石州靈光院直菴宗觀禪師一號永高上州人得旨大徹瑞世總持移立川石州郡將周兼居士創靈光院聘爲始祖又建妙義菴爲養高之所遂終此護國竺山禪師贊師頂相曰眼目之子諸嶽之孫取塵拂則挑靈光於劫外葦鳥藤則激立川於宗門性空大虛兮心月輝潔口歸江海兮說法淵翻直儻丹青手爭堪畫根源

越後耕文寺不藏可直禪師羽州人受業曇菴依大徹于立川令看瑞巖主人公話有所入遂蒙印可初出世總持移立川越後檀越立耕文寺請爲開山

越中川德寺浩齊契養禪師肥前人初瑞世總持遷立川開山川德上堂拈拄杖卓一下曰但能一念回向定脫三乘羈鎖喝一喝下座

越中法城寺覺巖立了禪師族出日州藤氏十五歲便知有出世大事十七爲僧決志參方謁諸老宿未有所發明聞大徹唱道越中之立川不憚數千里之遠直造其門適相契向之所未明者一旦而廓然矣出世升總持移立川大開法席陶冶後昆越中檀信建法城寺爲授老之所竺山仙公題其真曰逸得容貌易寫出骨髓難筆墨不到端的普化倒退三千

越後州名立寺月桂立乘禪師與州人開法於總持移立川建名立爲始祖上堂一徑直二周遮道吾舞笏秘魔擎叉只如高提祖印不贊皇猷又且如何舉唱海國乾坤闢蓬萊日月長

越中州大川寺月江應雲禪師與州人緣契大徹越之上瀧郡將建大川寺請爲開山始祖遷總持立川僧問牛頭未見四祖時如何師曰弄巧成拙云見後如何師曰瓦解冰消

羽州龍雲寺越與丁闍禪師本州平鹿郡人母祈佛感夢而生十三落髮於羽黑山習密部屬大徹和尚說法越山改服參叩依附最久遂嗣其法後應世于總持蓋立川上堂百丈卷席秘魔孽叉南線斬猫大隨燒蛇好事不如無謝事歸里築龍雲寺逸老告寂

越中州法川寺闍堂良闍禪師能州人早從立川大徹和尚披削後嗣其法聞望漸著邑人某氏請於法川寺開朔法席鼎盛次升總持遷立川修廢整頓叢林爲之一新逾五載丐閑歸隱法川臨終示衆曰七十一年無法可說更問如何虛空片雪遂趺坐而化

播州真光寺禪室宗安禪師但州人壯出家於濃州妙應寺禮大徹令公爲師執侍十五載機語相契徹傳叢山衣竟以付師初出世總持遷立川晚開山於播州東條谷曰真光禪侶奔湊遞相策勵師嘗於婆子燒庵話頓悟深旨住後凡有來參者便舉此語驗之接機大約如此

攝州大廣寺天巖宗越禪師越中人也卅歲割愛禮切外禪師下髮圓具參實峰於能之定光峰舉欲識佛性義當觀時節因緣之語授之並頌曰舉揚時節因緣底佛性義今說不知華落鴈歸人去後柳煙漠漠日遲遲久無所契入峰指令依立川大徹至彼

理前話請益次大豁所疑自是與徹商確立奧聖靈無盡徹稱善以衣法授之越之檀信創建妙川祇樹二刹迎居焉再住總持聲名藉籍池田筑後守於攝州治內創大廣寺度請爲開山始祖上堂三世諸佛不知有狸奴白牯却知有若又薦得迦葉糞掃衣價直百千萬若薦不得輪王髻中寶不直半分錢僧問如何是祖師西來意師曰崑崙騎象藕絲牽問如何是向上一路師曰燒毒入水魚皆死毒龍行處草不生有嗣法十

一人

隅州曹溪山瑞光寺春巖祖東禪師族伴氏豫州喜多郡大野人也幼穉異常童兒戲好畫佛像甫七歲點慧超倫父教以竺墳即能暗誦宛如宿習十二授本空和尚爲童子明年夏雜髮尋受具十九歲偶讀傳燈不覺涕下便知有出生死一著子自謂古人爲法捨躬投崖飼虎斷臂立雪吾何人也便斷小指呈本空空異其志勉之南詢初參黑川月菴菴舉即今上人性話令衆下語師至夏末詣方丈曰某今日會得也菴曰爾作麼生會師曰午日無影菴曰山僧則不然師曰和尚又如何菴曰午日無影師拂袖出菴授心印師不肖直去往濃之妙應依大徹偶晚參徹舉臨濟四賓主問如何是賓中主師曰虎班易見人班難見曰如何是人班師擬議徹曰速道速道師當下釋然開悟曰我會也徹曰爾作麼生師抽身立徹歷舉數段因緣詰之皆辭對無滯徹喜曰始

知吾不汝欺也乃以曹洞宗旨授之應永庚辰竺山禪師往總持招師充首衆分座徹以法衣貽之壬午二月於隅之高山創曹溪山瑞光寺開法大弘大徹之道甲午冬示微疾撞鐘集大衆曰吾近日行腳去矣只如色身屬敗壞如何是堅固法身衆下語一僧曰色身敗壞如何是堅固法身師曰涅槃後看移頃端然坐逝應永二十一年十月廿八日也壽六十三臘五十一塔曰多寶法嗣五人曰聖柔千周景久妙清麟公越州正脈寺大成宗林禪師豐後人也契機於大徹初抵越中村椿創正脈寺棲焉再移諸嶽百廢具舉上堂紫陌紅塵十字街頭百草頭邊深山岸崖箇中無限意消息有誰知良久曰啼得血流無用處不如絨口過殘春既而謝事退處覺皇院後不知所終越中州清源寺省山妙悟禪師加州人也初參大徹聞上堂語有省後徹往立川命師分座郡人欽師道淑海慧寺延之出世總持燒香嗣大徹暮年就富山建清源寺以爲終焉之計明德二年八月一日示化遺偈曰生也恁麼死也恁麼火蛇跳煙翻水河越中州德城寺普門元三禪師羽州人自大徹一語契投服勤不怠山寂師憩滑河緇白日夕問其道者頗多就所止建德城蘭若迎居之出任總持上堂達磨不來東土二祖不往西天打麵還他州土麥唱歌須是帝鄉人後示寂塔於本寺有嗣法旨元宗一人

〔立川寺略緣起〕

越中國新川郡香積眼目山立川寺開祖大徹禪師は肥前國の産にて能登國曹洞宗大本山總持寺第二祖峨山禪師の高弟宗門五派の一祖なり景周按徹公諱は宗令澁州井建徳元年庚戌開祖貴庚四十有餘の比當國に遊歴益妙照寺登立川寺開山なりし伽藍不日に造成す略中師即ち名付るに立山寺と稱す略中開祖應永十五年戊子正月二十五日當山に圓寂したまふ享壽七十六其後當國堀江の城主土肥氏中略當刹に歸依ありて三千貫の地を寄附にて景周按國々にて少の遺ひはありなり天正十一年頃に至りては海内大かた石知行とは元龜の季益隆盛し當一派の本山をなし末派出世の道場たりしに享録天文の頃越後國春日山の城主長尾爲景信濃及及び其子謙信入道是杉輝常國へ亂入且國士郷將等分地を争ひ關業數十年止事なく竟に土肥氏も戦ひ負け其家湮祀に至れり景周按是年なるへし此時當山も兵火に罹り伽藍一時に焦土となるゆへ時の住職其遺趾に艸庵を構へ纒に古塔を守護する事年久し八九年成るへし然るに天正の季年國祖亞相管公當國を領取したまひ戰國の苛政を更張し惠業以て昇平謐如の世に恢復せしめたまひしかは今の殿宇を興造し既に滅せる慧燈を再び挑け又世に靈刹たるを知らしむ然れとも其造狀古への伽藍に比すれば十

知吾不汝欺也乃以曹洞宗旨授之應永庚辰竺山禪師往總持招師充首衆分座徹以法衣貽之壬午二月於隅之高山創曹溪山瑞光寺開法大弘大徹之道甲午冬示微疾撞鐘集大衆曰吾近日行脚去矣只如色身屬敗壞如何是堅固法身衆下語一僧曰色身敗壞如何是堅固法身師曰涅槃後看移頃端然坐逝應永二十一年十月廿八日也壽六十三臘五十一塔曰多寶法嗣五人曰聖柔千周景久妙清麟公

越州正脈寺大成宗林禪師豐後人也契機於大徹初抵越中村椿創正脈寺棲焉再移諸嶽百廢具舉上堂紫陌紅塵十字街頭百草頭邊深山岸崖箇中無限意消息有誰知良久曰啼得血流無用處不如減口過殘春既而謝事退處覺皇院後不知所終

越中州清源寺省山妙悟禪師加州人也初參大徹開上堂語有省後徹往立川命師分座郡人欽師道淑海慧寺延之出世總持燒香嗣大徹暮年就富山建清源寺以爲終焉之計明德二年八月一日示化遺偈曰生也恁麼死也恁麼火蛇跨跳煙翻水河越中州德城寺普門元三禪師羽州人自大徹一語契投服勤不怠山歿師慈滑河緇白日夕間其道者頗多就所止建德城蘭若迎居之出任總持上堂達磨不來東土二祖不往西天打麵還他州土麥唱歌須是帝鄉人後示寂塔於本寺有嗣法旨元宗一人

〔立川寺略緣起〕

越中國新川郡香積眼目山立川寺開祖大徹禪師は肥前國の産にて能登國曹洞宗大本山總持寺第二祖峨山禪師の高弟宗門五派の一祖なり

景周按徹公諱は宗令澁州井建德元年庚戌開祖貴庚四十有餘の比當國に遊歴益妙應寺暨立川寺開山なりし伽藍不日に造成す略中師即ち名付るに立山寺と稱す略中開祖應永十五年

戊子正月二十五日當山に圓寂したまふ享壽七十六其後當國堀江の城主土肥氏中略當刹に歸依ありて三千貫の地を寄附にて景周按國々にて少の進ひはあれ

りにあたる是鉢鉢等にいふ積りなり石知行になりたると元龜の季益隆盛し當一派の本山をなし末派出世の道場たりしに享録天文の頃越後國春日山の城主長尾爲景信濃及ひ其子謙信入道虎是也當國へ亂入且國士郷將等分地を争ひ鬪擊數十年止事なく竟に土肥氏も戦ひ負け其家湮祀に至れり景周按是年なるへし此時當山も兵火に罹り伽藍一時に焦土となるゆへ時の住職其遺

跡に艸庵を構へ繞に古塔を守護する事年久し入九年成るへし然るに天正の季年國祖亞相菅公當國を領取したまひ戰國の苛政を更張し惠業以て昇平謐如の世に恢復せしめたまひしかは今の殿宇を興造し既に滅せる慧燈を再び挑け又世に靈刹たるを知らしむ然れども其造狀古への伽藍に比すれば十

一に當らず、加納數十年の擾亂に支山末院も多くは他宗異派に轉離し、寺記什寶も散逸し、爾來存するものとは今僅々たり、又寛永中三世微妙公巡國したまふ時、當山に陟らせ來歴を聞しめし、當地は立川寺有て後に蔡花村有なれば、當山の山號を以て村名と爲せとの命あるより、蔡花の字を改て眼目村と書き、訓は舊訓を用ひさせたまへり、

〔立川寺紀傳〕

天正年度、富山城主陸奥守佐々成政一日安住城ヲ築ントス、神

通川ノ河伯崇ヲナシ、土木功ヲ奏シ難ク、依テ當山ニ請テ祈禳セシム、日ナラスシテ竣功ヲ告クルヲ以テ、蔡花極樂寺ノ兩村ヲ以テ寺領ニ供ス、其勳功ヲ永ク表彰セン爲メ、立山寺ノ山字ノ一畫ヲ削去リ、川字トナシ、改メテ立川寺トナシ、禪林ノ舊觀ニ復セントス、幾ハクモナク、佐々羽柴ト好カラス、遂ニ國ヲ去ルニ至ル、因テ寺領亦沒收セララル、

〔越中志〕

新川郡上

六

眼目立川寺

禪宗龍燈

待合松

越中舊事記云、大徹

和尚ノ開基ナリ、此寺造營ノ材木ハ悉ク立山權現ノ寄進ニヨルト云リ、又化女來テ傳法ナシ、其布施トシテ袈裟一具ヲ奉ル、今ニ存シテ世ニ比類ナキモノ也、龍纏ノ袈裟ト云、又大徹和尚ノ墓ハ山燈龍燈トテ海ト山ヨリ兩箇ノ火飛來テ

墓ノ左右ニ懸ル事、今ニ不絶、コノ二ツノ火相揃フマテ墓ノ側ノ松枝ニ止ル、故此松ヲ待合ノ松ト云、

應永十九年壬辰

七十二年

九月

癸未

十一日、<sup>癸未</sup>幕府、越中に棟別錢を課し、東寺修造費に充つ、

〔東寺百合古文書〕

越中國棟別堂正事、所被付東寺造營要脚也、早相觸國中、嚴

密可被執進之由、所被仰下也、仍執達如件、

應永十九年九月十一日、滿元沙彌(花押)

右衛門佐入道殿

○按右衛門佐入道、姓名を詳にせ、但畠山氏の采地越中に在り、滿家初尾張守となり、後左衛門督に進む、尊卑分脈に見ゆ、若くハ其前に右衛門佐たることを脱するか、姑く存して疑を闕く、

稱光天皇

後小松天皇應永十九年 稱光天皇應永二十六年

稱光天皇應永二十六年 二十八年

四八八

應永二十六年己亥 紀元二千七十九年

十一月 壬寅

十三日、甲寅足利義持、越中御服の地を三條坊門八幡宮に寄附す、

〔三寶院文書〕 山城

寄附

三條坊門八幡宮

越中國御服半分 方號南事

右爲近江國大柳庄替所寄附狀如件

應永二十六年十一月十三日

從一位源朝臣花押

應永二十八年辛丑 紀元二千八十二年

三月 甲子

二十六日、壬辰京都妙蓮寺日存寂す、後四年を経て其の弟日純寂す、

〔本化別頭佛祖統紀〕 十八 京兆妙蓮寺日存日純二上人傳

二師者越之中州人、姓者源氏、桃井左馬頭尙儀之弟、兩弟同志、竊出塵網、走投于龍

華霽公之室、兄呼精進房日存、弟呼好學房日純、應永十二年乙酉、罹霽公喪、不幸親  
炙日淺、霽公在世至孝、竭誠、霽公亦鍾愛殊他矣、然吾宗學業不詳、本迹勝劣之判、難  
通一貫之理、是以像尊者每言、一往勝劣、再往一致、霽公欲令二子從著至微、不越其  
級、以遂晚成大器之功、故先授漸次一往教、未及秘璽、別付之日、而逝矣、故存純二師  
唯知有勝劣、不識一致之奧、勸請法兄月明僧正、僧正哀之、時時砭之、不可偏信法執  
疑爲痼疾矣、像尊在世有柳屋妙蓮、深信優婆夷、別構淨室、時請像尊、其室未廢、兩師  
幸得之、擬寺別廬、兄弟齊志、彌慕勝劣之執、有年于茲、一時豁然通會、兄弟討論、謂先  
師勝劣之說者、中止一城大慈手段也、先師冥助歟、僧正慈善根力歟、一時兄弟身意  
泰然、快得安穩、相共走而謝僧正、僧正亂其所解、大喜而曰、今法王大寶自然而至、優  
曇華乎、猶恐後之魔障、三寶祖師前造告文、兩師喜書之、其文曰、抑案我等倒惑、依于  
迷一往勝劣手段、不知有再往一致之口授、損自損他、其暴惡積存于存純之身、冥慮  
之恐甚、銘肺腑、今懇悔謝、枉垂大悲、重存異端者、法華經中三寶諸天十女、番神殊高  
祖大菩薩、歷代祖祖冥罰不輕、失現當二世之勝利、永可隨無間地獄、仍起請文如件、  
應永二十一年十月二十五日、精進房日存花押、好學房日純花押、是皆文今現於焉  
兩師改志、行業積年、造營振力、殿堂成就、勝呼楊柳山妙蓮寺、崇像尊爲開山、大覺明

稱光天皇應永二十八年

四八九



源日露爲歷代、日存居五代位、日純居六代位、存者應永二十八年辛丑三月二十六日化、純者後改日道、應永三十一年甲辰四月二日化、法弟桂林房日隆、慧光房日眞猶無發明、凝滯勝劣、後過五年、隆者發明謝牒如傳、眞者彌走異路、本門八品之外、不誦其餘、別築本隆寺、唱揚異教而終焉、其裔迄今樹旗滔滔、嗚呼一念之微可不慎乎、兩師至信痼疾平愈、謝帖可見、故今系于正傳、

### 後花園天皇

永享二年庚戌

紀元二千九十年

六月朔午

九日、戌將軍義教、越中富山柳町の地を、側室藤原尹子に與ふ、義教薨して後、尹子、其地を二尊院に寄進して、義教の冥福を祈る、

〔二尊院文書〕

山城

以下目錄共十四通、越中富山柳町ノ件

越中富山柳町支證

一通 御教書 山徳本

文安元年五月廿五日

一通 普廣院御判

永享二年六月九日

一通 瑞春院御寄進狀

嘉吉三年十月廿八日

一通 三條殿青蓮花院内府正親町三副狀

嘉吉三年十月廿八日

二通 粉井備後入道請文

嘉吉三年十一月十三日  
寶徳二年卯月十三日

永享二年

越中富山柳町御ちきやう候へくひ（義教）

六月九日

（花押）

上らぬへ

○本書に上臈とあるは瑞春院なるべし、瑞春院は義教の側室にして正親町三條實雅の女尹子なり、又富山の稱の書に見えたるは此を以て始とあす、二尊院領の富山柳町に係かる事は、文明三年十月十六日、六年閏五月廿四日、大永八年三月廿一日の諸條に見ゆ、

瑞春院御寄進狀



貫文月別拾貫文宛定可致其沙汰候、相殘百八十貫文内六月廿四日普廣院殿様御佛事已前、伍拾貫文御月宛外又自七月至十二月六箇月中、百參拾貫文同上可究濟仕候殊、慶雲院殿瑞春院殿兩御所様御作善前、別而可致奔走候、於閏月御月宛者、以百三十貫文内拾貫文可令進納候、萬一未進懈怠儀候者、雖爲何時爲寺家可有御改易候、其時不可申一言子細者也、仍爲後日請文狀如件、  
高野五郎左衛門尉 慶宣(花押)

康正二年丙子九月五日

進上 二尊院納所御寮

永享三年辛亥九十一元二千

藤原實量、越中權守たり、

〔公卿補任〕

藤實量六十左中將、正月六日叙從二位、越階中將如元〇永享二年左中將、越中權守〇永享三年の條なり、本此の條實量に作る、左中將、越中權守、三月

日任權中納言、七月廿五日任權大納言十、〇永享四年の條、

永享五年癸丑九十三元二千

四月甲申

二十三日、丙午多田院、其造營段錢を越中に追徴せんことを請ふ、幕府、之を聽

す、

〔滿濟准后日記〕

廿三日晴、攝州多田院造營反錢用脚、去年越中國被寄了、五萬

疋可取沙汰由申處、萬疋沙汰外子、今無沙汰由、寺家歎申、早早可致其沙汰旨、可仰

付、島山云云、

永享七年乙卯九十五元二千

十一月戊辰

二十五日、壬辰幕府、河内、紀伊、越中に段錢を課し、日前國懸兩社の修造費に充

つ、

〔日前宮神庫藏古文書〕

日前國懸兩太神宮造替要脚事、以河内紀伊越中兩三ヶ國段錢、被付其足手、早守事書之旨、可被致執沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、  
(細川持之) 右京大夫

永享七年十一月廿五日

島山尾張守殿持國

嘉吉元年辛酉九十一元二千

八月乙丑

後花園天皇永享七年 嘉吉元年

島山持國兵を遣り弟持永を越中に撃つ、克たず、尋て持永僧と爲り播磨に走る、土人之を殺し、首を持國に送る、

〔建内記〕 八月十四日、又開越中國島山左馬助事、兄尾張入道向打手之處、合戦寄手多以被打云々、是兄弟私之論也、

〔大乘院日記目錄〕 閏九月五日、島山右馬佐於播州邊打止之、成高野聖云々、頭渡徳本入道方了、

〔尊卑分脉〕

島山

滿家

持國

持富

持永左馬助於越中

中生密了

○尊卑分脉持永越中に自殺すと云ふ、日記目錄と合はず、

文安五年戊辰 百紀元二千八百八年

疫癘飢饉

〔極性寺歴代略記〕

三 文安五年ハ、一國疫癘ヲ病リ、我太子ニ祈リ益ヲウルモノ數多シ、ソノ年マタ大ニ飢饉ス、

寶徳二年庚午 百紀元二千八百十年

七月癸卯朔

十六日、戊午大風雨、光怪ありて牛嶽より東北に飛ぶ、

〔康富記〕

七月十六日、戊午晴陰越中國奇異後日人々語説、今日於越中國、有不思議、大風大雨、雨中牛嶽○婦下云所ヨリ光物出、其體雲中鬼形有之、指長飛行、其間十里許也、河山草木悉損

失云々

康正元年乙亥 百紀元二千八百十五年

三月朔丙午

二十八日、西癸參議藤原綱光をして、越中權守を兼ねしむ、

〔公卿補任〕

參議正四位上藤綱光二十右大辨、康正元年正月七日從三位、九月五日轉左大辨、三月廿八日兼越中權守、同日兼造東大寺長官、○康正元年の條

康正二年丙子 百紀元二千八百十六年

五月己巳朔

後花園天皇寶徳二年 康正元年 二年